

「トラホーム」ノ明
瞭ナル區別ハアル
ト氏ニ出ヅ然ルニ
ト氏ハ死ニ臨ミ之ヲ
磨滅シテ後人ニ遺セ
セリ奇觀モ亦甚シ

急性瞼漏症ノ傳染スルヤ、當ニ同一症チ發スト雖凡、慢性瞼漏症ニ在リテハ時トソ同一症チ發セズ却テ「トラホーム」ヲ起スコアルハ敢テ疑チ容レズナドト云ヘル一派ノ人士アリ、最モ奇ナルハアルト先生ノ如キ御方ニシテ尙ホ其死ニ臨ミ慢性瞼漏性結膜炎ノ條下ニ之ヲ論ズルニ至レリ、併シ予ノ見ル所「トラホーム」ハ「トラホーム」也決シテ瞼漏眼ヨリ來ルヲナシ

豫後 初期ハ適當ノ治療ニ據リテ治癒セシムルヲ得レモ第二期ニ至リテハ瘢痕ヲ貽サズメ治スル者決シテ之ナシ、凡テ輕症ノ者ハ其早ク治癒スルト角膜ヲ侵スコ少キトヲ以テ豫後比較的ニ佳良ナレモ乳頭盛ニ續發シテ病勢強キ者ハ豫後不良ナリ、假令其治スルモ甚シキ瘢痕ヲ留メ、經過長ク角膜ノ害多クシテ不良ノ結果ヲ招致ス。病輕症ナル者ニ在テハ只上穹窿部及上眼瞼結膜ニ少許ノ顆粒ヲ發スル迄デニメ乳頭ノ發生モ盛ナラズ豫後無論甚タ可ナリ

豫防 ハ殆ド行ヒ難キト雖凡都テ分泌盛ナル患者ハ成ル可ク隔離セヨ、書生ナラバ一時其登校ヲ禁止シ、兵士ナラバ或ハ別舍ニ投ジ或ハ退營セシメ、又其家族ニ注意シテ盥器、手巾等ハ患者ト全ク之ヲ別チ且

療法

「トラホーム」ノ療法ハ一定セザレバ勢諸法ヲ述ベザルベカラズ、然レバ之ヲ概別セバ藥治療法ト手術療法ニ過ギズ、兩法トモ適症ヲ撰ビ應用セバ相應ノ効アルト疑ナシ、然レバ皆必治ノ効アリト云フベカラズ、又再發ハ豫防スルニ足ラズ

第一療法治療法

[一] 硝酸銀液 $1\% + 2\%$ ヲ用ユレバ、其奏効疑フベカラズ、併シ乳頭隆盛ニメ分泌多キ時最モ妙ナリ、乳頭非常ニ隆盛ナレバ硝酸銀桿ヲ以テ腐蝕スレバ更ニ妙ナリ、貧者ニメ日々來ルコト得ザル者ハ家用トシ、硝酸銀液ヲ與フルヲ得レバ濫用ノ弊アルヲ以テ監督ヲ要ス、

[二] 硫酸銅ハ古來尊用セラル、所也、殊ニ其結晶ヲ以テ結膜ヲ輕ク擦過スレバ、一時焼灼ノ疼痛アリテ、流涙溢出スルモ後刻大ニ輕快ヲ覺エ、適用ハ専ラ第三期ニメ分泌少ナキキニアリ、家用トシ「グリスリン」又ハ水

ニ硫酸銅ヲ解カシ、一日一回點眼セシムルモ亦可ナリ、然レニ意外ニ疼痛大ナリ、予之ヲ好マズ。

醋酸鉛ハ角膜ニ潰瘍アル際沈着ノ恐アレバ用半ザルヲ可トス。

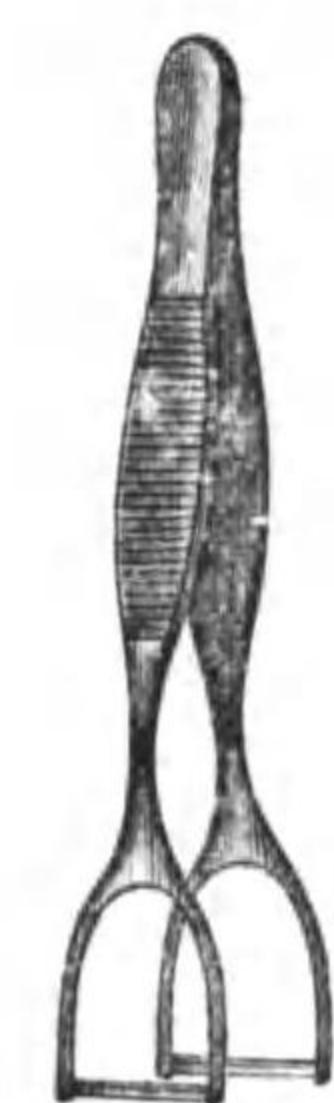
(三)「バンヌス」ノ起リテ刺戟盛ナレバ、冷罨法「アトロビン」「コカイン」等ヲ用キ一時其炎勢ノ下降ヲ待チ、腐蝕法ヲ持続スペシ、潰瘍アルモ硝酸銀ハ害ナシ、硫酸銅ハ不可ナリ。

(四)後日ニ至リ角膜翳遺残セバ、黃降汞軟膏ヲ塗入スベシ。

(五)「トラホーム」ノ治療法トシ以前膿漏眼、殊ニ初生兒膿漏症ノ膿ヲ接種シ又ハ「エキリチー豆」ノ新鮮ナル浸汁(2%~5%)ヲ以テ毎日三回結膜ヲ塗布シ劇性ノ炎症ヲ起シ治効ヲ收メタリ、然レニ兩者共角膜ニ危險ナルヲ以テ大ニ發タルモ、只後法丈ハ最近或ル改良ニヨリ多少有望ノ法タルニ至リ(詳細ハ「バンヌス」ノ章ニ於テ述ブ)。

第二手術療法 確効アリト云フベカラズ、然レニ能ク適用セバ良効少カラズ。

(一)亂切法 古法ナレニ充血アルニ用キバ多少輕快ヲ與フ。



圖九十七第

[二]カライニング氏摩擦法

昇汞水ニ綿塊ヲ浸シ、結膜面ヲ摩擦シ吸收ヲ催カスニアリ、多少良効アリト雖予ハ著大ノ成績ヲ見ズ、ヒ

ツベル氏等ガ(三週全治)ナドト唱言セラレシハ確ニ過言ナリ。

バーゲンスデツヘル氏ハ黄降汞軟膏ヲ指頭ニテ結膜ニ摩擦スルヲ賞セリ、予ハ未タ大効ヲ見ザルモ真効アルハ數々實驗セリ、硼酸末ノ摩擦モ一時賞用セラレタリ。

(三)顆粒ニ對シ一々之ヲ燒キ又ハ針尖、小匙等ヲ用ヒ箇々破壊スル者アレニ粗大ナル顆粒ニハ或ハ可ナラン、小ナル者ニハ用ユベカラズ、到底煩勞ノ小細工ニ過ギズ。

(四)顆粒壓碎法 指爪或ハ

流用セラル、ハクナツブ氏ノ車轉鉗子(Rollzange)ニテ結膜ヲ撮ミ顆粒ヲ壓出スルニアリ、顆粒大ナレバ其効アレニ小粒ハ壓出シ得ベカラズ且ツ疼痛割ニ大ナレバ西洋ニ於テハ諸人ノ是モ好ム所ナレバ、予ヤ好

マズ焉

本法ハ予ノ勸賞ニ
由リ日本一般ニ行
ハル、ニ至レリ併行
シ本ハダリエ氏ノ
法ナリ

[五] 抓擦法 穹窿部ニ「コカイン」水ヲ注射シ、西洋楊子ニ昇汞水ヲ浸シ
結膜ヲ抓擦スレバ顆粒ノ多分ハ擦去シ得ベシ、本法ハ毎々大効アリト
云ハズ、然レ凡其奏効大ナルハ予ノ確信スル所ナリ

角膜ニ「パンヌス」ヤ潰瘍アリ、疼痛盛ナル際、本抓擦法ヲ行ヒ且ツ細筆ニ硝酸
銀(強度)ヲツケ、角膜周擁ヲ塗レバ即効アリ(秘法也)
予ハ又近來バクレン氏烙白金ニテ結膜ヲ輕ク擦過シテ薄ク焼灼シ、良効ナ
見タリ、都テ乳頭繁盛ノ期ニ宜シ(秘法也)

獨乙ノ北邦ニハ大
獨行ハル

[六] 穹窿部切除法 穹窿部ニ「コカイン」水ヲ注入シ、結膜ヲ膨脹セ
シメ剪ヲ以テ其結膜ヲ淺ク切除セバ可ナリ、本法ハ顆粒ノ本據タル穹
窿部ヲ切除スルニアレバ、理ニ於テ大ニ宜シキ筈ナリ、然レトモヤコブ
ソン氏クント氏ノ如ク大効ヲ見ズ、少クトモ抓擦法以上ノ効ニ見ヘザ
ルナリ又手術モ廣ク用ユルニハ餘リ小面倒也

軟骨切除法 本法ハハイスクート氏ノ發案ニソ尊窿部ノ切除ト同時ニ軟
骨ニ横切ヲ加ヘ軟骨ノ一部ヲモ剥離シテ切除スルニアリ、創口ハ互ニ縫合
スレバ内翻症ノ恐アレバ、上創縫ニ掛ケタル糸ハ兩端共瞼緣ヲ稍離レ皮膚

當時之ヲ見シユン
ケン氏ノ說ニ往々
二十四時間ニ角膜
破潰セリト云フ

ニ出シ、縫合スルヲ可トス

「トラホーム」ハ難症ナリ。療法年々新ナリ、未タ根治ノ妙法ナシ、又手術後
ト雖尙ホ幾久シク收斂劑ヲ用キザルベカラズ、硝酸銀ヤ硫酸銅ヤ未來
永々綠ヲ斷ツ能ハザルベシ、惜哉

軍陣眼炎又埃及眼炎 Ophthalmia

militaris od. aegyptica.

本病ハ「トラホーム」ノ條下ニ附述スルヲ得レ凡今日見ル所ノ「トラホーム」トハ
自ラ差異アリ、往時「ナボレチ」^{エシフト}帝埃及遠征ノ時兵士之ニ感染シ其歸ルニ及シ
テ歐洲諸國ニ傳播シ大ニ其流行ヲ來シタル者ニシテ爲メニ失明セル者少ト
セズ、蓋シ本病ハ一ノ急性傳染病ニノ頗ル劇烈ノ症狀ヲ呈セル者ナリキ、然レ
凡百年後ノ今日其真相不明也、當時真性ノ膿漏性結膜炎モ之アリシナラン、又
「トラホーム」ト膿漏症トノ混合症モ之アリシナラン、要スルニ其ノ惡性ナル、
ハ遙カニ今日歐洲ニ存セル「トラホーム」ヨリモ大ニノ角膜ヲ侵スト甚シカリ
シニ疑ナシ、抑「トラホーム」ノ歐洲ニ於ケル「ナボレチ」^{エシフト}帝遠征前ニ已ニ存在セ

春季加多兒
固有拘泥ノ病ナリ稱名
本病ハ勿レ加多兒ト來
以本病ハ予ノ報告ヲ
初メトス

シト雖凡其大ニ蔓延ヲ爲サシメタルノ罪ハ之ヲ遠征軍ニ歸セザルヲ得ズ

春季加多兒

Frühjahrscatarrh

董本病チ
「トラン」
ト見「トラホル」
ト知セザル
ト為セルホル

第十八圖



本病ハ稀有ノ疾病ナレ凡余ハ本邦ニ於テ已ニ數々遭遇セリ、其特徴ハ角膜緣ニ接シ灰白色若クハ淡紅色ニメ膠様ナル硬固ノ隆起ヲ生ズルニ在リ、隆起ハ不整ニ半ハ角膜ニ移行ス故ニ外觀ハ「フリクトン」トヨク相類似ス、又角膜緣ヲ沿フテ廣ク侵セルキハ「バンヌス」ト誤診セラルモアラン。

眼球結膜ハ多少充血スレ凡其色汚濁ニメ新鮮活潑ノ赤色ヲ呈セズ、眼瞼結膜モ亦稍々充血ス、然レ凡多クハ上皮肥厚ノ爲メ淡灰白色ヲ呈シテ薄ク乳汁ヲ布ケルガ如シ、又其面ヲ審査スルニ「トラホーム」ニ於ケルガ如キ顆粒アリテ能ク誤診セラル(第八十圖)然レ凡其面扁平ニメ且硬固也、是レ乳頭ノ疣狀ニ隆起セル者ナリ、蓋シ角膜緣ニ變狀アルハ多ク、結膜ニ變

状アルハ少ナシ、又反テ結膜ノミ變狀ヲ呈セルアリ。患者ノ訴フル所ハ専ラ灼熱及ビ羞明ニ在リ、故ニ患者ハ喜ンデ防光鏡ヲ用キ平均毎歲春夏ノ候ニ發シ、秋冬ノ候ニ至リテ輕快ス。

原因 未ダ詳カナラズ、然レ凡十六歲以下ノ男子ニ多ク且ツ病理上ヨリ之ヲ觀レバ乳頭ノ肥厚ト結膜上皮ノ增息肥厚セル者ニシテ、疣贅ナドト趣ヲ同フス。

療法

諸藥皆ナ効ナシ、黃降汞軟膏ノ塗入、醋酸水(水二〇瓦ニ醋一割)コカ

イン水等賞用セラル、又角膜緣ノ隆起ハ燒灼スルカ或ハ銳匙ヲ以テ之ヲ抓除スレバ多少効アラン、然レ凡再發ヲ防グニ足ラズ、然レ凡年月過グレバ自ラ治スルヲ例トス、故ニ豫後ハ不良ニアラズ、内服ニハ亞砒酸又ハ鐵劑ヲ與フベシ。

發疹病性結膜炎

Conj. exanthematica

本病ハ急性發疹病、即チ麻疹、猩紅熱、痘瘡等ニ伴ヒ來ル者ヲ云ヒ、麻疹ニハ急性結膜炎ノ「フリクトン」ヲ兼有スル者少カラズ、甚シキハ稍々膿漏

報後失亦ニハ泡者初之一予ハ之ヲ年秋メテ本初明治三十
セ性眼瞼縮膜發膿トスノリトシチシニスニテ明治三十
ノ一例ハシ膜次結ノ一ケ診水患ルス

性ナルアリ、實扶的里性ナルアリ、痘瘡モ亦大概甚シキ結膜炎ヲ來シ、又
同時ニ眼瞼結膜ヤ又角膜緣ニ接シ膿胞疹ヲ發シ、而メ角膜ノ化膿症ヲ
誘起シ爲メニ失明スル者少カラズ、殊ニ病ノ恢復期ニ至リ此患アリ
療法 麻疹、痘瘡等ノ經過中ハ眼ノ注意ヲ等閑ニ附スベカラズ、眼瞼
ニハ硼酸〔ワセリン〕ヲ塗布シ、結膜ニハ硝酸銀ヲ點眼ズベシ
先年痘瘡及ビ癰瘡流行セルニ方リ醫ノ不注意ヨリシテ失明セル者多
カリシト云フ

第三章

結膜天疱瘡 Pemphigus conjunctivae

本病ハ極メテ稀有ナレバ其大要ヲ述ベシニ結膜ニ水泡ヲ發スルナラ
ンモ其上皮ハ直チニ剥離ノ灰白色ノ痂皮アル一大缺損ヲ生シ遂ニ結
膜ヲメ瘢痕狀ノ大萎縮ニ陷ラシメ、甚シキハ眼瞼ト眼球トヲメ全ク癒
着セシムルニ至ル（患者十萬人中一二名程ノ罕症ナリ）

本病ハ常ニ兩眼ヲ侵シ、同時ニ皮膚ニ於テ天疱瘡ノ存スルアリ、又ソノ

存セザルアリ、天疱瘡ニメ皮膚ニ現存セバ診斷固ヨリ容易ナリ、縱令ヒ
皮膚ニ天疱瘡ナキモ結膜ノ自然的大萎縮ニ陷ルガ如キハ本病ヲ除テ
其他ニ類例ナキヲ以テ診斷難カラズ、グレーフエ氏ハ又之ヲ自發性
萎縮症 Essential Schrumpfung ノ名ケタリ

療法 一切無効也

結膜澱粉樣變性 Amyloide Degeneration

本症ハ稀レニ觀ル所ノ者ニメオヨツチングン氏初メテ之ヲ記載セリ、其
症狀ハ結膜ニ脆弱ナル皺襞狀ノ腫瘍アリ、帶黃赤色ヲ呈シテ一種ノ光
澤ヲ帶ビ恰モ黃蠟或赤蠟ノ如ク、初メ穹窿部ヨリ起リ眼球并ニ眼瞼結
膜ニ及ボシ、半月狀皺襞モ亦能ク侵サレ爲メニ甚シク肥大スル「多シ」
レールマン氏ノ說ニ依レバ初メ結膜組織ハ細胞浸潤ニ依リ肥厚シテ
先ツ硝子様變性ヲ爲シ次テ漸々澱粉樣變性ヲ受ケ、後期ニ至レバ其變
性中、時トメ化石若クハ化骨スルトアリト云フ、然レバ他ノ諸氏ハ硝子
様變性ハ終始同性ヲ保チレールマン氏ノ說ノ如ク唯澱粉樣變性ノ前

期ヲ爲ス者ニアラズトス、予ハ日本ニ初テ最モ美麗ナル硝子様變性ヲ一少年ニ實驗シ、其切片ハ種々ニ染色シテ諸人ノ前ニ示スヲ得タリ
経過 極メテ慢性ニメ中年者ヲ侵ス
原因 不明ナリ往々「トラホーム」ト併發ス
療法 變性部ハ切除スベシ、併シ其脆弱ナルヲ以テ只タ銳匙デ搔去シテモ可ナリ、必シモ患部皆除キ盡スヲ要セズ

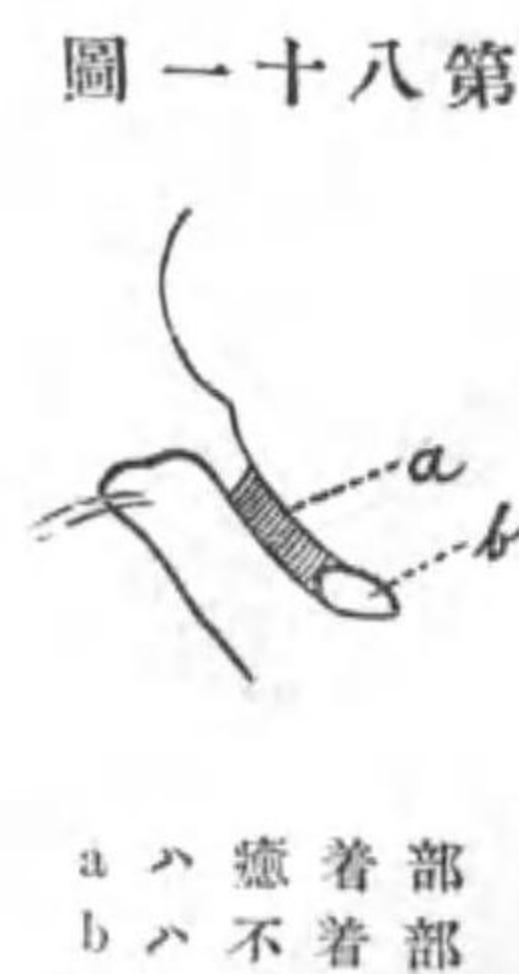
第六章

眼球癒着症

Symblepharon.

本症ハ眼瞼結膜ト眼球結膜若クハ角膜ノ新創面ト相癒着スル者ヲ云ヒ、試ニ下眼瞼ヲ牽引スレバ眼瞼ノ内面ヨリ眼球ニ直達セル索條アリテ其間ニ緊張シ眼瞼ヲ眼球ヨリ全ク離開スルヲ能ハサラシム、角膜ト癒着スル者ハ離開更ニ難シトス、

癒着廣ク且ツ深カクノ穹窿部ノ深部迄モ侵ス者ハ 後瞼球癒着症 Symblepharon posterior ト云ヒ、橋狀ニ一部丈ケ癒着セル者ハ 前



第一十八圖

瞼球癒着症

Symblepharon anterior ト云

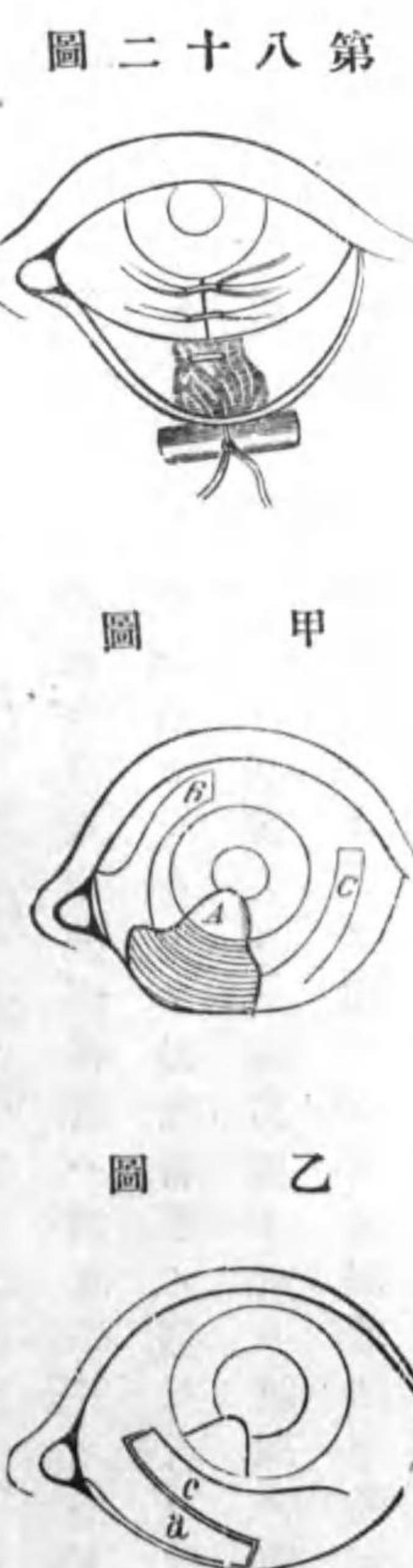
ヒ(第八十一圖)後者ハ消息子ヲノ橋下ニ通過セシムルヲ得、癒着症ノ輕キ者ハ敢テ障害ヲ爲サズト雖、其重キ者ハ眼球ノ運動ヲ妨ゲ復視ヲ起サシム、又眼球ノ運動ニ當リ

其部頻リニ牽引セラレ爲ニ刺戟症ヲ呈スルニ至ル。癒着若シ角膜ニ及ボセハ視力ヲ害スルハ無論也、重症ニ在テハ眼瞼固着ノ臉裂爲ニ開閉シ難シ、而テ其ノ全瞼球癒着症ナルニ至テハ眼瞼ト眼球ノ全面互ニ相固着シ、角膜モ之ニ加ルヲ以テ眼ノ失明ハ到底回複スベカラズ、
原因 [一]結膜ノ火傷、腐蝕等ノ後ニ多シ、結膜ノ疾患例ヘハ實扶的里、膿漏症、潰瘍等ノ爲メ續發スルコアレニ之ヲ見ルハ概シテ罕ナリ [二]「トラホーム」ノ後期ニ及ベ、結膜萎縮シテ穹窿部ノ深底淺縮シ、所謂後瞼球癒着症ヲ爲シ、下眼瞼ヲ牽引セバ眼球ト眼瞼ノ間ニ皺襞ノ許多牽張縱走セルヲ見ル [三]結膜天疱瘡ニ於テハ其上皮剥離シテ缺損ヲ生

シ創面萎縮スルニ當リ癒着症ト同様ノ状況ヲ呈シ甚シキハ角膜モ眼
瞼ト相癒合スルニ至ル

療法

〔一〕前眼球癒着症ニノ小ナレハ、其橋狀部ヲ切斷シ、數々眼瞼ヲ
眼球ヨリ離間セハ創面癒合スルノ機ナク、再癒着ヲ防クニ足ラン、アル
ト氏ノ左法ハ一時下眼瞼ヲ糸ニテ外翻セシメ置クニアリ(第八十二圖)
〔二〕後癒着症ト雖其癒着餘リ横ニ廣カラザレバ離断後兩側ノ結膜ヲ
互ニ縫合シテ創面ヲ覆ヘハ可ナリ、若シ創面大ナレバ其左右ニ(a)ト(c)
ノ瓣ヲ作り、之ヲ創面上ニ交互シテ縫合スルモ亦可ナリ(テール氏法)



第十八圖

甲

乙

乙圖)〔三〕濶大ナル癒着症ニ於テハ、其手術頗ル難ク諸人ノ最モ困窮セ
ル所ナリ、止ヲ得ズンバ移植法ニ賴リ、他眼ノ結膜、若クハ口唇ノ粘膜、或
ハ皮膚ノ薄キ上皮瓣ヲ移植セシムベシ、但シ近來大ニ諸人ノ贊成スル
所ハ下ノ如シ即チ眼球癒着ノ大ナル者ニ於テハ先ツ眼瞼ト眼球ノ間
ヲ深ク切リ離シ而テチトリツシユ氏ノ法ニ從ヒ皮膚ノ上皮瓣ヲ二片
切取シ、其一ハ眼球ノ創面ニ當テ他ノ一片ハ眼瞼ノ創面ニ當テ適宜ニ
能ク瓣ヲ布綴シ而テ兩瓣ノ間ニハ一時ノミ半月形ノ護謨板ヲ挾ミ瓣
ノ移動ヲ防キ繃帶シテ瓣ノ移植セルヲ待チ護謨板ヲ撤去ス
〔四〕前移植法ノ望ミナキ際ハ眼瞼ノ外面ニ有根瓣ヲ作り、更ラニ眼瞼ヲ
適宜内面迄デ切開シ之レヨリ瓣ヲ内チニ入レ移植セシメ後日瓣根ヲ
斷ツモ亦可ナリ、又例ヘハ下眼瞼ニ有根瓣ヲ作り、逆ニ之ヲ反轉シ、上眼
瞼ノ裏面ニ移植セシムルヲモ得ベシ、無論兩三日後瓣根ハ切斷セザル
ベカラズ(サンメルソン氏法)

結膜乾燥症 Xerosis conjunctivae

此症ハ結膜表面乾燥シテ涙液ノ湿润スルナキヲ云フ即チ患部ノ結膜乾燥シテ白色ヲ呈シ且ツ一種ノ光澤ヲ放チ、其看恰モ脂肪或ハ石鹼デモ附着セルカノ如ク、涙液ハ其ノ表面ヲ流ル、モ湿润セズ。重症ニ在テハ角膜モ亦同變ニ罹リ乾燥シテ光澤ナク、其組織モ亦透明ヲ失フ、名ケテ **角膜乾燥症** ト云フ。

本症ハ原因ニ依リ三種ヲ區別シ得ベシ

- [甲]「トーラホーム」ヲ主トシ實扶的里、天疱瘡、燒傷等ノ後ニ於ケル結膜ノ瘢痕的萎縮ヨリ起ル者アリ之ヲ **贊質性乾燥症** Xerosis parenchymatoso ト云フ。此症ニ在リテハ涙液、粘液共ニ減量シ結膜面ニハ上皮細胞、脂肪井ニ僅少ノ粘液ヨリ成レル粉末相混シ粉屑ヲ爲ス而テ角膜モ亦乾燥潤滑シテ視力ヲ害ス。療法 本病ハ不治ノ症ナリ、然レバ乳汁、**クリスリン**扁桃油、重曹液等ヲ點眼シテ乾燥ヲ防禦セバ全治ヲ得ザルモ亦角膜ノ乾燥潤滑ヲ去リテ大ニ視力ヲ回復スルノ効アリ。
- [乙]瞼裂不閉症ノ爲ニ來ル者アリ、此症ニ在リテハ瞼裂部ニ當レル結膜及ビ角膜ノ一部暴露シ其上皮乾燥肥厚シテ白色ヲ呈ス、又外翻症ナドニハ其外防禦スベシ。

瞼セル結膜モ同時ニ乾燥シテ多少肥厚ス。

療法

手術ニ依リテ瞼裂ノ閉塞ヲ回復ス、止モ得ズンバ繩帶ヲ施シテ一時乾燥ヲ防禦スベシ。

(丙) **營養不良**ニ基ケル者ハ最モ緊要ナル疾病ニノ讀者ノ特ニ注意すべキ症ナリ(一)其輕症ニ在リテハ主ニ角膜ノ外側ニ當リ眼球結膜ニ乾燥セル小斑點或ハ三角形ノ斑點アリ、之ヲ注意メ見ハ結膜上皮ノ狀恰モ細泡沫ノ乾燥附着ゼルガ如シ、此斑ヲ又**ゼートー氏發斑**ト云ヒ、其際患者ハ他ニ異常ナキカ或ハ頃來夜盲症アルヲ告グベシ(二)其重症ナル者ハ多クハ七八歳以下ノ小兒ニ來リ眼球結膜廣ク乾燥シ且ツ一面ハ少シクギラギラトメ恰モ銀屑或ハ雲母ヲ敷ケルガ如シ、而メ角膜ハ又知覺鈍麻シ、同時ニ乾燥症ヲ呈シテ薄ク灰白色ニ溷濁シ、遂ニハ或ル一部ニ浸潤ヲ來シ化膿スルニ至ル、其甚シキヤ所謂角膜軟化症トナリテ角膜全部崩壊シ急ニ失明スルニ至ル、此營養不良ニ原因スル者ニ於テハ專ラ結膜ノ上皮侵サレ、其表面ニ脂肪ノ沈着セルガ爲ニ涙液之ヲ

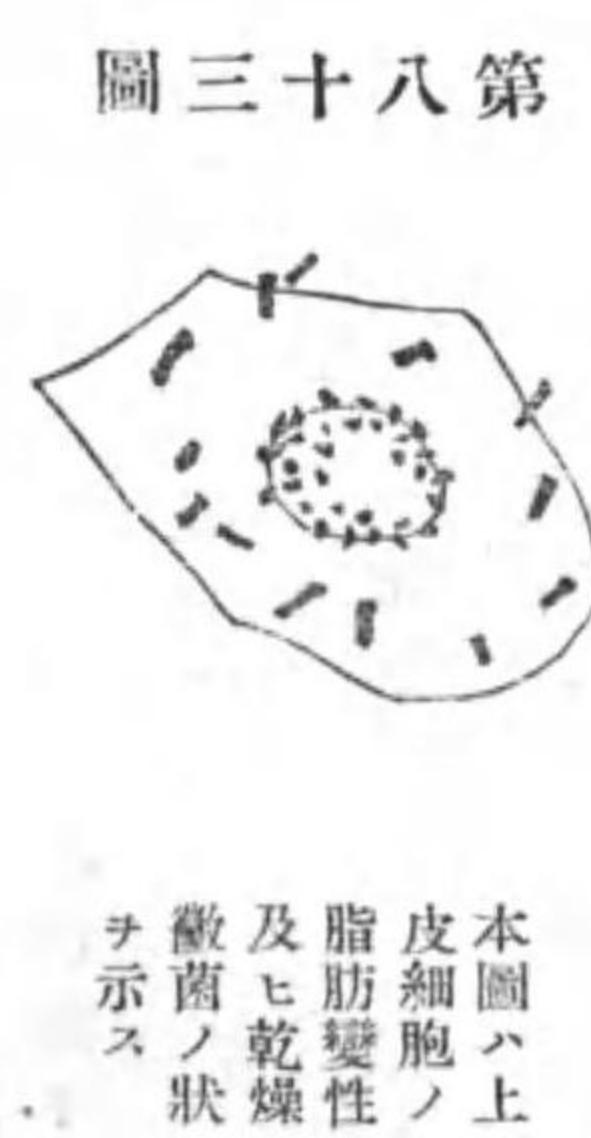
予ハ雲母斑トコソ

名ケタレ

ベ防ニ瞼
キ
縫製
ノ
法合
ラ
亦シ
左
右
時
ニ
乾燥
用
上
ユ
下

本病ノ病家ニシテ病大得意
全體最タリ明瞭ニ知

濕スヲ得ザルナリ、故ニ本症ハ特ニ上皮乾燥法 Xerosis epithelialis トモ云フ、クシユベルト氏及ビナイセル氏ハ其上皮細胞ニ一種ノ桿狀菌(乾燥菌)ヲ夥シク發見セリ然レバ是レ健康結膜ニモ亦存セル者ニメ本病ノ病原トハ何等ノ關係モナカラシ併シレーベル氏ハ本病ニ斃レタル患者ノ氣管、腎孟等ニモ亦許多ノ該微生物ヲ發見シタレバ全ク病因ト關係ナシトハ云ヒ難シ、



本圖ハ上
皮細胞ノ
脂肪變性
及ヒ乾燥
微菌ノ狀
ヲ示ス

爾他ノ眼球結膜ハ一種不快ノ暗色ヲ呈シ、且ツ極メテ弛緩シ皺襞ヲ爲シ易シ、合併症トメハ結膜加答兒「フリクトン」等存スルコアレ凡其刺戟症ハ極メテ微弱ナリ、患者ノ自覺症トシテハ夜盲症最モ多クノ、暗中ニ於テハ視力ノ不全ヲ訴フ、又視野ヲ検査セバ其狹縮セル者多シ、然レバ日中ニハ視力多ク異狀ナシ、但シ角膜ニ乾燥アルニ至レバ、無論視力害

セラル、然レバ或ル時ハ角膜ノ潰瘍來ル恐レアリテ早ヤク適當ノ療法ヲ施サズバ失明ノ危害目前ニアリ(角膜軟化症ノ章ヲ参考スベシ)本症ハ一時性ニシテ又消散ス、時々流行性ニ來リ營養不良大ニ其媒介タリ、然レバ光線モ亦大ニ害ス、故ニ監獄等ニ流行スルキハ白色ノ物體ヲ披フ者殊ニ罹リ易シ

魯國ニハ時々斷食ノ時期(二月)ニ流行シ本邦ニハ六七月ノ交ニ多シ、ガロボ氏ハ南米「ブラジル」國ノ營養不良ナル黑奴中ニ多ク之ヲ實見シテ報道セリ、故ニ又「ブラジル」病ノ名アリ

此症ハ又屢々監獄、棄兒院、養兒院等ニ流行ス、本邦ノ監獄モ亦間ミ之カ爲メニ侵レル、本症ニ罹レル小兒ハ同時ニ下利、氣管枝加多兒等ヲ疾ミ大ニ衰弱セル者多シ、又麻疹後、百日咳後、婦人ニ在テハ妊娠中或ハ產後ノ營養不良ニ多シ、本邦ニテハ機業ノ女工ニモ多シ、蓋シ日本政府監督ノ惰慢無爲ニ由ル

療法

眼ニ温罨法ヲ命シ、内服トシテ肝油ヲ與ヘバ奇効目前ニアリ、

漢家之ヲ肺癆、俗ニ之ヲ「マケ」ト云

止ヲ得ズンバ雞ノ肝臓等ヲ與フ、其他眼ハ成ルベク光線ヲ防キテ覆ヒ、下利アレバ之ヲ治スベシ、併シ肝油ハ之ヲ廢スルヲ要セズ、寧ロ之ヲ與ヘテ治スル者多シ(詳細ハ角膜軟化症ニ就テ見ルベシ)。予ハ肝油ヲ數滴ヅ、牛乳或ハ「コンデンスマイルク」ニ混ジテ與フ小兒ノ未ダ之ヲ飲マサル者ナシ、成ルベクナレバ醫ノ目前ニ於テ飲マシムルヲ可トス。

結膜翼狀贅片 Pterygium conjunctivae

本症ハ三角形ノ皺襞、眼球結膜ヨリ起リ角膜ニ走リ癒着スル者ヲ云ヒ、之ヲ分ツテ頭、頸、體ノ三部トナス、頭ハ角膜ニ附着シ、體ハ結膜ヨリ起リ、頸ハ頭ト體ノ兩間ニ在リテ消息子ヲ稍々其下面ニ通ズルヲ得、翼狀贅片ハ角膜ノ内側ヨリ起ル者最モ多シ、外側之ニ次ギ、上方或ハ下方ニ起ルハ極メテ稀レナリ。

其小ナル者ハ唯ダ外觀ヲ傷フニ止マリ、別ニ害ヲ爲サ、ルモ漸々増進メ瞳孔領ニ達スレバ視力ヲ害シ、又眼球ノ運動ヲ妨グ複視ヲ來ス者アル。

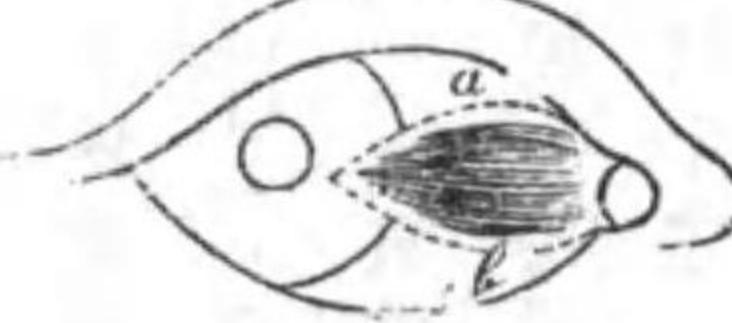
経過 極メテ緩慢ニメ患者多クハ其初ヲ知ラズ、進行スルキハ膜厚ク且ツ血管ニ富ム之ヲ**肉様翼狀贅片** Pt. carnosum ト云ヒ、一定程度ニ達シテ停止セバ血管減シテ菲薄ナル帶黃白膜ニ變ス之ヲ**膜様翼狀贅片** Pt. membranaceum ト云フ。

原因 「一」眞性ノ翼狀贅片ハ多クハ老人ニ來ル者ナリ、アルト氏ノ説ニハ角膜ニ邊緣潰瘍アリテ其治スルニ方リ結膜ヲ牽引シ潰瘍ノ進ムニ從ヒ贅片之ニ追隨ス、其角膜ノ内外兩側ニ多キハ蓋シ此部瞼裂ニ當レルヲ以テ外傷ヲ受ケ潰瘍ヲ發シ易キガ故ニシテ職工等ニ多キモノレガ爲メナリトセリ、然レバフッキス氏ノ精細ナル最近ノ検査ニ依レハ翼狀贅片ハ脂肪斑ノ變化シテ增長シ來レル者ニシテ潰瘍ト毫モ關係ナシト云フ、兎ニ角今日迄一定ノ確說ナシ。

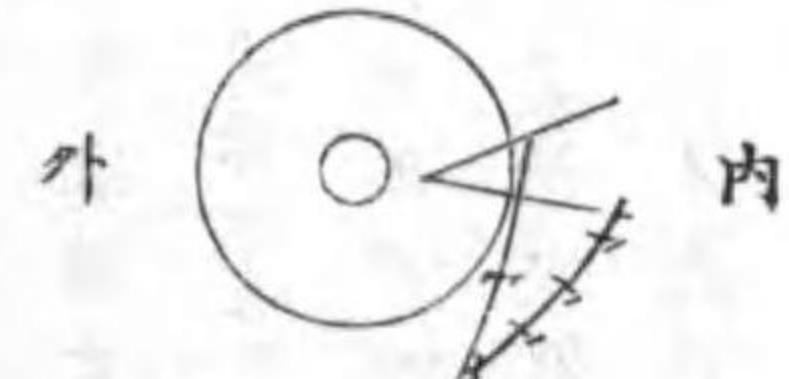
假性翼狀贅片 Pseudopterygium ハ毫モ進行スル者ニアラズ、原因ハ眞ニ角膜潰瘍ニ基ツケル者ニメ、屢々「フリクテン」若クハ膿漏性結膜炎

a ト b ノ
縫合ス
創縁ヲ互

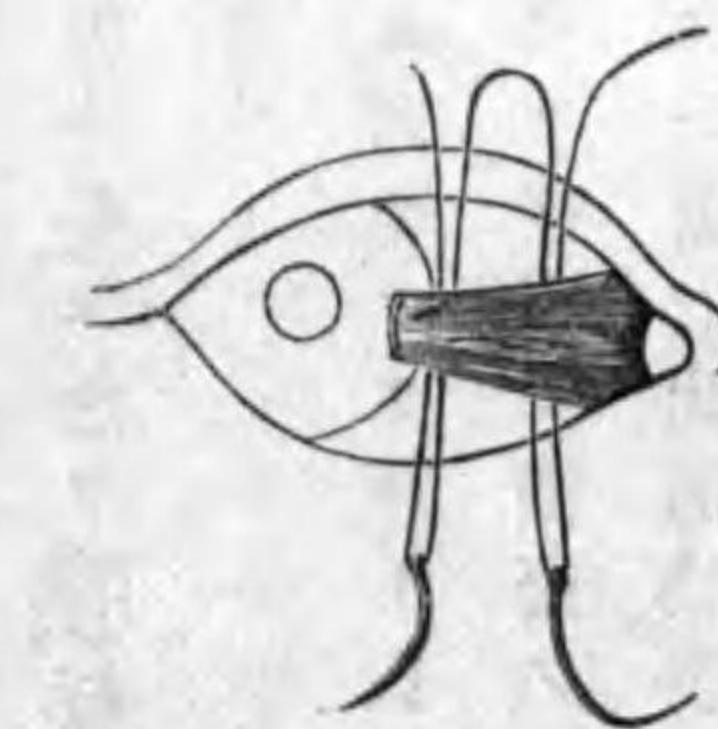
等ニ因レル角膜潰瘍後ニ發シ、其大ナル者ハ角膜ノ大部ヲ掩フニ至ル療法 [一] 切除法ハ常法ニメ贅片ノ中部ヲ撮ミ剪ヲ以テ其頭部ヲ角膜ヨリ剥離シテ贅片ヲ切除シ、結膜ノ創口ハ最モ能ク意ヲ用キテ互ニ縫合スヘシ(第八十四圖)但シ贅片ハ其根迄デ剥離シ放置スルモ亦可ナリト云フ、角膜ニ殘留セル部ハ銳匙ヲ以テ能ク之ヲ搔去シ置クヘシ



圖五十八 第四十八圖



圖五十九 第五十九圖



圖六十 第六十一圖

[二] 移植法 贅片ヲ根迄デ剥離シ、更ニ隣側ノ眼球結膜ニ、上方ナリ下方ナリ、適宜何レカニ一横切開ヲ作リ之レニ贅片ヲ嵌入シ縫合スルニア

リ(デスマル氏法)予ハ本法ヲ愛シ常法トス(第八十五圖)

クナツブ氏ハ瓣端ヲ半切シ、上瓣ハ上方ニ、下瓣ハ下方ニ移植セリ

[三] 粘繫法 一糸ノ兩端ニ針ヲ通シ、一針ハ角膜縁ニ接シ、一針ハ根蒂ニ接シテ贅片ニ貫キ(第八十六圖)而テ針部ニ於テ糸ヲ切斷セバ都合三糸ヲ得ベシ、於是各糸ノ兩端ヲ繫繫セバ贅片ハ其首尾及體下トモニ絞擗サレ壞死スベシ、然レ

ド頗ル迂遠ノ古法タリ矣

[四] ガレツヲスキ氏ハ尖端ヨリ剥離シ來レル贅片ヲ基底ノ内面ニ曲轉シテ尖端ヲコニ縫合シ而テ贅片ノ除去サレシ跡ノ創間ハ兩縫合セリ

凡テ贅片切除ノ後、角膜ニ多少溷濁ヲ遺スヲ以テ外貌上入墨必要ナルニアリ、又贅片瞳孔領ニ及ペル際ハ切除後多少溷濁遺リ視力全カラズ、翼狀贅片ハ其起ル理由モ不明ナルニ再發ノ傾向多ケレバ已ニ他人ノ數々手術セシ後ハ輕々手ヲ下ス勿レ

第五章

結膜損傷

Verletzungen der Conjunctiva

[一]創傷 切創大ニシテ創口哆開セバ能ク之ヲ縫合スベシ、小創ナレバ唯ダ防腐法ヲ行ヒ繩帶スレバ足レリ、打撲等ハ結膜下ニ溢血ヲ誘起スル者多シ

[二]異物 鹿砂、炭粉、鐵屑、蟲翼等ハ異物中最モ多數ヲ占メ其結膜囊内ニ入ルヤ眼瞼運動ニ由リテ彼此ニ轉移シ容易ニ出ルモアレハ又上眼瞼ノ裏ニ潜伏シテ容易ニ出デザルコアリ、而メ其異物ノ大ナル者ハ上穹窿部ニ入ルト雖、小ナル者ハ上眼瞼裏面ノ少シク陷凹セル部即チ臉縁ヨリ小許距ル處ニ附着シ眼瞼ノ運動ニ從ヒ角膜ヲ摩擦スルガ故ニ大ニ刺戟症ヲ發シ充血、流涙、羞明、疼痛等ヲ生ズルモ、若シ眼瞼ヲ固定セバ此刺戟症ハ頓ニ減少ス可シ、又異物ノ大ナル者ハ小ナル者ヨリモ刺戟反テ少シ、然レバ久シク穹窿ニ潜伏セバ慢性結膜炎ヲ誘起ス。近來毛蟲^{ムシ}ノ竄入シテ下方ノ眼球結膜ニ結節性結膜炎ヲ發セシ例少カラズ焰硝粉末、雞冠石ノ如キ異物ハ爆發ニ乘ジテ能ク眼球結膜ニ竄入スル

者醫ツル者ハ眼瞼轉轉ノ異物ノ出ナス知來ル
ナリ最去ハ異物ノ出ナス知來ル
モル惱能物レハナス知來ル
ナス、リザ

コアリ、又患者自ラ異物ヲ入ル、コアリテ往時ハ眼病ニ眞珠ヲ入ル、コ流行セリト云フ、余ハ曾テ一小女ノ自ラ許多ノ炭塊ヲ入レテ快トスル者サヘ見タリ、又穹窿部ノ結膜ニ稻麥等ノ芒芽竄入潜伏シ、肉芽ニ覆ハレ、時トシ其發芽セルニ至リシアリ

療法

眼瞼ヲ翻轉シ異物ノ所在ヲ定メ之レヲ除去スルノ後チ「コカイン」水ヲ點眼シ冷罨法ヲ行フ可シ、患者ニ依リテハ異物已ニ脱去スルモ尙ホ其存在スルガ如キ自覺ヲ有シ、治ヲ乞フ者アレバ宜シク注意セザル可ラズ

〔三〕火傷及ビ腐蝕

熱湯、蒸氣、熱鐵、飛火等ノ火傷、又亞爾加里、酸類等ノ腐蝕ニ由リ、結膜損傷セルキハ、其部腐蝕セラレテ或ハ灰白色或ハ白色ノ痂皮ヲ作リ、其周圍ノ結膜ハ充血腫脹ヲ起シ、已ニメ痂皮自ラ脱落シテ淺キ潰瘍トナリ、次デ肉芽ヲ生ジ瘢痕ニ依テ治癒ス。若シ眼瞼及ビ眼珠ノ兩結膜共ニ損傷スレバ其兩々相對スル所癒着スルノ恐レアリ、故ニ此ノ際ニハ屢々眼瞼ヲ剥離シテ之カ豫防セザル可ラズ

豫後 損傷ニメ角膜ニ及ボセバ視力上不良ナリ、假令又結膜ノミニ止マルモ損傷大ナルキハ瞼球癒着症ヲ起シテ眼ノ運動ヲ障害シ面白カラズ

療法 損傷後患者直チニ治ヲ乞ハ、宜シク先ツ害物ヲ去ル可シ、乃チ其害物酸類ナラバ炭酸曹達水ヲ以テ洗除ス可ク、亞爾加里性ナラバ牛乳ヲ用キルヲ宜シトス、西洋ニハ石灰ノ負傷多シ、此ニハ油類又ハ砂糖水ヲ宜トス、蓋シ糖ハ能ク石灰ト混和スレバナリ、最近アンドレ氏ハ即時ニ多量ノ水ヲ以テ石灰ヲ除去スルヲ最善トセリ、爾後ノ處施ハ「アトロビン」並ニ三十倍ノ硼酸「ワゼリソ」ヲ點眼シ、冷罨法ヲ施シ治療ヲ待ツニアル可シ、余ハ近頃安母尼亞ニ由リ腐蝕セラレシモノニ遭遇シ温罨法ヲ施セシニ疼痛頓ニ去リ却テ成績佳良ナリキ

第六章

結膜浮腫

Chemosis

本症ハ結膜下組織中ニ於ケル漿液浸潤ニシテ通常眼球結膜ニ來リ、稀

ニハ穹窿部ニ及ボス

原因

[一]麥粒腫、急性淚囊炎、膿漏性結膜炎、角膜潰瘍、全眼球炎ナド都テ近傍ニ劇症ナル炎症アルキハ常ニ多少浮腫ヲ兼ヌ、又眼窩ノ炎症ニモ伴フ、概シテ老人ノ結膜ハ弛緩セルガ故ニ本症ヲ發シ易シ
[二]蛋白尿ニ來ル、然ルキハ其反覆シ易キヲ以テ特徴トナス、
[三]鞏膜穿孔シテ前房液之ヨリ漏出シテ結膜下ニ滲溜セバ本症ヲ呈ス

療法 浮腫大ナラバ結膜ヲ亂切スルカ或ハ切除ス可シ、普通ハ壓迫綑帶ニテ足レリ

結膜溢血

Conjunctival Haemorrhage

本症ハ屢々見ルモノニシテ多クハ眼球結膜ニ來リ、其一小部或ハ大部ニ血斑ヲ呈ス

原因

[一]外傷デハ就中眼球ノ打撲ニ多シ、罕レニハ、上顎骨若クハ前額骨ノ骨傷ニ由リ血液ノ結膜下ニ來ルアリ
[二]咳嗽、嘔吐等ヨリ血管ニ鬱血ヲ來シ遂ニ破裂シテ本症ヲ發ス老人ノ血管ハ破裂シ易キカ故

ニ本症モ亦老人ニ多ク、小兒ニ在リテハ百日咳ヨリ來ル者多シ
〔三〕血
液病例ヘバ惡性貧血症、白血病等ニ自發ス
〔四〕結膜炎ノ甚シキ者ニ來
リテ、眼球結膜ノ一部ニ血斑ヲ呈シ、或ハ全部ニ汎發ス、血斑ハ一樣ニ血
赤色ナル故ニ「フリクテン」等ニ於ケル充血ト誤診スルコナシ
〔五〕手術
殊ニ斜視手術ノ後ニ多シ

療法 冷罨法若クハ壓迫綿帶ニテ足レリ

第七章

結膜潰瘍 *Ulcus conjunctivae*

〔一〕結核性潰瘍 是レ最モ緊要ナル者ニメ眼瞼結膜面ニ一大潰
瘍ヲ生ジ、其面ハ暗赤色ノ肉芽ヲ有シ或ハ帶黃赤色ニメ黃蠟様ノ義膜
ヲ呈シ、其周邊ニハ灰白色ノ小結節或ハ肉芽ノ峰起ヲ認ム此潰瘍ハ更
ニ治癒スルノ傾キナク漸々蔓延シ甚シキハ深禪シテ眼瞼ヲ穿通スル
ニ至ル、又角膜ハ同時ニ「バンヌス」ヲ發シテ視力ヲ害ス
此潰瘍ハ結膜ノ直接傳染ニ由リ發セルヲ多シトス、既ニ體内ニ結核ア
リ

療法 速ニ手術ヲ施シ患部ヲ除キ沃土「ホルム」ヲ散布スルヲ可トス
若シ時機ヲ失ヘバ内ニ傳播スルノ恐アリ、

〔二〕狼瘡性潰瘍 是レ常ニ皮膚ヨリ蔓延スル者ニシテ結核性潰
瘍ト殊ナル所ハ其一方ニ治シテ他ノ一方ニ進ムニ在リ〔其他ノ性狀ハ
結核性ト異ナル所ナシ〕
〔三〕「フリクテン」「トラホーム」天疱瘡、痘瘡等ノ爲メ、又ハ種痘液ノ闖入ニ
由リ結膜ニ潰瘍ヲ生ズルコアリ
〔四〕實扶的里腐蝕等モ亦能ク結膜ニ潰瘍ヲ發ス

初膜狼瘡ニ來リ眼瞼及
明於報告メテ實驗シ者及
三ル是見レ年ナ日本之ニチ予結

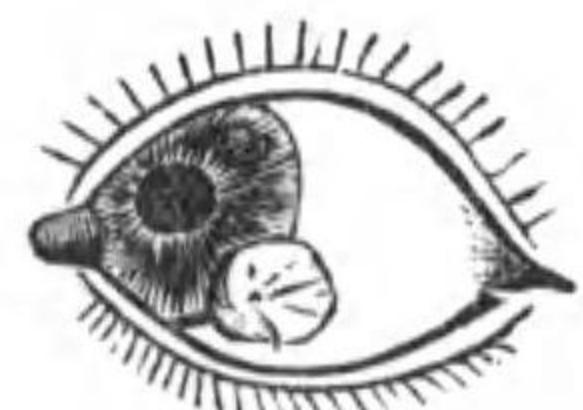
[五] 梅毒性潰瘍 結膜ニ護謨性潰瘍アルハ罕レナリ之レニ反シ接吻若クハ涎液ニヨリ病毒感染シ眼瞼縁ヨリ硬性下疳ノ發シタル例ハ少トセズ

結膜ニハ又梅毒ノ爲メ「トラホーム」様ノ結節散在スルアリ注意ヲ要ス

結膜腫瘍 Geschwülste der Conjunctiva

角膜トシ眼瞼ノ一部

第八圖



[一] 脂肪斑 Pinguecula ハ老人ニ多シ常ニ角膜ノ内方或ハ其外方ノ結膜ニ生ジテ帶黃白色ノ稍ヤ隆起セル斑點ヲ爲ス、是レ結膜弁ニ其上皮ノ肥厚セル者ニ過ギズ、通常害ヲ爲サズ、若シ大ニメ外觀ヲ損スレバ之ヲ切除スペシ

[二] 皮樣腫 Dermoid ハ角膜ノ下外側縁ニ多ク牛バ角膜ニ半バ眼球結膜ニ亘リテ着坐スル一皮片ニメ(第八十七圖)皮膚ト組織ヲ同フシ硬固ニメ白色ナリ、其深部ニハ間々軟骨ノ小片ヲ含有ス、其上面ニハ往々毳毛或ハ長毛ヲ具フ、其發スルヤ先天ニメ同時ニ眼瞼缺損症ヲ兼メルコアリ、レマツク氏ハ之ヲ胎生學上外胚葉ノ一部内翻セルヨリ來ル者トシ、ソンドウイス氏ハ羊膜ノ壓迫ニ依テ眼瞼ノ一部眼球ニ

癒着セルニ由ル者トセリ、後說ハ大ニ理アルカ如シ、(然レニ本理ハ不明ナリ)屢々先天性脂肪腫ト合併ス

療法 眼球ヨリ腫瘍ヲ切除シ結膜ノ創面ハ之ヲ縫合スペシ

[三] 脂肪腫 是レモ亦先天性ノ腫瘍ニメ色ハ帶黃白色ニメ一見囊腫ノ如ク、上直筋ト外直筋トノ間ニ於テ眼球結膜下ニ發ス、大ニメ外貌ヲ損セバ結膜ヲ切開シテ之ヲ除去スペシ

[四] 癌腫 ハ皮癌トシテ眼瞼ヨリ蔓延シ或ハ角膜緣ニ發スル者アリ、後者ハ初メ一見「フリクトン」ト相類似ス然レモ病ノ長久ナルト、又患者ノ年齢ニ依リ其非ナルヲ知ルニ足ル、既ニシテ腫瘍稍々隆起シテ破潰シ以テ潰瘍ヲ爲スニ至ル而メ其蔓延スルヤ角膜ハ鞏膜ニ比シ抵抗力ク且ツ穿孔シ易シ

[五] 肉腫 ハ恰モ息肉腫ノ如ク隆起シ常ニ黒色ヲ呈シ、多クハ眼球結膜ノ母斑ニメ細キ根蒂ヲ有シ、其質ハ軟性多ク硬性ハ少シ、時トノ増大シ膿裂ニ露出スチ常トス、近來白色肉腫ノ例アリ報告セラル

療法 速ニ切除シテ根蒂ヲ燒盡シ、若シ已ニ大ナラバ即チ眼球ヲ摘出ス可シ

[六] 息肉腫 ハ或ハ眼瞼結膜或ハ穹窿部或ハ半月狀皺襞ヨリ發スル一小腫瘍ニメ常トス、近來白色肉腫ノ例アリ報告セラル

時トシテ非常ニ大

ナル息肉腫アリ

結膜ノ角膜ニ附着

セル所ニ最モ多シ

也結織多キ脂肪腫

囊腫ハ又囊蟲ヨリ
來ルアリ

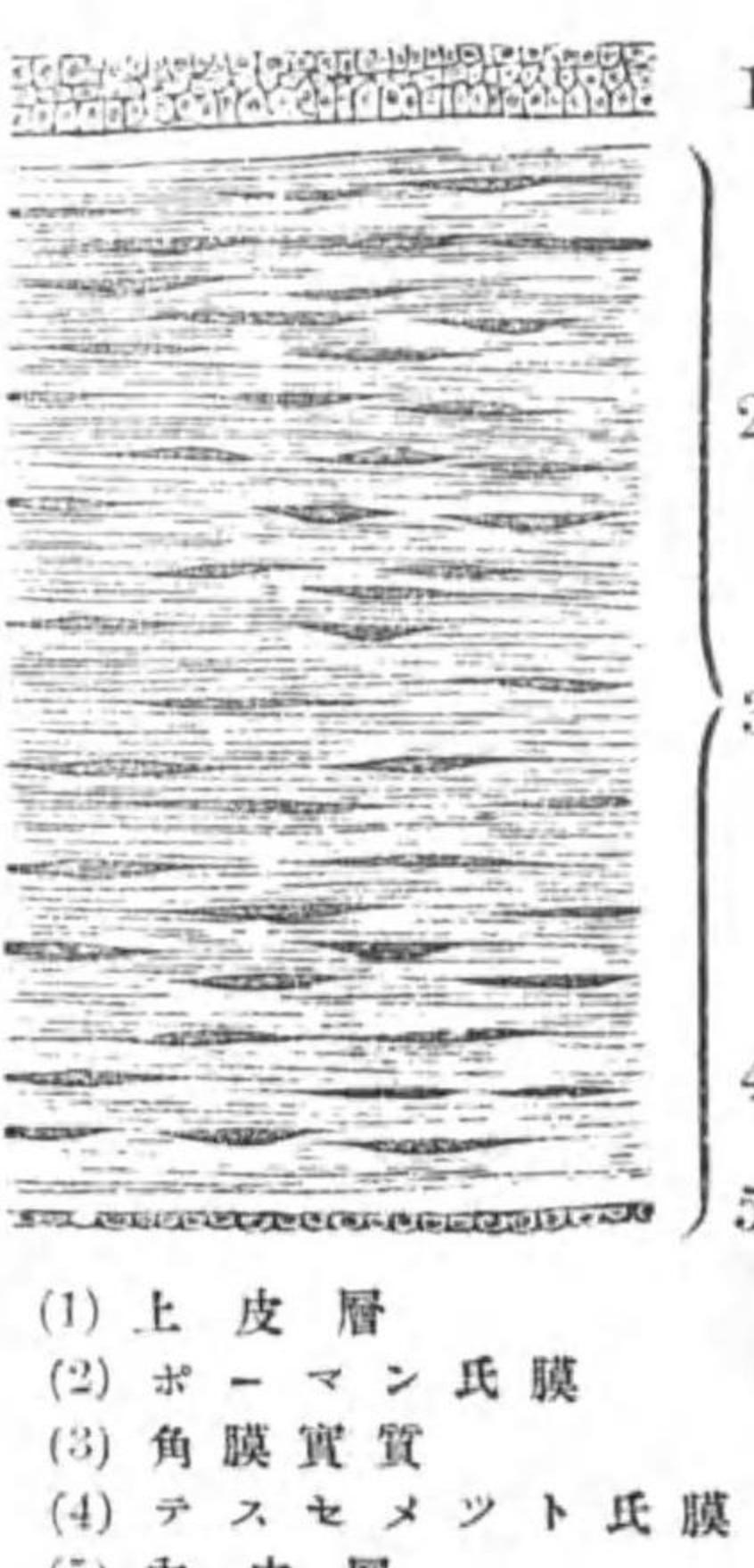
〔七〕肉芽腫 ハ、穢粒腫ノ内方ニ破レ之ヨリ肉芽ノ起レルニ由ル、其他種々ノ手術後ニ於ケル創面ヨリ發シ、久時ヲ經レバ息肉腫状ヲ呈スルモノ、之ヲ放置セバ終ニ自ラ絞撓シテ脱落ス、本病存セハ分泌多キチ以テ結膜ノ手術後ナドニハ注意シテ速ニ去ルベシ

療法 腫瘍大ニメ自ラ脱落セザレバ之ヲ切除シ、爾餘ハ硝酸銀ニテ腐蝕ス可トアリ
 〔八〕血管腫 ハ通例眼瞼皮膚ヨリ波及スル者ナリ、然レ毛間々眼瞼結膜ニ見ル可シ然ラズンバ惡性腫瘍ノ基礎トナルアリ
 〔九〕疣贅 眼瞼結膜ニ多シ殊ニ能ク涙阜ヨリ發ス、宜シタ速ニ十分之ヲ切除ス
 〔十〕囊腫 ハ一間々實見スル所ニメ眼瞼結膜ニ淋巴管ノ擴張メ念珠様ニ並列シ透明ノ小囊腫ヲ爲スアリ〔二〕又外傷ニ基キ或ハ先天的ニ囊腫ノ結膜下ニ来るアリ〔三〕結膜ノクラウゼ氏腺等ニ排泄閉塞シテ囊腫ノ起レルアリ
 〔十一〕結膜結石 Lithiasis ハマイボーム氏腺ノ閉塞ヨリ來テ分泌物ノ蓄留乾燥シテ石灰變性セル者ヨリ成リ、眼瞼殊ニ上眼瞼ヲ翻轉シテ結膜ヲ檢スレハ黃白色ノ小斑點ヲ認ム、其斑點ノ高キ所ハ角膜ヲ刺載ス
 療法 異物針若クハ小刀ノ頭ニテ切開シ、結石ヲ除去スペシ

第五編 角膜諸病

解剖要領

角膜ハ眼球ヲ被覆スル鞏膜ノ前部ニ於ケル透明ノ膜ニノ前方ニ彎曲ス、其度ハ半徑七・七密迷ニシテ其形ハ正圓ヨリ稍椭圓ニ近ク大約横徑ハ十一・五密迷、縱徑モ畧ホ、十一密迷、厚徑ハ一密迷ナリ、角膜ガ鞏膜ニ接合スル部ヲ角膜縁或ハ鞏膜縁 Limbus cornutus.



第十八圖

sclerae ト云ヒ、此境界ニ於テ鞏膜ハ斜ニ角膜ヲ覆ヒ漸次其面ヲ超ヘテ移行スル故ニ角膜ノ後面ハ前面ヨリ廣シ殊

ニ其上緣ニ於テ然リ

角膜第八十八圖ハ其實彈力ニ富ミ組織學上之ヲ分チテ三層ト爲ス

第十八圖



[一]表層 此層ノ上皮ハ平ニ重疊セル扁平細胞ト圓柱細胞トヨリ成リ、甲細胞ハ其ノ上層ヲ占メ、乙細胞ハ其下層ヲ占メ、透明無纖ノ前彈力膜所謂ボーマン氏膜ノ上ニ固着ス。

[二]深層即チ中層 此層ニハ纖維膠着シテ纖維束ヲ爲シ、束々互相重疊シテ全層ヲ爲ス、其板束間ニハ四方ニ通セル淋巴道アリ、諸所ニ於テ骨小體様ニ濶大シ液腔ヲ形成ス、之ヲ角膜小體 Hornhautkörperchen ト云フ(第八十九圖)。

其腔ノ内面ニハ橢圓形ナル不動固着ノ細胞アリ、核ヲ有ス、之ヲ固定角膜細胞 fixe Hornhautzelle ト云フ、此他又淋巴道中ニ所々圓形ノ遊走細胞ヲ見ルコアリ、是レ蓋シ素ト血管ヨリ來ル者ニメ角膜固着ノ者ニアラズ、
[三]後層 此層ハ透明無纖ノ後彈力膜、所謂デスマット氏膜ニメ其裏

面ハ單層ノ内皮ヲ以テ被ハル、蓋シ内皮ハ單層ノ扁平細胞ヨリ成ル所ニメ周圍ニ至リ、櫛狀韌帶ヲ沿フテ虹彩ノ前面ニ移行ス。

結膜層

今胎生學上ヨリ角膜ヲ視ルニ其表層ハ結膜ヨリ化成セル者ニシテ又ト云ヒ、結膜炎ヨリ續發セル角膜炎ハ多クハ此層ニ發ス、ワラダイ氏ノ説ニ角膜ノ周圍ニ於テハ中層ノ前層モ亦此層ニ編入スペキ者ト云フ。中層ハ主トメ鞏膜ヨリ變化セル者ニメ、又鞏膜層ト云フ、後層ハ葡萄膜ヨリ變化セル者ナルヲ以テ又葡萄膜層ト云フ、故ニ此層ノ疾病ハ多クハ脈絡膜若クハ虹彩ヨリ續發ス、ワラダイ氏ハ中層ノ中ノ後層ヲモ亦此層ニ編入スペキ者トセリ。

角膜ハ神經ニ富ミテ末梢ハボーマン氏膜ヲ穿貫シテ上皮細胞間ニ分佈ス、神經ノ角膜ニ進入スルヤ、鞘被ト髓質トヲ脱シテ唯ダ軸索トナル、故ニ角膜ノ知覺ハ極メテ過敏ナリ。

角膜ハ血管ヲ有セス、蓋シ其營養ハ專ラ前毛樣血管ノ末梢ト眼球結膜ノ血管ヨリ來リテ即角膜周擁ノ血管簇ヨリ經營セラル、者ナリ、レ

レーベル氏ハ房水
ニモ角膜ニ浸淫
セストス
テ、兩液中ニ含有
相セル結晶質ノ物質
交換スルヲ云フ

ベル氏ノ説ニ依レハ後面ノ内皮細胞ハ固有ノ機能アリテ房水ノ浸入ヲ許サマレバ、若シ内皮ノ破損或ハ壞死スルアレバ房水直ニ角膜ニ浸入シ之ヲ溷濁膨脹セシム、又ブリュグル氏ハ角膜ノ周圍ヨリ流入セル淋巴液ハ前房ニ流ル、者トセリ、然レバ異論モ亦多ク、結局角膜ノ淋巴液ハ周圍ヨリ來リテ又周圍ニ流出セル者ト信スル人多シ、「アトロビン」等ノ前房ニ入り虹彩等ニ作用スルハ交流力ノ作用ニ從ヒ角膜ヲ通シ前房水ニ交入セル者ト知ルベシ。

第一章

角膜炎 Keratitis

角膜炎ノ特徴ハ角膜ノ溷濁ニシテ或ハ表層ニ或ハ中層ニ或ハ後層ニ在リ。表層ニアル者ハ多クハ點狀ニ發シ角膜面ニ不正ノ凹凸ヲ起シ結膜病ヨリ來ルヲ常トス。中層ニ來ル者ハ點狀ヲ爲ス罕レナリ。多クハ汎發性ニシテ惡液症ニ起因ス。後層ヲ犯ス者ハ多クハ續發的ニシテ虹彩炎、毛様炎等ニ合併シ點狀溷濁ヲ爲スヲ以テ常トス。以上三層ノ犯カサ

ル、ヤ必シモ常ニ全ク相判別セザレバ病因所在、狀況ノ大體ニ就キ表層炎、中層炎、及ビ後層炎ヲ區別スルハ敢テ不當ト云フベカラズ。

病理上溷濁ノ原因ハ種々ニシテ時トシテハ粗織中ニ於ケル石灰、脂肪、「ミエリン」硝子様變性等ノ變質ニ基キ或ハ淋巴液ノ蓄積等ニ據リナガラ由來角膜炎ノ名稱ヲ製用セル者アリト雖モ眞ノ炎性溷濁ハ専ラ細胞ノ浸潤ニアリ、而シテ其細胞ノ由來ニ就テハ古往今來諸説紛然トシテ未ダ定説ナキモ必竟或ハ病毒ノ喚起ニ應ジ角膜周擁ノ血管簇ヨリ白血球(遊走細胞)出デ角膜組織内ニ遊走集積シテ浸潤ヲ爲スト説キ或フニ兩説共ニ悉ク理アラン、然レバ遊走細胞ノ集積ヨリシテ浸潤ヲ來ス者多キニアラン、而メ此浸潤ハ或ハ自ラ吸收セラレテ全ク消散シ、或ハ纖維ニ變ジテ即チ硬化スルアリ、或ハ進デ膿瘍トナリ、或ハ破レテ潰瘍ヲ呈出ス、蓋シ斯ノ如ク差異アルハ一ハ病毒ノ性状ニ、一ハ角膜營養ノ良否ニ關スル者ナラン。

角膜ノ破潰サレタル部ハ其治癒スルニ當リ新生結織ノ依リ缺損ヲ補修シ、上皮ヲ以テ之ヲ覆フ、然レバ角膜ニ於ケル上皮ノ發生ハ結織ノ發生ヨリモ比較的速カナルヲ以テ結織ノ未ダ發生セザルニ先チ上皮ノ缺損部ヲ覆フヲ常トス、但シ其部ニシテ稍々平ニシテ透明ナレバ名ケテ之ヲ磨滅症 Facette ト云フ

角膜炎ニハ血管ノ進入セル者多シ、此レ眼球・結膜ノ血管或ハ角膜周擁ノ血管簇ヨリ新生シ來ル者ニメ其發生ハ或ハ炎症ノ前進ヲ徵シ或ハ其退行ヲ豫告ス。殊ニ潰瘍ニ血管ヲ新生スルハ善兆トス。此等血管ハ炎症ノ退却ニ從ヒ消散ス、然レバ殘留セル溷濁ヤ又瘢痕中ニハ一見血管ナキガ如キモ中々其消滅シ難ク、些少ノ刺戟ニモ容易ニ充血シ來リテ其存留不滅ヲ示スヲ常トス

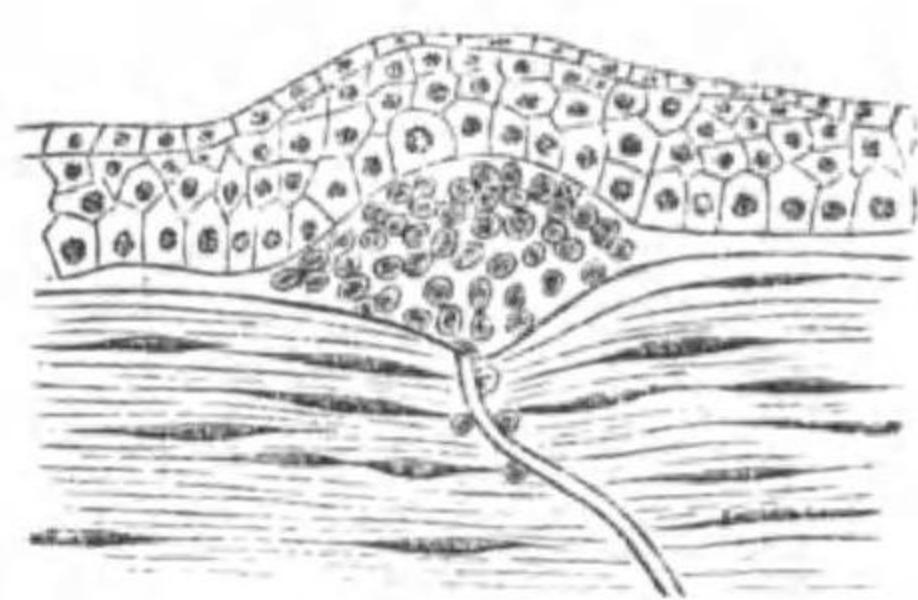
[甲] 無膿性角膜炎
第一 表層角膜炎

水泡性角膜炎 Keratitis phlyctaenulosa

腺病性角膜炎 Keratitis scrophulosa

本症ハ表層角膜炎中最モ多キ症ニメ其特徴ハ角膜表面ノ一部殊ニ其中部ニ於テ灰白色ノ點狀浸潤即チ「フリクトン」ノ一箇或ハ數箇散在スルニアリ、抑々該「フリクトン」ハ其初メニ於テ第九十圖ニ示セルガ如ク上皮トボーマン氏膜トノ間ニ細胞ノ密集シテ一團ヲ爲セルニアリ、然レバ容易ニボーマン氏膜ヲ破リ角膜ノ實質組織間中ニ入り、其甚シキヤ遂ニ角膜ヲ前後ニ破潰スルニ至ル、右ノ次第ナレバ「フリクトン」ヲ水泡トハ云ヒ得ザルナリ

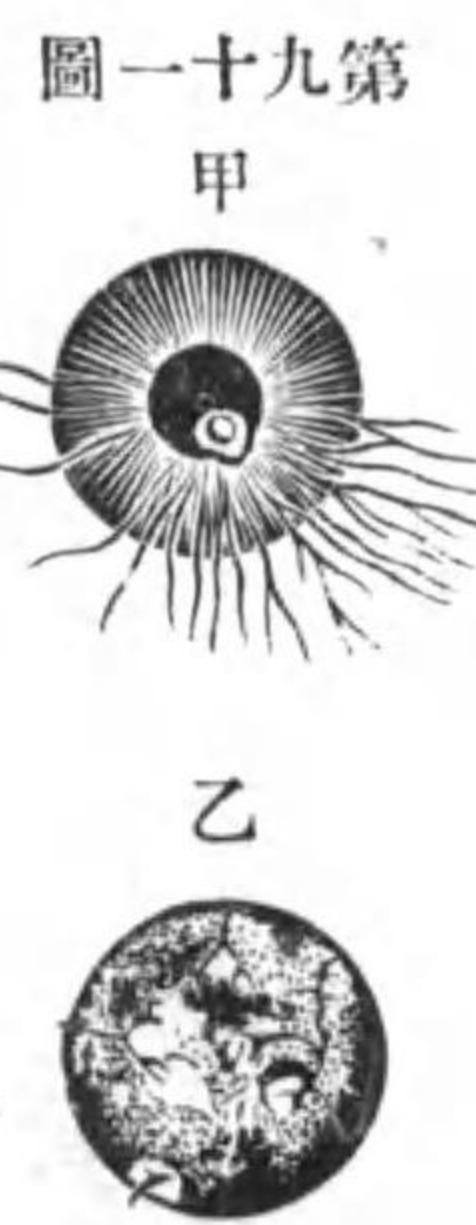
本症ノ現ハル、ヤ刺戟症甚ダ盛シニメ結膜殊ニ角膜縁ニ接シテ充血暴起シ、其刺戟症最モ甚シキ片ハ結膜全般充血シ、往々膿漏性分泌ヲ生



十九圖

ズルニ至ル、腺病性ノ小兒ニ於テ殊ニ甚シ
自覺症 瞻明最モ甚シク小兒ハ光線ヲ恐レテ頭ヲ垂レ室内ノ暗處ヲ撰ミテ潜居シ、或ハ俯首メ終日之ヲ舉グルヲ能ハズ、眼筋ノ痙攣症モ亦甚タシク獨リ患者自ラ眼ヲ開クヲ能ハザルノミナラズ、他人モ亦容易ニ之ヲ開クヲ得ズ故ニ角膜ノ現狀ヲ詳ニセント欲セバ須ラク

先ツ「コカイン」ヲ點眼シ指頭ヲ以テ輕ク眼瞼ヲ提舉ス、小兒ニ在リテハ此法モ亦行フヲ能ハズ、然ル片ハ兩手ノ示指ヲ上下ノ臉縫ニ置キ強テ開瞼ヲ試ミ、止ヲ得ズンバデスマル氏開瞼器ヲ用半尙ホ十分ナラザレバ輕ク麻酔法ヲ行ヒ檢スペシ。本症ニハ又流涙甚シク爲メニ、眼瞼濕潤シ、外眥ノ如キハ能ク裂瘡ヲ起シ、眼瞼ニハ濕疹ヲ生ジ易ク、又眼筋ノ痙攣強盛ノ爲メニハ瞼裂緊閉シテ涙液内チニ鬱積シ、開瞼ヲ試レムバ乃チ熱水噴出スルアリ、然レモ亦刺戟

圖一十九第
甲圖一十九第
乙

症甚ダ少ナク患者往々自ラ角膜ニ異常アルヲ知ラヌ者アリ

経過

通常短キ者ニシテ發疹ハ小時ノ後消散シテ全ク治癒スト雖凡亦再發シ、動モスレバ破潰シテ一小潰瘍ヲ爲シ(第九十一圖甲)時トシ前房蓄膿症ヲ來スニ至ル。通常潰瘍ノ癒後ハ僅微ノ白翳ヲ呈スレバノ若シ潰瘍稍大且深ナルキハ所謂磨滅狀ヲ爲スカ、或ハ稍大ナル白翳ヲ留ム、又罕レニハ潰瘍深行シテ角膜ヲ穿孔シ虹彩脫出シテ其癒着症ヲ來スコアリ

本症ハ其發疹一二箇ニ止ルアリト雖凡元來一時ニ簇生スルノ性アリ且其ノ再發スルヤ往々曾テ發シタル部ニ生ジ必シモ新部ヲ撰ブ者ニアラズ故ニ其ノ殘翳上ニ頻回反覆スルトキハ白翳ヲシテ益濃厚ナラシメ、遂ニハ甚シク視力ヲ障害ス、又發疹ノ反覆甚シキトキハ角膜ノ全面溷濁シテ之ニ血管配布シ所謂「フリクトン」性「パンヌス」*Pannus phlyctenulosa*(第九十一圖乙)ヲ爲スニ至ル

本病中殊ニ一二ノ注意スペキ種類アリ

リ形虹ノ邊緣脱出状態示す者
ノ彩脱潰瘍破角膜變者ナラバ

圖二十九第



圖三十九第



(一) 水泡性邊緣潰瘍角膜炎 角膜邊緣ニ接シ好ンデ孤獨ノ大「フリクテン」許多簇生シテ血管之ニ配布スル者ヲ云フ、同時ニ其ノ部ニ隣接シテ「フリクテン」性結膜炎アル者多シ

(二) 水泡性邊緣潰瘍 角膜邊緣ニ接シ好ンデ孤獨ノ大「フリクテン」發生シ、其潰瘍トナルヤ深行シテ角膜ヲ穿孔シ虹彩箱入スル者多シ故ニ又惡性膿泡疹ノ稱アリ(第九十二圖)

三 芒把狀角膜炎 Keratitis fasciculosa

(第九十三圖)此症ハ先ツ角膜ノ邊緣ニ一向ヒ進行スルニ從ヒ血管之レニ追従シ、其狀恰モ彗星ニ似タリ、而シテ治療後其徑路ニ細長ノ薄翳ヲ貽シ、其首頭タル浸潤部ハ馬蹄狀ノ潰瘍ヲ爲ス者多シ、

(四) 深部浸潤 結膜又角膜ニ「フリクテン」アルニ乘シ、夫レニ接シテ角膜ノ實質ニ灰白色ノ濃厚ナル浸潤發スルアリ、其歸轉ハ吸收自消ニアル

豫後 本症ハ消散シ易キモ亦再發シ易クシテ久シク全治シ難ク、且ツ角膜翳ヲ遺シテ視力ヲ妨害スルノ憂アリ

原因

(一) 腺病質ハ其主タル原因ナリ、是レ腺病性角膜炎ノ異名アル所以ナリ (二) 麻疹後、室扶斯後、產後等ニ起リ易シ (三) 月經不調 (四) 健康者モ亦本症ニ罹ルヲアレバ治シ易ク亦再發少シ (五) 局所的刺戟モ亦原因ヲ爲ス故ニ「トラホーム」ニ本症ヲ發スル多シ (六) 氣候ノ變化ニ因リテ發ス

之外皆ニ製瘡アラバ
之ヲ腐蝕スベラバ

膜下症
モ炭酸〇、
ア水アリ
注入スノ

マズンバ硝酸銀桿若クハ焼灼電氣ヲ以テ其頭首ヲ燒キ又銳匙ヲ以テ頭首ヲ搔除スルモ亦可ナリ。[五]本症ハ治癒後ト雖凡甘汞或ハ黃降汞ヲ持重ス可シ又唯ダ羞明ノミ遺ラバ顏ヲ冷水中ニ入レ開眼セシムベシ其甚シク不治ノ時ハ外皆切開ヲ施スベシ。[六]角膜ニ「フリクテン」出テ羞明、流涙、眼瞼痙攣症等容易ニ去ラザレバ予ハ麻酔ヲ行ヒテ眼瞼ヲ翻轉シ穹窿部ノ結膜ニ蒸餾水ヲ注射シテ十分膨脹セシメ西洋楊子ヲ以テ結膜ヲ抓擦シ且ツ角膜ノ周擁ニ強硝酸銀ヲ塗布シテ大抵ハ即効ヲ見タリ此レ予ノ秘法ナリ。

全身療法トシテ營養不良、又天質虛弱ナラバ強壯劑、滋養劑ヲ與フ暗室ノ閉居ハ不可ナリ宜シク清鮮ノ空氣中ニ遊歩セシムベシ。

角膜「ヘルペス」*Herpes cornae*

[一]熱性「ヘルペス」*Herpes febrilis* ハ熱性症、殊ニ氣管枝炎、肺炎ノ如キ呼吸病ニ伴ヒ、口唇「ヘルペス」ヲ生ズルト共ニ間々角膜ニ澄明微細ナル水泡ノ一群ヲ發生シ(第九十四圖)劇甚ノ刺戟症即チ羞明、流涙、疼痛

圖四十九第



等ヲ發ス、已ニシテ水泡容易ニ破潰シ、二三週日ニシテ治癒シ、痕跡ヲ留メザルヲ例トス、但シ「ヘルペス」ノ潰瘍ハ又進行シテ曲線ヲ畫シ、星形様或ハ樹枝様ニ匍匐スルアリ、時トシ其潰瘍ハ平面的ニ四方ニ蔓延シ上皮ヲ破潰スルニ至ルアリ、都テ潰瘍ノ部ハ少シク溷濁スルニ依テ判明ナリ、然レバ「フロレスチン」ヲ以テ染色スレバ一段美々タリ。

療法「アトロビン」ヲ點眼シ内服ニハ規那「アンチビリン」ノ如キヲ投

銳匙
ナリ
チ抓去
スルモ
亦可部

シ局所ニハ硼酸「ワゼリン」ヲ點入シテ綢帶ヲ施スベシ。

[二]帶狀「ヘルペス」*Herpes zoster ophthalmica* ノ一合併症ニシテ其發スルニ當リ劇甚ノ神經痛ヲ以テ間々角膜ニ群水泡ヲ生ジ、其破潰スルヤ底面ノ溷濁甚シテ角膜中層ニ達シ久シク治セザル者ナリ、眼ノ刺戟ハ甚シキニモ似ズ角膜ノ知覺ハ常ニ鈍麻シ臉壓ハ往々減少ス、合併症トシ虹彩炎ノ存スルアリ。

療法 前症ニ同シ

「附錄細糸角膜炎 Füldchenkeratitis」近來人ノ唱フル所ニメ角膜ノ表面ニ「ヘルス」的ノ水泡疹アリ、其一二ノ疹部ヨリ細微ナル糸状ノ物質出デ角膜面ニ横ハリ眼瞼ノ運動ニ從ヒ彼此轉舞スル者ヲ云フ、余カ本邦ニテ見タリシハ已ニ前後數回ニン多クハ眼ノ手術後ナリキ、顯微鏡下ノ検査ニ依レバ其糸狀物ハ上皮、細胞ノ捻轉シテ伸長セル者ナリ。

本症ハ其稱名「フ

リクトン」ト同稱
小性ノ陷ルナ以テ水泡稱
大リ小ノ泡性大字ナ除キ泡稱
ノナント誤ラズ泡性只
ナニアラズ泡性只
既最ル者テ
ニ近者

小泡性角膜炎及ゼ大泡性角膜炎

Keratitis vesiculosa u. bullous

本症ハ多クハ瘢痕アル角膜トカ若クハ虹彩毛様炎或ハ綠内障ノ爲メ已ニ失明セル眼ニシテ多少溷濁セル角膜上ニ來リ、其狀形ハ角膜ニ於テ上皮ノ水泡狀ニ膨起シ内ニ澄明ナル漿液ノ含有スル者ニシテ數日ヲ經過スレバ泡壁破潰シテ治スルモ又再發スルノ傾キアリテ毎回多少ノ刺戟症ヲ現シ時トシテハ劇痛ヲ發ス

病理

角膜ニ於ケル淋巴液ノ運行障害ヲ蒙リ上皮ノ下ニ鬱積シテ

之ヲ擡起スルニ因ル然レバ又外傷或ハ手術等ノ後ニ發スルアリ或ハ時トシ何ノ原因モナクシテ甚シキ刺戟ヲ以テ健康眼ニ發スルアリ恐ラク神經性ノ作用ナラン

療法

姑息療法ニメ消失セズンバ泡ヲ穿破シ、硝酸銀桿ヲ以テ其底部ヲ點蝕シ内壓亢進アラバ虹彩切除ヲ施ス。已ニ失明セル者ニシテ劇痛アラハ刀ヲ以テ角膜患部ノ組織ヲ薄ク平ニ剥ギ去ルベシ

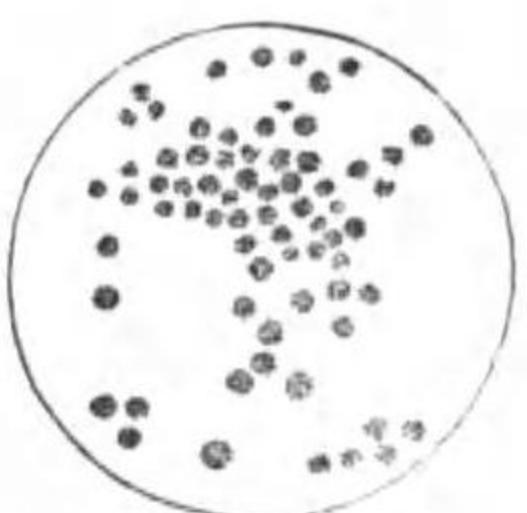
點狀角膜表層炎 Keratitis punctata superficialis

(第八十五圖甲)

此症ハ近來ノ發見ニ係リ、幼年ニ多ク三十歳以後ニハ罕ナリ、其特徴ハ急性結膜炎ノ症候ヲ以テ角膜中部ノ表層ニ突然灰白色ノ斑點ヲ許多散發スルニアリ、然レバ水泡上皮剝離、前房蓄膿等ヲ發スルヲ無ク、概シテ刺戟症少ナシ只タ憂フベキハ斑點ノ久シク去リ難キニアリ

日本ニハ甚ダ多シ

圖五十九第



小泡性角膜炎及ゼ大泡性角膜炎

漢家本症
ト云フ
チ垂簾翳

原因 不明ナリ、只ダ同時ニ呼吸器ノ加多兒ニ罹ルモノ多シ
療法 刺戟アレバ「アトロビン」ヲ點眼シ温罨法ヲ行ヒ、刺戟去レバ黃
降汞「ワゼリン」ヲ點入スベシ、然レモ消失迄デニハ隨分長時日ヲ要ス

角膜「パンヌス」 Pannus



第十九圖

本症ハ過半結膜（トラホーム）ヨリ續發シ專ラ角膜ノ上部ニ普延スル者
ニシテ其初メテ發スルヤ多少毛様神經痛、羞明、流淚、結膜充血等ノ刺戟症ヲ兼于角膜ノ上部ニ汎發性ノ溷濁ヲ起スカ、或ハ點狀ノ小浸潤多數發生シ血管之ニ隨伴ス、蓋シ此點狀浸潤ハ上皮ノ下ニ坐シ細胞ノ群集ヨリ成リ「トラホーム」浸潤 Trachom-Infiltrat ト稱セラル而シテ其浸潤ハ各周圍ニ溷濁ヲ有スルガ故ニ多數續々發生スレバ勢其部ハ一面ニ溷濁ヲ生ジ、血管之ニ分佈シ（第八十九圖乙）以テ全ク「パンヌス」ヲ完成ス、病勢ノ益々増息シテ「パンヌス」愈々蔓延セバ角膜ハ八方ヨ

ラホーム浸潤 Trachom-Infiltrat ト稱セラル而

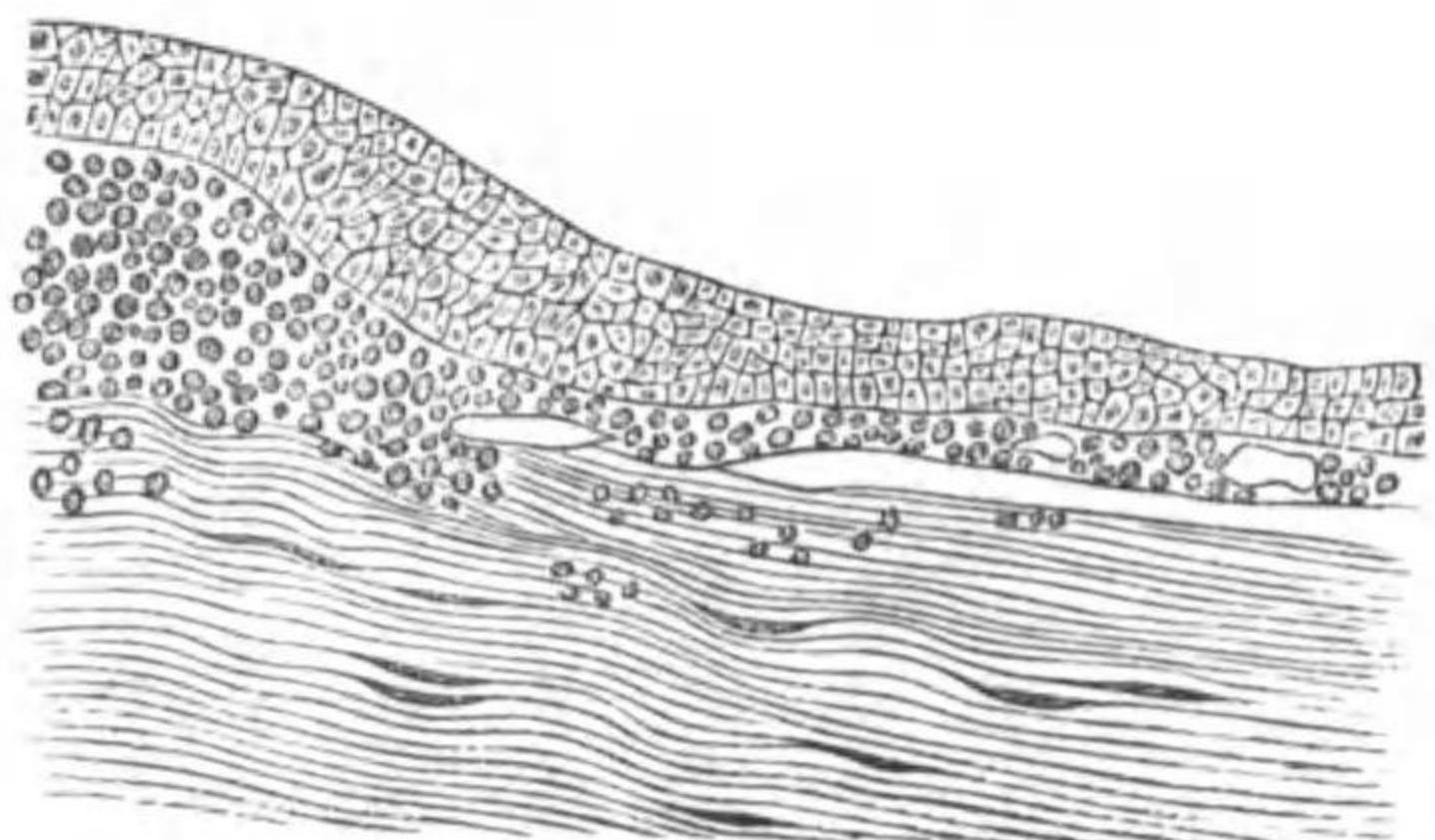
「パンヌス」ニ侵サレ、終ニハ全面之ガ爲ニ覆ハル、ニ至ル而メ「パンヌス」ノ厚フノ血管富饒ナル者ヲ濃性或ハ肉性「パンヌス Pannus crissus s. carnosus ト云ヒ其薄フシテ血管少キ者ヲ淡性「パンヌス」 Pannus tenuis ト云フ

「パンヌス」ニ合併シ潰瘍ノ來ルアリ、多クハ「パンヌス」ノ縁ニ沿フテ半月形ノ潰瘍ヲ爲ス者多ク、刺戟甚ダ盛ナリ、又「パンヌス」ナキニ小潰瘍ノ角膜縁附近ニ發スルコ數々ナリ

若シ「パンヌス」ノ四方ヨリ起リテ角膜ノ中心ヲ餘マス片ニ臨ミ潰瘍起レバ其位地ハ即チ中心ニシテ數々穿孔シ大ニ視力ヲ害ス

本症ノ起ルヤ又極メテ緩慢ニシテ毫モ

第十九圖



刺戟症ヲ呈セズ、視力ノ害セラル、ニ至リテ患者初メテ之ヲ覺知スルアリ

病理解剖 「パンヌス」ハ角膜上皮トボーマン氏膜ノ間ニ於ケル細胞ノ浸潤ニシテ之レニ新生ノ血管分布スルニアリ而テ其ノ經行ニ於テ容易ニボーマン氏膜ヲ破潰シ、實質ノ前層ニモ浸潤ス、是レ後來一般ニ信ゼラル、所ナレバ近來異説アリ、細胞ノ浸潤ハ實質ニ起リ後ニ至リボーマン氏膜ヲ破リ上皮下ニ至ル者トセラル、然レバ予ノ標本ハ前説ト附合スレバ暫ク前説ニ從ハント欲ス

原因 〔一〕「パンヌス」ニメ「トラホーム」ヨリ發スルハ粗糙ナル眼瞼ノ裏面ニ角膜摩擦セラル、ニ由ルト爲ス者アレバ信ズルニ足ラズ、何トナレバ假令ヒ結膜滑平ナルモ本病ヲ發スル「屢々」之アルハ吾人ノ常ニ見ル所ナレバナリ、シールマン氏ハ「パンヌス」ヲ以テ角膜ノ「トラホーム」ト見做シ、點狀浸潤ヲ以テ「トラホーム」ノ顆粒ト同視セリ、蓋シ吾人ノ所存ニ依レバ結膜ノ病處ヨリ來レル毒素ノ結膜ヨリ角膜上皮下ニ注流シ

來リテコニ炎症ヲ起シ以テ遂ニ「パンヌス」ヲ成スナラン

〔二〕「パンヌス」ハ眼瞼内翻症、睫毛亂生症等ニ於テ其直接ナル刺戟ニ依リ、又結膜囊中ニ於ケル異物ノ爲メ角膜ノ器械的摩擦ヲ被ムリ其局部ニ本症ヲ發ス、故ニ此等ヲ**外傷性「パンヌス」** Pannus traumaticusト云フ

〔三〕或ル潰瘍ノ治スルニ當リ潰瘍ト角膜緣間ニ血管配布シテ「パンヌス」ヲ爲スコトアリ、是レ潰瘍ノ治癒ヲ催進スル者ニシテ之ヲ**恢復性「パンヌス」** Pannus regenerativusト云フ 〔四〕「フリクトン」ノ角膜ニ頻回反復スルヤ角膜上一面ニ溷濁シ即チ「パンヌス」ヲ形成ス、之ヲ**フリクトン性「パンヌス」** Pannus phlyctaenulosaト云フ、本症ハ眼瞼結膜ニ

顆粒ナキヲ以テ判別スベシ

豫後 基トラホームヨリ來ル者ハ原病治スレバ隨テ治癒ス、然レバ多少白翳ヲ留ム「パンヌス」久シク持続スルヤ角膜ハ患部ノ質軟弱トナリ内壓ノ爲ニ膨突スルニ至ルアリ、名ケテ**「パンヌス」性角膜脹脹症** Kerktaiae pannoト云フ、又虹彩炎併發シテ瞳孔ヲ閉塞シ或

角膜ノ周擁
匙ヲ以テ結膜ヲミ銳
摩スルモ効アリ

ハ潰瘍ノ爲メニ角膜破レ失明スル者少トセズ

療法 [一] 初期ニ刺戟症劇烈ナルキハ「アトロビン」若クハ「コカイン」フ

點眼ヲ反覆シ且ツ冷罨法或ハ温罨法ヲ施ス [二] 刺戟症已ニ稍々消散セ

バ結膜ノ療法ヲ施スベシ、乃チ「トランボーム」フ治スルニ從ヒ「バンヌス」モ
亦漸次減ズル者トス [三] 「バンヌス」ノ濃厚ナル者ニハ角膜周擁切除法
ヲ行ヒ、若クハ燒灼電氣ヲ以テ「バンヌス」ヲ燒キ、又銳匙ヲ以テ「バンヌス」
ヲ搔除スルコモ亦妙ナリ、此後法ハ無論一部ニ限局セル「バンヌス」ノミ
ニ用キルコト得、都テ此等ノ法ハ或ハ効アリ或ハ効ナシ、又一時輕快ス
レバ再發スルコ多シ、且手術後ハ一時角膜ノ溷濁増進シ、稍久フノ初メ
テ効驗ヲ呈ス。[四] **角膜周擁切除法** Peritonic ハ角膜ノ周擁ニ沿
ヒ結膜ヲ細ク長ク三密迷許、剪刀ヲ以テ切除スルニアリ、然レバ奏効ヲ
シテ確實ナラシメント欲セバ、同時ニ上鞏膜組織ノ血管ヲ亂切シ且銳
匙ヲ以テ多少之ヲ搔除スルヲ可トス [五] 角膜ニ潰瘍アリテ刺戟症盛
ナレバ、予ハ下ノ自流ヲ愛ス、即チ眼瞼結膜ヲ西洋楊子ニテ抓擦シ以テ

硝酸銀ノ棒ニ毛筆
チコスリ之ヲ以テ
角膜線ニスレバ可

顆粒ヲ去リ、同時ニ角膜周擁ノ結膜ヲ強硝酸銀ヲ以テ腐蝕シ常ニ即効
ヲ收メタリ、又潰瘍ナク「バンヌス」ノミノ例ニテモ前法大ニ効アリ、是レ
予ガ幾千回ノ實驗上得タル所ナリ、故ニ予ハ危險症アルキ徒ニ「アトロ
ビン」若クハ「コカイン」等ニ依リ、時日ヲ費スヲ好マズ、又其効アルヤ確實
ニメ潰瘍アルキハ其危險ヲ防グ唯一ノ妙策ナリト信ズ [六] 「バンヌス」
ノ蔓延シテ全角膜ヲ被ヒ且濃厚ナルキハ強硝酸銀液ヲ角膜面ニ塗布
スペシ或ハグートリー氏軟膏(硝酸銀○、四鉛醋八滴、ワゼリン八〇)ヲ毎
日一回點入スルモ亦可ナリ 「バンヌス」已ニ消褪シテ唯ダ白翳ヲ留
ムル者ニハ黃降汞軟膏ヲ塗入スベシ

[附抄]「バンヌス」ノ蔓延シ且ツ濃厚ナル者ニハエゲル氏ハ膿漏症(初生兒ノ者
チ可トス)ノ膜ヲ移植シ、又輓近($\frac{2}{2} - \frac{3}{3}$)ノ新鮮ナル「ジエキリチ」豆浸汁
チ三日間毎日一回結膜ニ塗布シテ劇甚ノ結膜炎ヲ喚起シ、已ニ十分發
炎セバ硝酸銀ヲ以テ恰モ眞ノ膿漏症ト均シク治療ス、此等ノ法ハ共ニ
角膜ニ危險アルヲ以テ近年之ヲ通用スル者ナシ然レバ最近一大進歩
アリ焉、即チ「ジエキリチ」ヨリ其原質ヲ採取シ名ケテ「ジエキリトル」ト

「ジエキリトル」ハ
都テ角膜翳ニ有効
ナリトセラル、
「ジエキリトル」液一二滴ヲ結膜ニ點入シ、炎症強盛ナルニ至レハ對毒血清ヲ
點入スルニアリ、予數回ノ經驗ニ依レバ血清點入後ハ炎症急ニ衰ヘ其
退消スルト共ニパンヌス漸々薄ラキ視力回復スルニ至ル、但シ炎症盛
ニ起ラザルヰハ効少ナシ、場合ニ依リ二三回反覆ヲ要ス——「ジエキリ
チー豆ハ南米ノ產ニシテ「ラジル」國ニ出デ古來土人ノ大ニ用井ル所
ニシテ巴里斯ノウエツケル氏初テ之ヲ大ニ賞用ス、豆ハ形小ニシテ赤豆ノ
如ク色ハ鮮紅色ニシテ一端ニ黒點アリ極テ蟹眼ニ髣髴タリ

本症ハ又角膜深部
炎又蔓延性角膜炎
實質炎
ト云フ然レバ角膜炎
通稱トス

第二 中層角膜炎

角膜實質炎 *Keratitis parenchymatos*

角膜間質炎 *K interstitialis*

本症ハ角膜ノ實質ヲ侵ス者ニシテ殊ニ其後層ニ淋巴細胞ノ浸潤ヲ來
シ、其起ルヤ經過ノ狀況ニ二種アリ。〔一〕ハ角膜ノ中央ニ起リ、コニニ漠
然タル溷濁ヲ呈スル者。〔二〕ハ角膜ノ周圍ヨリ漸々蔓延スル者ニメ其
中チ一方ノ角膜縁ヨリ起レル者ト周圍全緣ヨリ起レル者トアリ。其蔓

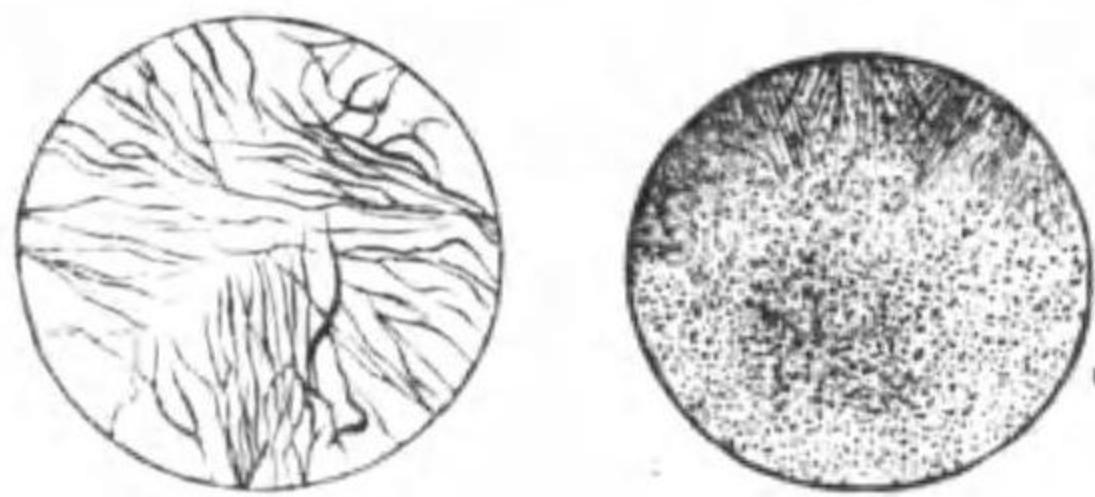


圖八十九第

角膜面ニハ往々粗
大ナル凹凸往々
液ニ蓄有ス

延メ角膜全面ヲ侵スヤ表面ハ恰モ摩擦硝子
ノ如キ觀ヲ呈スルニ至ル、已ニメ其周圍ヨリ
溷濁消散シ初ムルモ中央部ニハ長ク消ヘ失
セザルヲ常トス(第九十八圖)然レバ是レ亦時
日ヲ經ルニ從ヒ全然消散スル者ナリ、凡ソ溷濁セル部面ハ上皮ニ僅微
ノ凹凸アリテ恰モ小針ヲ以テ點刺セル者ノ如シ、又斜照法ヲ以テ溷濁
部ヲ細見セバ數々其中ニ灰白色ナル線條或ハ斑點ノ散在ヲ發見ス、血
管ノ關係ハ固ヨリ病症ニ從ヒ差等アリ、ヒルシユベルグ氏ニ依レバ本
症ニ「ルーベー」ヲ用キ細檢セバ血管ノ缺如セルヲナシト云フ、然レバ肉
眼検査上ニハ有血管性實質炎、paremch. avasculosaト無血管性實質炎、
paremch. vasculosaノ兩種ニ區別スルヲ便利トス、兩者共ニ角膜周擁充
血ハ存スレバ亦大ニ差等アリテ即チ概言スレバ甲ハ乙ニ比スレバ其
充血強甚ナリ、乙ニ於テハ往々其周擁充血サヘ全ク缺如セルヲアリ、又
惡性トモ見做ス可キ者ニ至テハ溷濁甚シク且ツ血管モ多ク、角膜周擁

第十九圖



充血モ亦甚シ、而ノ又角膜ノ上皮下ニモ亦血管
侵入シテ爰ニ多少「バンヌス」ヲ形成スルコアリ。
本症ニ血管アルヤ。一見「バンヌス」ノ如キモ、之ヲ
細見セバ、血管ハ恰モ筆毛乃至ハ刷毛ノ如ク、角
膜ニ深在シ、其色ハ朱色或ハ褐赤色ナリ、而テ血
管ノ走行ヲ追検セバ、角膜縁ニ至リ忽然斷止シ、
結膜ノ血管ニ直接セズ(第九十九圖)、是レ實質炎
ニ於ケル血管ハ角膜周擁ノ深部血管ヨリ新生
セル者ナレバナリ、若シ夫レ血管富饒ニメ角膜
全般ニ充實セバ、角膜ハ一片ノ赤布ニ髣髴タリ。
角膜ノ溷濁甚シキトハ其中部往々黃色ヲ帶ビ、化膿カト疑ハシキアレ
凡眞ノ膿瘍或ハ潰瘍タルガ如キトハ絶テ之ナシ。但シ間々前房ニ少許
蓄膿スルコアリ。

刺戟症狀タル毛様痛、羞明、流涙等ハ病患ノ輕重ニ從ヒ齊シカラズメ病

症輕ケレバ即チ弱タ時トメハ患者只ダ視力ノ少シク不明ヲ告グルニ
過ギス病症重ケレバ即チ刺戟症強ク且ツ之ニ加フルニ漿液性或ハ成
形性虹彩炎或ハ脈絡膜炎ヲ合併シ、虹彩後癒着、瞳孔閉鎖症等ヲ後發シ、
甚シキハ成形性虹彩毛膜炎ヲ併發メ罕レニ眼球勞ヲ招來スルコアリ、
又前房ニ成形性滲出物ヲ起シ其結果トシ虹彩ノ周圍カ角膜ニ癒着ス
ルアリ、中ニハ虹彩毛膜炎ガ主ニメ、角膜實質炎ハ輕微ニ現レタルアリ
輕症ニ在リテハ溷濁ハ全然消散スルモ、重症ニ於テハ後來久シク多少
ノ溷濁ヲ留ム、殊ニ角膜ノ中部ニ甚シ、尙ホ不幸ナル時ハ角膜膨脹シテ
凸隆シ、或ハ硬化症ニ陥リ角膜爲メニ扁平シ視力ノ障害ハ固ヨリ大ニ
メ其治癒亦難シ

本症ハ終止一眼ニ止リ或ハ兩眼一齊ニ犯ス者アレ凡亦先ツ一眼ニ發
シ次テ他眼ニ及ボスコ少ナカラズ、又時トメハ其間僅ニ數日ヲ經ルコ
アリ、本症ハ再發スルコ又罕レナラズ

経過

症ノ輕重ニ由リテ固ヨリ差異アリト雖凡大抵五六ヶ月ヲ要

シ其久シキハ一二年ニ及ブ

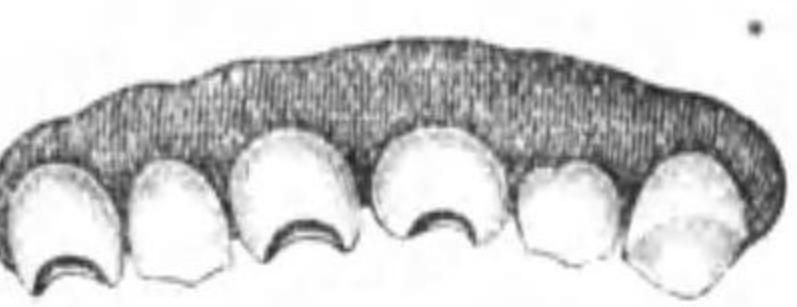
豫後 通常不良ナラズシテ長日月ヲ費スモ全治スルモノナリ、是レ患者ニ豫メ告知スペキ點ナリ然レモ重症ニ在リテハ後日角膜ニ深厚ナル白翳ヲ留メ或ハ爾他ノ合併症即瞳孔閉鎖或ハ虹彩毛様炎等ノ爲メニ往々失明スルコアレバ豫告ヲ定ムルニ當リ注意ヲ怠ルヲ勿レ

後天性梅毒ニハ
眼ノ實質炎多シト
云フ說アレド虚言
ナラン

原因 大抵六歳ヨリ二十歳ノ間ニ發スル者ニメ女子ハ男子ヨリ多

シ原因ハ梅毒ニメ殊ニ先天梅毒ニ由ル者多シ、之ヲソン氏ノ前齒(第百圖)是レ上門齒ノ下緣異常ニ缺損

セル者ヲ云フ



本邦ニ於テハ口邊溝状線ノ縱走セシノル者多シ是レ製瘡ノ跡者ナリ重過中耳炎ノ經シ起實質炎ニ至シハ全聾ニアリ

〔四〕關節水腫、此レ殊ニ右膝關節ニ多シ
〔五〕重聽
〔六〕頸部淋巴腺ノ肥大
〔七〕口邊ニ於ケル裂瘍及咽喉ノ潰瘍、或ハ其瘢

或ハ其破潰ニ由ル瘢痕

〔一〕初メ先ツ「アトロビン」ヲ數回點眼シ、瞳孔能

ク散大セバ、後ニハ毎日一回點眼シ、温罨法ヲ命ズ、若シ多クノ血管或ル一部ヨリ侵入スルキハ角膜縁ニ沿ヒ周擁切除術ヲ行フ、余ハ燒灼電氣ヲ用キ罕レニ良効ヲ得タルコアリ然レモ手術ハ概シテ無効ナルヲ常トス
〔二〕炎症已ニ減ズレバ久シク黃降汞(ワゼリン)等ヲ塗入スペシ
全身療法トシテハ沃剥、沃鐵舍利別等ヲ與フ、水銀劑ハ餘リ効見ヘザルモ之ヲ與フルハ適當ノ處置ナラン、

〔附錄〕角膜實質炎ノ經過異様ノ者一二ヲ述フルト下ノ如シ
〔一〕角膜ノ潤濁
或ハ一方ヨリ或ハ兩側ヨリ來ルトアリ、予が見タル所ノ如キハ一條ノ

核アル者ニ實質炎結
チ見覺ヘナシ

又深部點狀角膜炎
モ云フ

潤濁左方ヨリ起り中部ニ向テ進行シ兩條會合セリ實ニ奇ト云フ可シ
〔二〕潤濁が一方ノ解膜縁ヨリ起リテ血管之ニ隨從シ恰モ「パンヌス」ノ如
キ者少カラズ 〔三〕角膜中部ニ於テ潤濁久シク治セズソ途ニ圓形ニ區
劃セル角膜翳ヲ遺スニアリ 〔四〕角膜ノ下部ニ三角形ノ白翳ヲ留ムル
者アリ 〔五〕角膜ノ中層ニ點狀ノ潤濁ヲ來スニアリ、名ケテ特有性點狀
角膜炎 Keratitis punctata specifica ト云フ、然レバ彼ノ虹彩炎ノ爲メニ角膜後
面ノ下部ニ當リ點シク點狀ノ小粒ヲ沈着セル角膜炎ト錯誤スルト勿
レ 〔六〕角膜ノ中央ニ潤濁ノ輪狀ニ區劃スルアリ之ヲ輪狀中心性角
膜炎 Keratitis centrales annularis ト云フ 〔七〕虹彩ハ其炎症ノ爲メ後癒着ヲ遺
ス者多シ、然レバ罕ニハ虹彩ノ根部ニ於テ角膜ト前癒着ヲ爲ス者ア
リ 〔八〕角膜實質炎ノ後半角膜周擁部ノ青色ヲ帶ビ時トシ鞏膜葡萄腫
ノ來ルアリ 〔九〕量モ不愉快ナルハ角膜ニ潤濁普ネク殘遺シ且虹彩ハ
後癒着ヲ起シ手ノ附ケ様ナキ者アリ、然レバ本症ハ元來治癒ノ性アル
者ナレバ適當ノ療法持續セバ望外ノ結果ヲ得ルアリ 〔十〕眼球内壓
ハ數々著シク減降スル多クハ復タ回復ス、然レバ虹彩癒着カ又角膜
膨脹ノ爲メ内壓亢進スルアリ

硬化性角膜炎 Sclerosirende Keratitis

此症ハ鞏膜炎ノ合併症ニメ其炎部附近ノ角膜緣ヨリ略モ三角形ナル
灰白色ノ潤濁起リ中央ニ向テ漸々進行ス、其治スルヤ潤濁ハ邊緣ヨリ
多少消散スル者アリト雖完全ナルハ甚ダ罕ニメ多クハ硬化メ灰白
色ノ瘢翳ヲ留メ數々不治ノ失明ヲ來スニ至ル。本症カ前實質炎ト異ナ
ル所ハ血管全ク缺如スルカ或ハ其存スルモ少數ナルト且ツ潤濁ノ深
部ニ位シ深厚ナル灰白色ヲ呈スルニアリ、然レバ只此レ丈ケデハ鑑別
シ難キモ多クハ角膜ノ周圍附近ニ鞏膜炎存スルカ或ハ其ノ存在セシ
痕跡ノ徵スベキアルヲ以テ確診シ得ベシ、併シ久シク經過ヲ俟テバ兩
者ノ差自ラ明ナリ、本病ノ最モ甚シキ時ハ角膜全部不治ノ潤濁ニ陷ル
アリ(決シテ輕視スペカラズ)

療法 硬化性角膜炎ノ原因、療法ハ鞏膜炎ト一致スレバ其章ニ於テ
之ヲ見ルベシ、多クハ確然タル良効ヲ收メ難シ只鞏膜炎ノ部ヲ燒灼シ
或ハ其部ノ結膜ヲ切除スレバ數々奏効ナキニアラズ、同時虹彩炎多ケ

レバ「アトロビン」ノ點眼ハ忘ルヘカラズ

癩性角膜炎 Leprose Keratitis

角膜ノ障害
 [一] 知覺脫失ハ殆ント平常ナリ、併シ爲メニ麻痺性角膜炎來ルガ如キハ罕レナリ
 [二] 「バンヌス」ハ最モ多キ症ニメ多クハ角膜上部ニ存シ、其菲薄ナルヤ、肉眼ニ見ヘヌ程ノ者アリ
 [三] 角膜緣ノ附近ニ於テ鞏膜ニ結節生ジ次デ角膜炎白色ニ溷濁シテ肥厚シ、時トシ腫瘍状ニ變スルアリ
 [四] 角膜ノ一部ニ結膜ヨリ血管集入シ翼狀贅片ノ如キ者アリ、微菌ハ概シテ結節癩ニ多ク、主トシテシユレンム氏管ノ附近ヲ本據トシ之レヨリ、鞏膜、角膜、虹彩、毛様體ニ蔓延ス、毛様神經ニハ癩菌列宿スルニ至ル

「合併症」癩病ニ於ケル角膜病ヲ主トシ、他部ノ緊要ナル變狀ハコヽニ臚列ス
 [一] 眼瞼ハ最モ能ク侵サル、所ニシテ知覺脫失、結節隆起、睫毛脱落等ヲ多トス、其他外翻症ハ時々逢見ス、輪匝筋ノ麻痺ニ依リ瞼裂難閉ノ者アリ之カ爲メ角膜ニ潰瘍起ルト少カラズ
 [二] 結膜ハ知覺脫失ノ爲メ外傷ニ觸レ易ク

爲メニ加答兒ニ罹リ易シ
 殊ニ結膜輪邊ニ當リ結節ヲ起ス亦少ラズ
 詳細ニ虹彩炎ノ部ニ述フベシ
 同時ニ虹彩毛様炎アルカ爲メナリ、眼ノ失明モ亦之ニ依ルト少カラズ
 嘸ノ眼ヲ侵スヤ洵ニ多ク、學士カミン氏ハ全癩患者ノ三分ノ二乃至四分ノ三ハ不幸ニ罹ル者ト云ヘリ、癩ノ爲メ病已ニ以テ嫌惡スルニ足ル而ノ尙ホ眼ノ明チ奪フ、人以テ天刑ト爲ス、若シ天ニ一仁モアラバ何ゾ又其刑ヲ下スノ酷ナルヤ

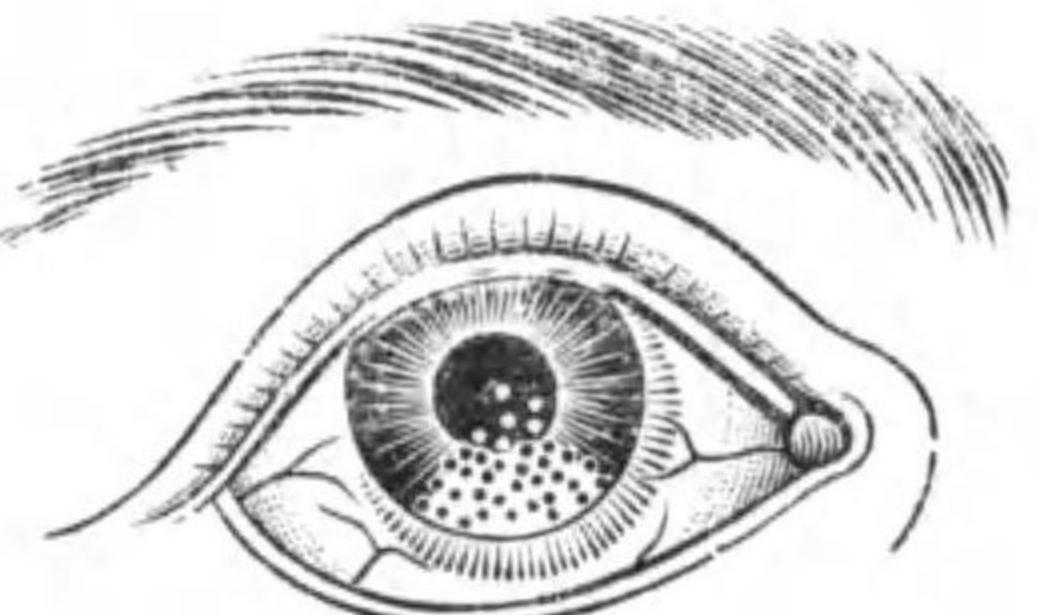
第三 後層角膜炎

點狀角膜炎 Keratitis punctata 百一圖

デスセメット氏膜炎 Descemetis

本症ハ概シテ漿液性虹彩炎或ハ毛様炎ニ伴フ者ニシテ前房中ニ於ケル白血球ヤ色素ノ沈着シテ角膜ノ後面就中其下方ニ灰白色或ハ暗褐色ナル許多ノ斑點ヲ起シテ三角形ヲ爲シ、且ツ多少角膜ヲ刺戟シ其深部ニモ炎症ヲ惹起シテ溷濁ヲ呈シ、間々血管之ニ注入ス、該斑點ノ極メ

圖一百第一



テ細微ナル者ハ徹照法ニ依テ初テ知ラル、アリ、經過ハ極メテ頑固ニシテ治シ難シ。解剖所検若シスル角膜ヲ切除シ之ヲ細検スレバ角膜ノ後面ニ於テ細胞群集ノ一團ヲナシ所々ニ着留スルヲ見ルベシ。療法 虹彩炎、毛様炎等ノ療法ヲ専務トス。

(乙) 化膿性角膜炎 Keratitis suppurativa.

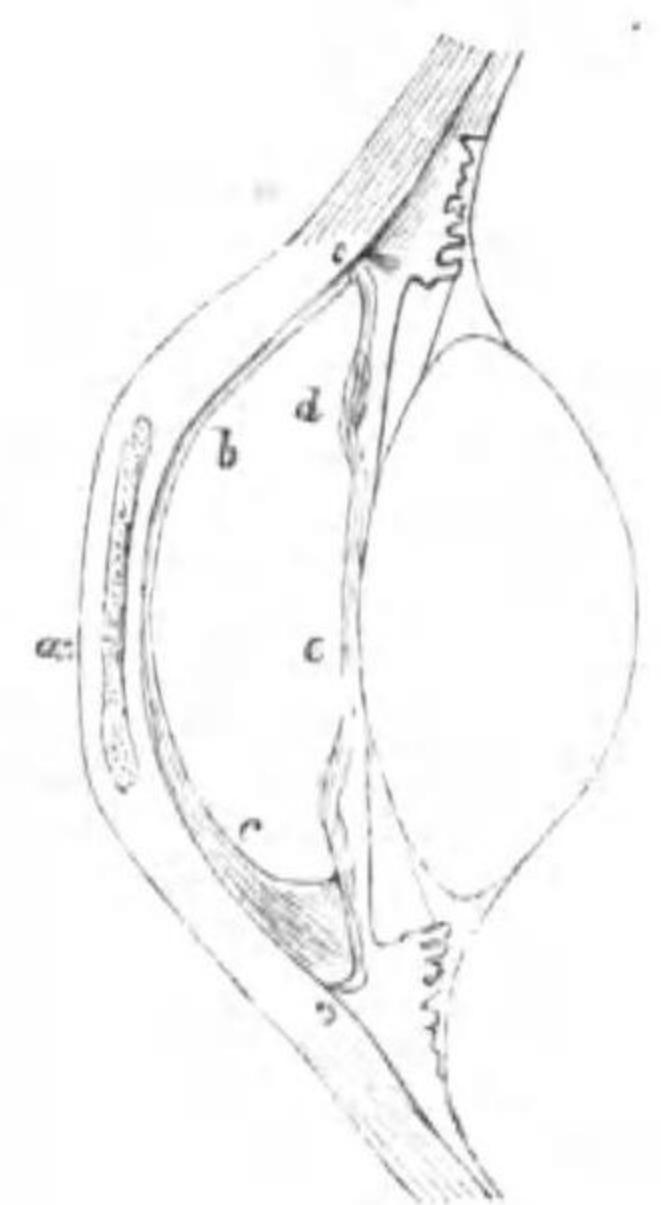
本症ハ一大危險ノ眼疾ニシテ角膜ニ膿ヲ釀シ其ノ組織ヲ破壊スルモノナリ、其ノ發起スルヤ好デ角膜ノ周邊若シクハ中央部ニ發ス、其ノ蔓延スルヤ專ラ深入シテ角膜ヲ穿孔シ或ハ專ラ横走シテ角膜ヲ竄蝕ス、限局シテ遂ニ進行セザル者ハ其ノ破壊モ亦角膜ノ一部ニ止レバ蔓延進行スル者ニ在テハ全角膜ヲ破壊スルノ恐レアリ、而ソ其ノ病原ハ未

ダ悉ク明瞭ナラザルモ大半ハ黴菌ニ依ルモノナラン化膿性角膜炎ハ其ノ状況ニ從ヒ、曰ク角膜浸潤曰ク角膜潰瘍ト云フ、此等皆其義一也、膿瘍ニメ微小ナレバ浸潤ト云ヒ破ブルレバ即潰瘍ト云フ、其間大差アルニアラズ故ニ原因療法共畧ボ一ナリ。

角膜膿瘍 Abscess cornice

本病ハ多クハ黴菌ノ傳染ニ由ル者ニメ角膜實質ノ組織間ニ浸潤ヲ起シ、更ニ進デ膿瘍ヲ形成ス、其浸潤ノ新鮮ナル者ハ或ハ灰白色或ハ黃色ヲ呈シ、其ノ周圍ニハ白暈アリテ之ヲ圍繞シ、又線状ノ溷濁アリテ四方ニ放散スルヲ見ル、膿瘍部ノ表面ハ少シク隆起シテ粗糙ナレドモ膿瘍稍々其ノ周圍ニ蔓延スレバ反テ陥沒シ爲メニ往々膿瘍ノ周圍ハ濃厚ナルモ中央ハ稍々透明ナルアリ、又

圖二百第一



ハ黴菌ニ對シテ板角膜
營養基ノ如シノテ
化膿性角膜炎ノ名
稱ハ單ニ又タ角膜
アリ限リ用キラ

本病ハ多クハ黴菌ノ傳染ニ由ル者ニメ角膜實質ノ組織間ニ浸潤ヲ起シ、更ニ進デ膿瘍ヲ形成ス、其浸潤ノ新鮮ナル者ハ或ハ灰白色或ハ黃色ヲ呈シ、其ノ周圍ニハ白暈アリテ之ヲ圍繞シ、又線状ノ溷濁アリテ四方ニ放散スルヲ見ル、膿瘍部ノ表面ハ少シク隆起シテ粗糙ナレドモ膿瘍稍々其ノ周圍ニ蔓延スレバ反テ陥沒シ爲メニ往々膿瘍ノ周圍ハ濃厚ナルモ中央ハ

一方ハ治シテ一方ハ進ムコトアリ、其ノ進ムヤ常ニ其進部ニ當リ半月形ノ溷濁ヲ現ハシテ其方向ヲ示ス、又膿液ハ屢々角膜實質中ノ下部ニ沈降シテ半月狀ヲ爲スコトアリ、名ケテ**角膜爪** Onyx. s. Unguis ト名ク

膿瘍ハ角膜ノ周圍部ニ發シ時トシテ其周圍ヲ繞圍シ純然タル輪狀膿瘍 Ringabsess ヲ爲スアリト雖凡、多クハ角膜ノ中央部ニ起リテ周圍ニ蔓延スルヲ常トシ。甚シキニ至リテハ角膜全面ヲ侵ス

膿瘍ハ間々破潰セズシテ吸收セラレ其ノ部ニ溷濁ヲ留メテ治スルヲアレ凡、多クハ其ノ前壁破レテ潰瘍トナリ、更ニ後壁破レテ遂ニ穿孔ス然レモ其大ナラサル者ハ是レ必ズシモ患フルニ足ラズ、反テ穿孔シテ房水漏泄スレバ治癒期ヲ催シ患者失明ヲ免ル者多ケレバナリ

膿汁ハ又前房ニ蓄積ス、之ヲ**前房蓄膿症** Hypopyon ト云ヒ、其ノ量少ナルキハ僅カニ下方ニ存スルモ其ノ量多キキハ全ク前房ヲ満スニ至ル、其ノ形ハ膿ノ稀濃ニ從ツテ同ジカラズ、膿若シ濃厚ナルキハ其上

緣ハ不正ニメ水平ナラズト雖モ若シ稀薄ナルキハ其ノ面ハ水平ヲナシ頭首ノ位置ヲ變ズルニ從ヒ膿亦其ノ位置ヲ換フル者ナリ(第百二圖)ハ膿瘍ト前房蓄膿症ヲ示ス)虹彩炎ハ多ク同時ニ存在シ瞳孔ハ滲出物ノ爲メニ閉塞セラル、ト多シ

若シ又傳染ニシテ眼球内部ニ蔓延スルキハ眼球内容カ化膿ニ陥リ所謂全眼球炎トナリ遂ニ眼球勞ヲ招來スルコアラン

豫後 假令ヒ最モ好運ニ會スルモ一大角膜翳ノ殘留ハ殆ト免ル、コヲ得ズ、若シ其不幸ノ極ニ至レバ角膜ノ全面破潰シ患者全ク失明ス

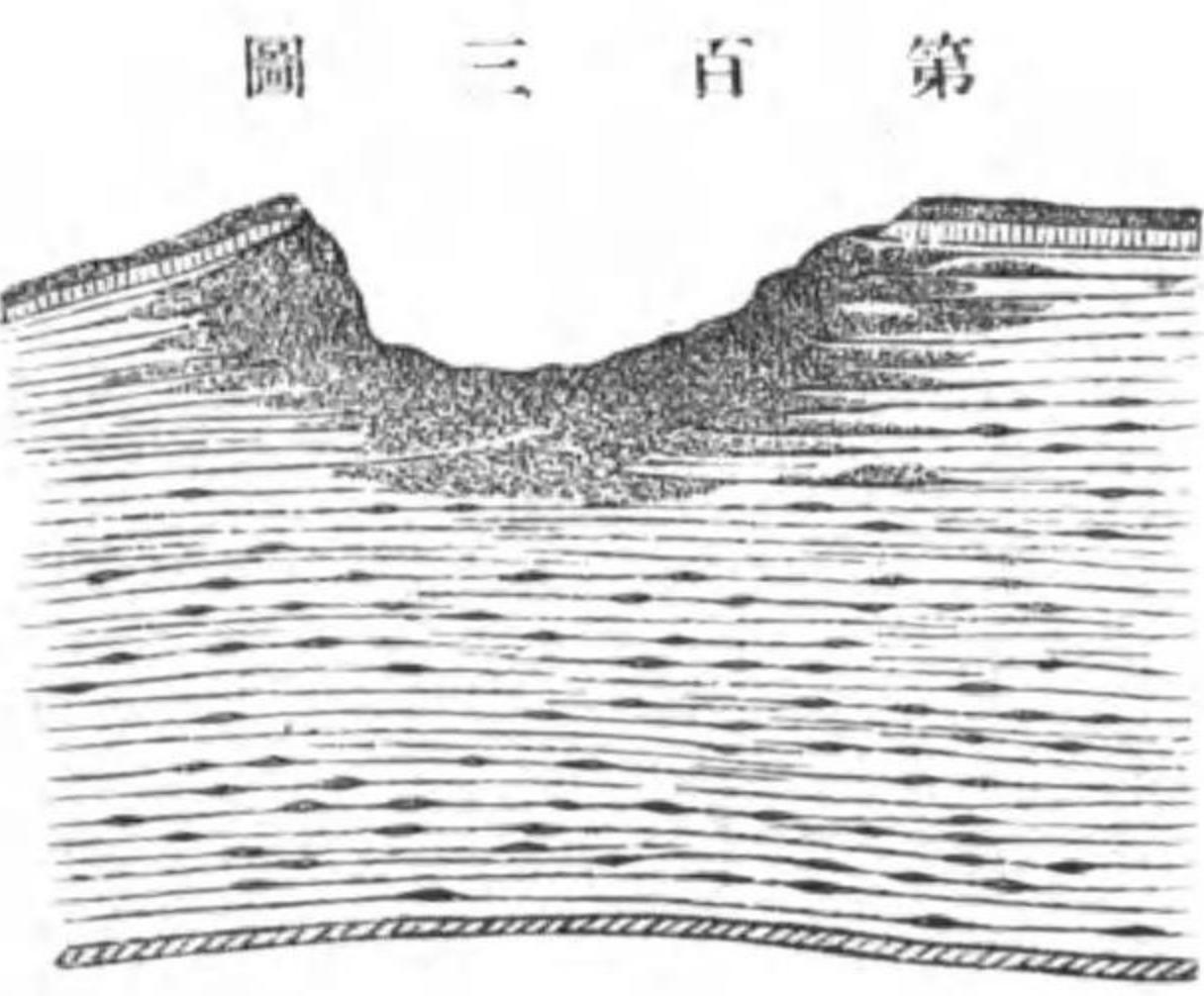
原因 療法等ハ次ノ潰瘍ト同一ナレバコヽニ省略ス

角膜潰瘍 Ulcus cornae

不貞ナリ於テハ豫後

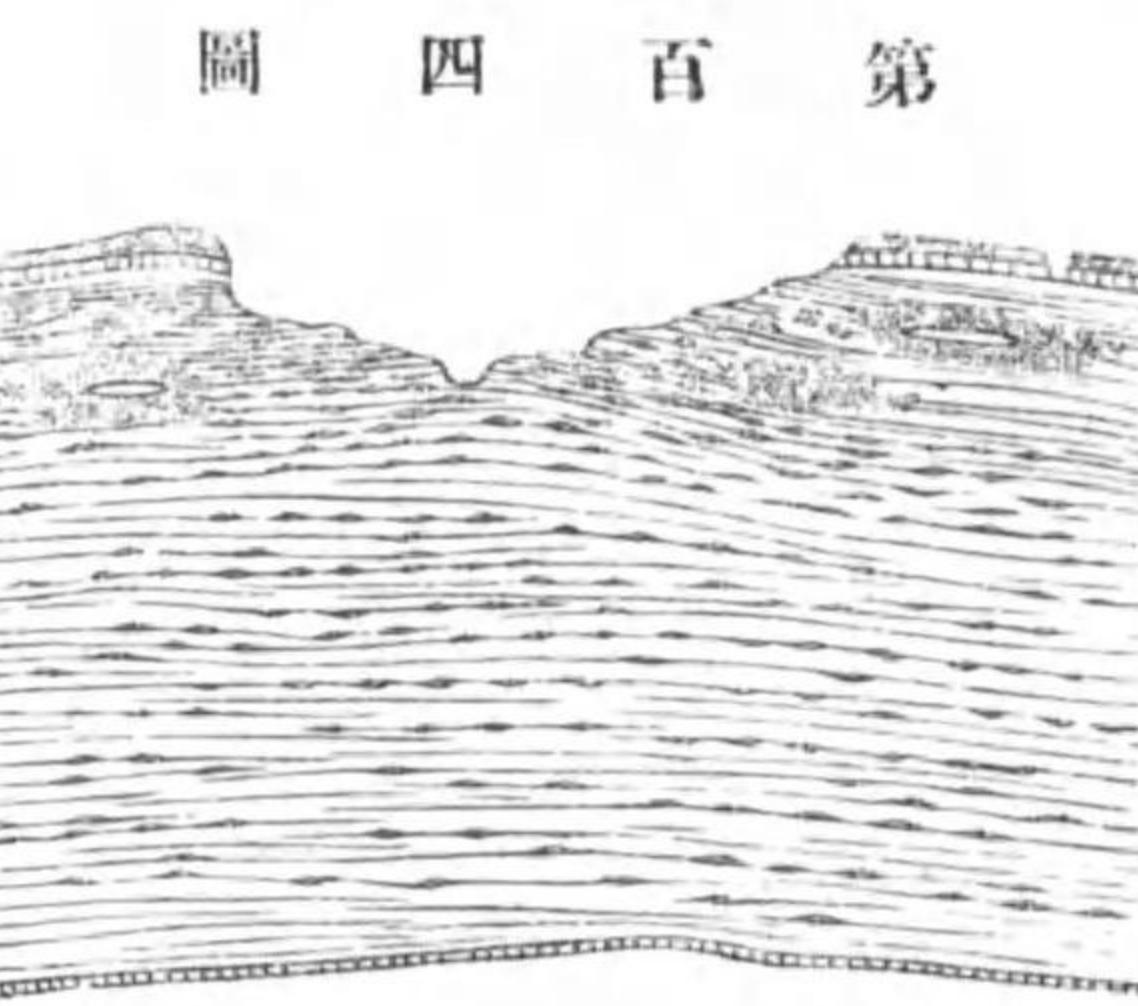
本病ハ初メ角膜ニ浸潤或ハ膿瘍アリテ患部ノ上皮透明ヲ失ヒ已ニメ上皮剥脱シテ潰瘍ヲ呈スルモノナリ、而メ其ノ淺深ハ初メ浸潤ノ起ル淺深ニ應シ、且ツ其ノ性淺ク横走スル者ト深ク穿入スル者トノ二者アリテ角膜ニ關係ヲ及ボスモ亦大差アリ

経過 [一] 第一期 即チ



進行期ニノ常ニ羞明、流涙、疼痛、眼球結膜ノ充血及ビ浮腫等ヲ兼ネ、潰瘍自家ノ底面ハ灰白色ニノ且ツ滑平ナラズ、縁界モ亦浸潤ノ爲メ白色ヲ帶ビテ峻削ナリ(第三百三圖)周圍ニハ或ハ灰白色ノ疊暈アルアリ、或ハ又線狀ノ溷濁放散スルアリ、唯一方ニ向テ進行スル時ハ其ノ方面ノミ前兆トシ溷濁雲起ス、都テ此進行中ニ在ル者ハ **進行性潰瘍** Progressive Geschwürs ト云ヒ非常ノ刺戟性ヲ伴フヲ常トス、然レ凡亦進行中ニ在ル潰瘍ニ於テ底面、邊緣、共ニ透明ニメ殆ド意外ニ出ヅル者アリ、此ノ期ニ屢々合併スル所ノ症ハ [一] 虹彩炎ニメ瞳孔ヲ閉塞シ或ハ後癒着ヲ生ズ [二] 前房蓄膿ニメ其生スルト否トハ病毒ノ性情ヨリ關スル者ノ如シ

無炎性ハ又無力性
痴鈍性或ハ衰弱性
等ニ譯名セラル



潰瘍ノ進行期中ニ刺戟症極メテ少キ片ハ名ケテ 無炎性潰瘍 Indolentes Geschwürト云ヒ、其ノ刺戟旺盛ナル炎性潰瘍 Entzündliches Geschwürニ對稱ス然レ凡其ノ恐ル可キハ同一ナルカ或ハ彼レ反テ此ヨリ恐ルベキアリ

(二) **第二期** 即チ退行期ニノ刺戟症狀頓ニ中止シ潰瘍ノ既ニ壞死セル部分ハ脱落シ底面ハ滑平トナリテ光澤ヲ呈シ、縁界モ亦圓滑トナリテ角膜面ハ漸々潰瘍ノ底面ニ移行ス(第百四圖)

(三) **第三期** 即チ瘢痕期ニノ數々角膜縁ヨリ潰瘍中ニ新生血管來リ以テ其ノ潰瘍ヲ覆ヘル上皮ノ下ニ新組織ヲ生シテ漸次其ノ缺損ヲ補充ス此ノ新組織所謂瘢痕ハ常ニ白色ヲ呈スルヲ以テ名ケテ **白斑**

自然ニアレ、人工
ニアレテ房水ノ急ニノ
洩スル時ハ疼痛
盛漏ナリ

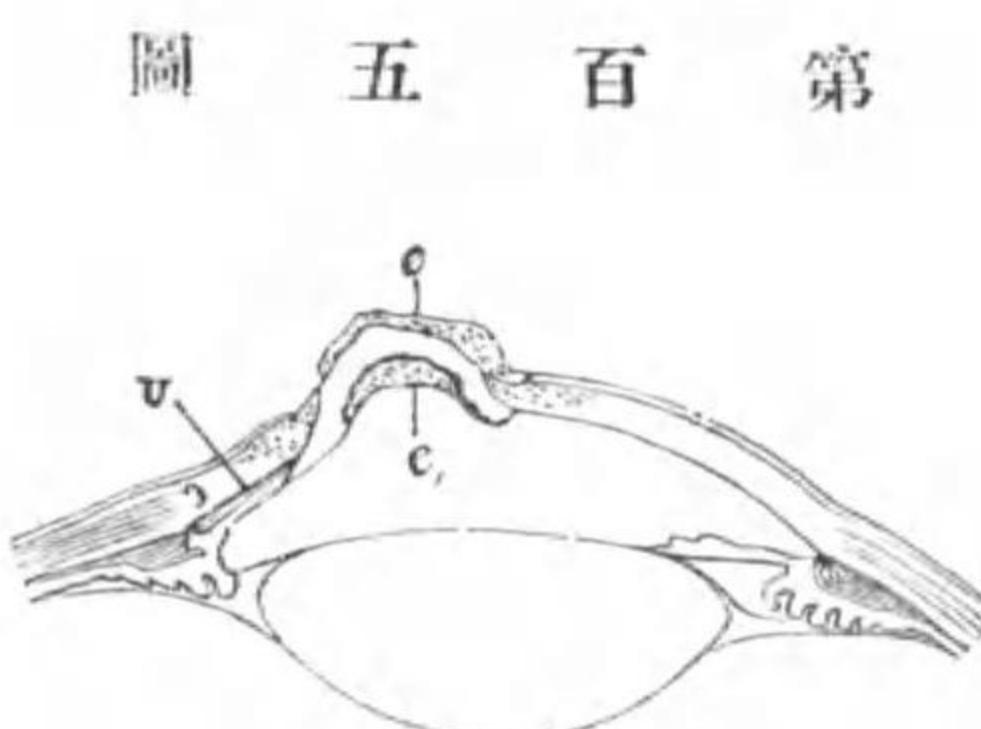
Leucoma ト云ヒ、其ノ薄フシテ稍透明ナル者ヲ
翳ト云フ、瘢痕形成スル
モ後ノ缺損部補修シテ全ク舊ニ復セザル者ヲ及落瘢痕 *Abgeflachte Narbe* ト云ヒ、若シ此沒落瘢痕菲薄ニシテ且ツ殆ト透明ナルキハ即チ
之ヲ磨滅症 *Facette* (フハセツテ) ト云ヒ、又其瘢痕内壓ニ堪ユルヲ
得ズシテ突隆スルキハ膠脹性瘢痕 *Ectatische Narbe* ト云フ

凡テ瘢痕ハ其ノ透明概ノ舊ニ復スルヲ得ズト雖凡亦年月ヲ經ルニ
從ヒ多少舊ニ復ス、殊ニ淺小ナルモノニ於テ然リ、又年齒愈々少ナレバ
瘢痕大ナルモ意外ニ舊明ニ復スルヲ得、故ニ兒童ニ在リテハ其ノ豫
後成人ニ比スレバ大ニ善良ナリ

角膜穿孔

Perforatio cornae 潰瘍穿孔シテ治癒ニ至ルキハ瘢痕期ノ

状態大ニ前者ト異ナルアリ、即チ一穿孔スルヤ罕レニハ「ビチ」ト聲サヘ
アリテ熱水涌出シ患者忽チ劇痛ヲ覺ヘ、自ラ以テ眼球破裂セリト爲ス、
然レニ其ノ穿孔甚ダ過大ナラザルキハ反テ好况ニ變シ之ニ由リ潰瘍
初メテ治期ニ赴クヲ常トス、然レニ穿孔大ニメ且ツ急ナレバ往々房水



虹彩脱出シテ肉芽ノ之ヲ包ム状ヲ示ス
ナリ

ノ涌出ト共ニ水晶體脱臼シ、或ハ穿孔ヨリ脱兎ノ如ク外ニ躍出シ、或ハ
又其頓ニ内壓減退スルヲ以テ眼底ヨリ出血シ來リ、其甚シキヤ患者茫
然爲メニ爲ス所ヲ知ラザルアリ、罕レニハ潰瘍ノ破ル、ニ當リ病毒深
部ニ侵入スルヲ得テ間々全眼球炎ヲ惹起
シ眼球爲メニ全ク破潰セラル、ニ至ル
夫レ潰瘍ノ破ル、ヤ通常虹彩ハ其窄孔ニ
接着シ穿孔稍々大ナレバ之ヲ閉塞シ、且ツ
少シク脱出シ其ノ状恰モ蠅虻ノ眼ニ髣髴
タリ、之ヲ虹彩脱出症 *Prolapsus iridis* ト云フ
是ニ於テ房水復タ蓄積シ、其後ハ脱出セル
シ視力ノ害ハ穿孔ノ位地ヨリ關シ、穿孔ノ位地若シ角膜ノ中央ニアレ
シ視力ノ害ハ穿孔ノ位地ヨリ關シ、穿孔ノ位地若シ角膜ノ中央ニアレ

バ視瞻ヲ害スルヲ甚シケレバ若シ邊縁ノ一小部ニ限局スレバ其害大ナラズ、後者ノ際ニハ瞳孔ハ一方ニ牽引セラレテ其ノ正圓形ヲ失ヒテ橢圓形ヲ呈スルヲ例トス

潰瘍ノ破潰大ニメ虹彩ノ大部脱出セバ角膜ハ其ノ部ニ於テ菲薄ノ瘢痕ヲ形成ス又若シ破レテ角膜全部遂ニ破潰スレバ從テ虹彩ノ全部脱出シ瘢痕ヲ形成スルモ、角膜ハ已ニ全ク消失シ前房モ亦其ノ跡ヲ失シ、唯タ全虹彩ノ癒着セル一大瘢痕之ニ代リテ形成スルノミ、如斯狀況ヲ名ケテ**角膜勞** *Pithisis cornae* ト云フ

潰瘍破レ虹彩ノ脱出スルニ當リ、若シ適當ノ處置ヲ施コサレバ其ノ脱出部ニ於ケル瘢痕ハ菲薄ニメ内壓ニ勝ツヲ得ズ、而メ其瘢痕平低スルヲ能ハズシテ膨脹セバ之ヲ**角膜葡萄腫** *Hornhautstaphilom* ト云ヒ又葡萄腫ニシテ凹凸不平ナレバ之ヲ覆盆子狀葡萄腫 *Staphiloma racemosus* ト云フ、若シ潰瘍深入スレバ其ノ未ダ破潰セザル時ニハ底面ノ層菲薄ニメ内壓ニ抵抗スルヲ得ズ、漸次隆起突出ス、殊ニデスセメト

角膜出ハ又角膜
脱トモ譯セラル

氏膜ハ彈力性ニ富ミ久シク破損セズシテ内壓ノ爲メニ膨突セラレ玲瓏トメ水泡狀ニ突出スルヲ多シ之ヲ**角膜膨出症** 即チ「ケラトツエレ」ト云ヒ通常途ニハ破潰スルニ至ル、然レバ亦其儘依然トメ存留スル者モ多シ、又角膜ノ中部ニ穿孔ノ限局セル片ハ房水流出スルニ從ヒ水晶體ノ前面一時穿孔ニ接着シテ之ヲ閉塞シ、穿孔閉塞スルニ及ビテ水晶體舊位ニ復シ而メ虹彩毫モ瞳孔ニ關セザルヲアリ

角膜瘻 *Hornhautfistel* ハ間々潰瘍ノ穿孔後ニ遺存スル所ノ一症ニシテ、若シ之アル片ハ瘢痕ノ中央ニ當リテ暗黒色ノ一孔點アリテ房水ノ微々流出スルヲ見シ、本症若シ久シク存シテ房水ノ漏出止マズンバ眼球益々軟弱ニ陥リ、終ニ網膜剝離症ヲ發シテ失明スルヲ多シ
角膜瘻 *Ringgeschwür* ト云フ而テ、角膜ノ中央ニ來ル者ハ多クハ圓形ヲ爲セバ亦好ンデ横橢圓形ヲ呈スルヲ少カラズ

原因 潰瘍ノ原因ハ大凡四種ニ歸スルヲ得
 [一]外傷、手術等ニ乘シ
 來ル者アリ、殊ニ涙囊炎アレバ最モ危險多シ、蓋シ眞ノ外傷ノミナラズ
 睫毛亂生等ノ爲メ角膜上皮ノ缺損セル際ニモ無論發ス
 [二]都テ結膜炎ニ能ク續發ス、多クハ表層ヨリ始マルヲ例トス
 [三]罕レニ内因ノ爲メ來ルアリ殊ニ急性傳染病後ニ多シ、此際ハ先ツ角膜膿瘍起リ、破レテ
 潰瘍トナル
 [四]榮養不良ノ爲メ角膜壞疽ニ陷リ、潰瘍ヲ爲ス(詳細ハ下ニ詳ナリ)

潰瘍ハ概シテ下等社會ニ多ク、老人ニ多シ、一ハ外傷ヲ蒙リ易キト一ハ
 結膜炎ヤ涙囊炎多ケレバナリ

療法 [一]療法ノ通法ハ能ク潰瘍ヲ昇汞水デ防腐シ且ツ沃土防謨ノ
 細末ヲ潰瘍ニ散布シ、固定綱帶ヲ行フニアリ、「アトロビン」點眼ハ是非
 必要ナリ温罨法モ一日數回之ヲ行フハ有効アリ、其傍ラ傳染性潰瘍ナ
 レバ結膜下ニ千倍ノ昇汞水又ハ5%ノ食鹽水ノ注射貴ハル、併シ予ハ其
 奇効ヲ知ラズ
 [二]結膜炎ニ續發セル者ハ結膜炎ノ治療ヲ第一等トナス、

サレバ潰瘍ノ有無ニ關セズ、硝酸銀ノ塗布及冷罨法ヲ施シ、結膜ノ威勢
 ヲ挫折スベシ
 [三]潰瘍更ニ治癒ノ傾向ガキ者ハ**燒灼電氣**ヲ以テ
 潰瘍ノ緣界ト底面ヲ悉ク燒灼スベシ、緣界不明ナレバ「プロレスチン」溶
 液(○五%ノ曹達水一〇、〇中ニ〇)ヲ以テ染ムレバ上皮缺損セル所ハ悉ク
 鮮綠色ヲ呈シ、一目瞭然タリ。先ニ豫メ銳匙ヲ以テ潰瘍ヲ搔除ノ後チ燒
 灼スレハ奏効著シ、若シ燒灼電氣ナキ片ハ一ノ鐵線ヲ酒精火ニ燒キ代
 用スルモ亦可ナリ
 [四]又大ニ喜ハル、者ハ**角膜穿孔術**、若クハ
 ゼミ^ツシユ氏**角膜切開法**ニシテ潰瘍ノ進行シテ止マラザ

ル者ニハ之ヲ行フヲ妙トス
 [五]前房ノ蓄膿小量ナレバ溫罨法ニ藉リ
 吸收サル、モ其大量ナレバ角膜切開法ヲ施メ之ヲ排泄スベシ、是レ同
 時ニ潰瘍ヲ治スルノ方ナリ、虹彩切除ハ古人之ヲ行ヘル之ヲ行フ難
 クノ奏効ニ至リテハ單一ノ角膜切開法ニ優ル所ナシ
 [六]潰瘍ノ疼痛劇烈ナル者ハ「アンチビリン」、規泥涅、莫兒比涅等ノ内服必要ナリ、安眠ノ
 害セラル、者ニハ抱水「クロラール」ヲ可トス、若シ鎮痛ノ速効ヲ望マバ

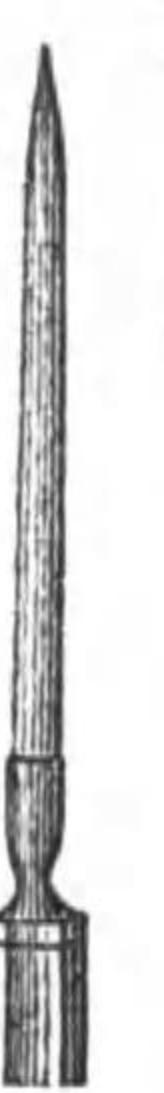
行牽周ナ新
ヘ引圍レバナ
可テリ虹彩
ナ其離彩虹
リ切シテ彩
除十能脱
チ分ク出

莫兒比涅ノ皮下注射ニ若クナシ
之ヲ治療スベシ [八] 虹彩脱出アレバ壓迫綱帶ヲ持長シ、而テ其脱出セ
ル虹彩ニメ久シク退カザレバ之ヲ剪除スルカ或ハ焼灼スベシ又硝酸
銀ノ棒尖ヲ以テ腐蝕スルモ可ナリ、若シ角膜瘻ニメ遺存スレバ之ヲ閉
ツルニモ亦硝酸銀ノ棒尖ヲ以テ其瘻孔ヲ燒キ後チ固ク綱帶スルヲ可
トス、而テ同時ニ虹彩切除ヲ行ヘバ瘻孔ノ速治ヲ催カスニ足ル

以上ハ潰瘍ノ通性並ニ療法ヲ略述シタル者ニゾ詳細ハ各論ニ於テス
[一] 角膜穿孔術 Paracentesis ハ角膜穿孔針(第百六圖)ヲ以テ角膜ヲ下
縁或ハ下外縫ニ於テ前房ニ穿刺シ尖頭ノ前房中ニ入ルヲ見レバ柄ヲ
第百六圖 橫ヘ虹彩ニ並行シテ進ミ創口ノ二
三密迷ニ達スレバ段々ニ針ヲ抜去
シテ前房水ヲ漏泄セシム、若シ其ノ
漏泄不充分ナレバ「スバテル」ヲ以テ創口ヲ開キ之シヲ反覆ス、若シ將ニ
穿孔セントスル潰瘍ナレバ其ノ底面ヲ穿刺スペキモ尖頭ヲ以テ水晶
横ヘ虹彩ニ並行シテ進ミ創口ノ二
三密迷ニ達スレバ段々ニ針ヲ抜去
シテ前房水ヲ漏泄セシム、若シ其ノ
漏泄不充分ナレバ「スバテル」ヲ以テ創口ヲ開キ之シヲ反覆ス、若シ將ニ
穿孔セントスル潰瘍ナレバ其ノ底面ヲ穿刺スペキモ尖頭ヲ以テ水晶



體ヲ負傷セシメザルニ注意スベシ、又燒灼電氣ヲ以テ潰瘍ノ底面ヲ燒
灼穿孔スルモ亦可ナリ



[二] 角膜切開術 Keratome 此術ハゼミッシユ氏ノ創爲セル所ニシテ
第百七圖

グレーフエ氏線狀刀(第百七圖)ヲ以
テ潰瘍ヲ横斷スルニアリ、即チ刀ヲ

全部ヨリ前房ニ穿入シ刀ヲ横タヘテ進行シ他側ノ健全部ニ出シテ潰
瘍ヲ徐々ニ切開スヘシ、刀刃ハ無論前方ニ刀背ハ後方ニ向ケザル可カ
ラズ、已ニ切開セハ前房水ノ出ルト共ニ前房ノ蓄膿自ラ排泄スルモ併
シ必スシモ無理ニ其ノ排泄ヲ要セズ。此ノ法ニ於テ獨リ不快ナルハ數
々創間ニ虹彩ノ插入シ後日續發性綠内障ノ素因ヲ爲スニアリ、該手術
後ハ潰瘍忽チ進行ヲ停止メ治癒ニ進ムト多ケレモ若シ否ラザル片ハ
「スバテル」ヲ以テ後チ復タ創口ヲ開キ前房水ヲ再回漏泄スルヲ要ス

谷論

[一] 吸收性潰瘍 Resorptionsgeschwür

本症ハ多ク腺病性ノ小兒ニ發スル者ニメ角膜ノ中部ニ呈ハレ、「フリクテント」同時ナルコ多シ、其ノ性狀大ニ他ノ潰瘍ト異ニメ常ニ圓形ノ小缺損ヲ爲セバ、其ノ底面ノ透明ナルト刺戟症ノ少ナキトヲ以テ看過し易シ、視力ハ唯ダ其瞳孔部ニ來ルキノミ害セラル、モ、他部ニ發スレバ別ニ障害ヲ爲サムルヲ以テ患者モ亦自ラ知ラザルト多シ。

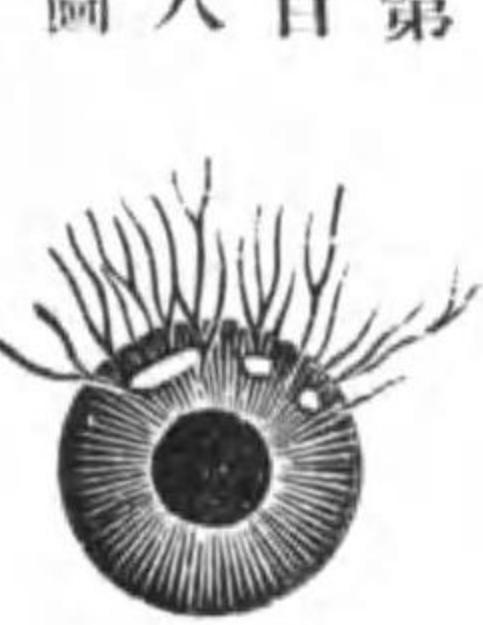
經過 通常兩三日ニ上皮先ツ其ノ缺損ヲ覆フモ缺損ノ全ク補充平夷スルニ至ル迄ハ長日月ヲ費スコ多シ、又潰瘍ノ透明ナルニモ拘ハラズ、漸々穿入シテ深層ニ及ホシ穿孔スルコ少カラズ、仲々油斷ナラズ、**療法** 刺戟症アレバ「アトロビン」ヲ點眼シ、繃帶ヲ施シ、其他甘汞撒布或ハ黃降汞ワゼリンヲ以テ之ヲ刺戟シ、缺損ノ補充ヲ促ガスヘシ、止ヲ得スンバ硝酸銀ノ棒ノ先又ハ燒灼電氣ヲ以テ點燒スヘシ。

[二] 單性潰瘍 Ulcus simplex

只角膜潰瘍ト云ヘ
シハチ云此部ニ屬スル者
區別ニ又名稱ヲ付

本症ハ只單ニ又角膜潰瘍ト稱セラレ角膜ノ外傷若クハ結膜病ニ伴ヒ來ルヲ一括セル者ニシテ、初メ角膜ノ表層若クハ深層ニ灰白色ノ浸潤或ハ膿瘍ヲ生シ、其前壁破レテ潰瘍トナルナリ、此潰瘍ハ常ニ劇甚ノ刺戟症ヲ發シ、深入穿孔スル者多シ、前房ニハ屢々蓄膿ヲ來シ、又タ能ク虹彩炎ヲ合併ス、今ヤ特ニ注意スペキ者ヲ左ニ上ク。

[一] 「フリクテン」性結膜炎ニ伴ヒ角膜炎ニ接シテ潰瘍ノ生スルコアリ又角膜ノ中部ニ「フリクテン」來リ、數々破レテ潰瘍ヲ爲シ能ク穿孔ス。



第百八圖

[四] 「トランク」ニモ亦角膜邊緣ニ潰瘍ヲ爲シ能ク穿孔ス。老人ニ多ク、時トシテ結膜ニ何ノ異狀ナク邊緣潰瘍ノ來ルコアリテ小潰瘍ヲ呈ス最モ多キハ「パンヌス」ノ縁ニ沿ヒ半月狀ノ潰瘍ヲ爲シ甚シキ刺戟症ヲ呈スルニアリ、罕レニ「パンヌス」全クナキニ角膜ノ中央ニ當リ透

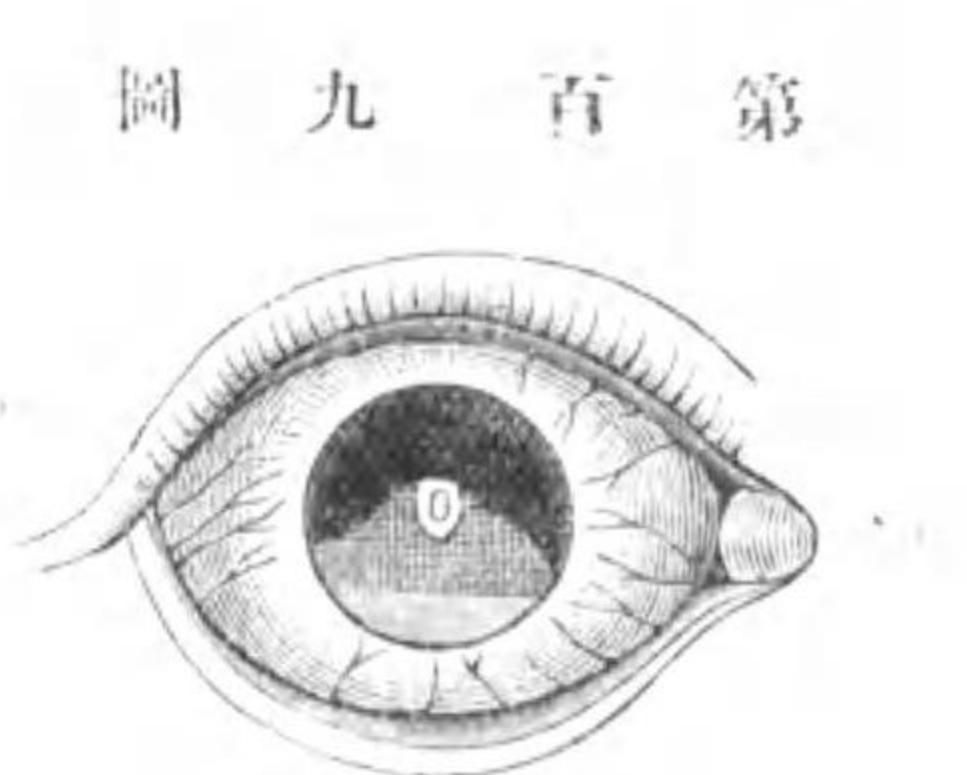
本病ハ俗ニ
キメト稱シ
ル取月ニニ
ニ交遇タ
リ當稻穀
ノ間多シ
草六ヶ
セヲ七之間

明ナル潰瘍ノ來ルアリ其ノ刺戟少ナキ爲メ患者自ラ訴フル所少ナキ者ア
リ。〔五〕膿漏性結膜炎及ヒ實扶的里性結膜炎ニ潰瘍ノ續發スルト多シ然ルヰハ角
膜縫ニ接シテ鑑状ノ潰瘍ヲ生ズルカ或ハ先ツ中部ニ膿瘍ヲ發シ其破潰シ
テ潰瘍トナルカ此兩者ヲ多トス。

療法 通論ニ從ヒ「コカイン」並ニ「アトロビン」ヲ點眼シ温罨法ヲ兼用
スヘシ若シ之ニ由リテ輕快セザレバ燒灼法、穿孔術、或ハ切開術ヲ試ミ
結膜ノ分泌盛ナレバ時々論セズ硝酸銀ヲ用ユヘシ

〔三〕匐行性潰瘍 *Ulcer serpens* (第百九圖ハ匐行性 潰瘍ニ前房蓄膿症ヲ示ス)

本病コソ千遍萬舉ノ動物試驗ニ依リ真ニ微菌的傳染病タルコト毛頭
疑モナク、其菌タル種々アリト雖近來ウトホフ氏等ノ検査ニ依レバ本
症ニ於ケル微菌ハ主トメフレンケル氏肺炎菌ナルコ確定セラレタ。
多クハ四十歳以上ノ人ニ來ル者ニメ葉端、穗尖、枝尖、石片等ニ負傷セラ
ル、コ之カ主ナル原因ニメ殊ニ田舎ニ在リテハ、稻、麥等ノ負傷ニ於テ



角膜ノ中央ニ潰瘍アリ
前房ノ下部ニ蓄膿ノ状ヲ示ス

最モ多シトス。然モ患者往々負傷ヲ知ラ
ザルアリ、又必シモ負傷ヲ要セズ、何ニカ
他ノ原因ニ由リ角膜ノ上皮ニ缺損アリ
バ傳染ノ啓發スルコ勿論也。然モ都テ結
膜炎或ハ涙囊炎アルノ際、角膜ニ負傷ヲ
被ムレバ此危險殊ニ甚シク概シテ下等人ニ
多シ。初メ負傷部殊ニ角膜ノ中部ニ
灰白色或ハ帶黃白色ナル圓形ノ浸潤若
クハ膿瘍ヲ生ジ次デ潰瘍トナリ、其ノ性タル深入スルヨリハ横面的ニ
蔓延スルノ傾向アリ底面ハ潤澤シ邊緣ハ灰白色ニメ峻削ナリ、其ノ周
圍ニ又灰白色ノ潤澤アリ疊暈ヲ畫シ、或ハ放線狀ヲ現ス。前房ニハ常ニ
蓄膿ヲ生ズル故ニ又前房蓄膿性角膜炎 *Hypopyonkeratitis* ノ名
アリ而テ其蓄膿ハ少許ナルアリ又前房ニ一杯滿ル者モアリ。虹彩炎ハ
其多少存セザルハ極メテ稀レナリ、最モ不幸ナル歸轉ヲ取ルキハ病毒

深部ニ轉移シ、全眼球炎ヲ惹起スルニ至ル。

自覺症

多クハ劇甚ノ刺戟ニメ流涙、羞明、毛様痛アリ、眼球結膜ハ充血シテ且ツ浮腫ス。又タ數々刺戟症ノ遙カニ輕症ナル爲ニ患者敢テ意トセズ、放任シ、角膜ノ大部已ニ破潰セラレ漸ク醫治ヲ乞フ者アリ。

豫後 假令ヒ輕々ニ經過スルコアルモ小ナレ大ナレ白斑ノ遺存ハ到底免カル、ト能ハズ、故ニ角膜若シ破潰スルニ至ルモ局部ノ小葡萄

腫カ若クハ小形ナル癒着性白斑位ニメ止マレバ尙ホ幸トス、多クハ假令適當ノ療法ヲ行フモ角膜ノ大部破潰セラル、ヲ常トナス、故ニ實ニ

危險凶惡ナル傳染性角膜病ト云フ可キナリ。本病ニメ穿孔シ、病勢留レバ可ナリ。穿孔スルモ猶ホ進行スル者アリ豈ニ怖レザルベケンヤ。

療法 [一]昇汞ヲ以テ能ク結膜及角膜潰瘍ヲ洗掃シ次ニ毎日二回沃土彷謨ヲ潰瘍面ニ撒布シテ繃布ヲ施シ且一日數回「アトロビン」ヲ點眼シ温罨法ヲ行フ、若シ之ニ由ツテ停止セザランカ或ハ潰瘍已ニ稍^ミ大ナル片ハ宜シク [二]燒灼法若クハゼミッシユ氏切開法ヲ行フベシ、殊ニ燒

的ア瘍ヲ近來肺炎菌ノ血清
チルモ治之テ未スタルノノ十分希望

灼シテ後チ切開スレハ大ニ可ナリ [三]療法ハ色々ト諸人ノ講究ヲ經タレ凡未タ充分ト云フ能ハズ、燒灼法又ハ切開法ヲ行フモ尙ホ効ナキコ多シ、又切開シテ潰瘍止ルモ虹彩ノ創口籍入ニ由リ後日綠内障ノ起リテ失明スル者アルヲ以テ之ヲ排スル者少カラズ、依テ或ル一部ノ士ハ夫レ等ノ手術ヲ廢シ只穹窿部ノ結膜ヲ硝酸銀ノ棒ニテ腐蝕シ効ヲ收メシトテ満足セルアリ(奏効ノ理由ハ不明ナリ) [四]淚囊炎アレバ成規ニ從ヒ同時ニ之ヲ治癒スルコ最モ緊要ニメ看過スペカラズ

四 蠕蝕性潰瘍

Ulcus roderi (第一百十圖)

本症ハ角膜緣ニ鎌状ノ潰瘍ヲ生シ其性敢テ深入セズ、唯ダ表在性ニ漸々角膜ノ上層ヲ侵蝕シ通常全角膜面ヲ侵シ、而ノ後チ止ム者トス、抑モ此潰瘍ハ其ノ性トシテ進み且ツ治スルヲ以テ其ノ進行線ハ峻削ニシテ灰白色ナレル、底面ハ上皮ヲ以テ覆レ且ツ血管之ニ入リテ稍^ミ透明ナリ、疼痛ハ隨分甚シト雖モ爾他ノ刺



第一百十圖

乾症ハ輕少ナリ且ツ前房蓄膿症ハ常ニ缺如ス
原因 不明ナリ、其多クハ兩眼ニ來ルヨリ見バ、何カ全身病ヨリ關ス
ルガ如シ、

フツキス氏ハ燒灼
云ニ依リキス予是モハレ確効アリト
ナラリフモハ反復タタ見タ害數々見
タハレ見タ害數々見タ害數々見タ害

豫後 通例不良ニメ平常如何ナル非常手段ヲ施スモ到底徒勞ニ屬ス、然レバ潰瘍ノ經過後ニ於テ角膜稍々透明ニ復シ規力ノ多少出ル者多シ、經過中縱合適當ノ療法ニ由テ潰瘍一時治癒スルガ如キモ時ヲ待タズシテ復々再發ヲ初メ舊ノ潰瘍縁ニ灰白色ノ新浸潤ヲ來シ進ムヲ常トス、然レバ其判決難キキハ「プロレスチン」液ヲ用ユレハ進行緣ハ綠色ニ染ムルヲ以テ一目瞭然タリ。

〔附錄〕表層邊緣角膜炎 Keratitis marginalis superficialis ハ角膜ノ緣ニ沿ヒ淺在性ノ極

〔五〕枝狀角膜炎 Keratitis dendritica (第百十一圖)

溝狀角膜炎 Furchenkeratitis



此症ハ角膜ノ表面ニ淺溝ノ潰瘍アリテ、劇甚ノ刺乾症ヲ以テ枝葉ヲ派出シ、勾行スル者ヲ云フ而メ其ノ枝葉ノ末端ニハ常ニ灰白色ノ浸潤アリ、進ミ且ツ破レテ潰瘍ヲ形成ス、此ノ角膜炎ハ治後ト雖ニ樹枝狀ノ溷濁ヲ止ムルヲ以テ之ヲ知ルベシ、病原ハ不明ナリ、角膜「ブリクテン」或ハ「ヘルペス」ノ一變種トシ、或ハ一種ノ傳染性角膜病トシ、未ダ定説ナシ、

療法 昇汞水ヲ以テ洗滌シ「エゼリン」ヲ點眼スルヲ可トス

〔六〕神經麻痺性角膜炎 Keratitis neuroparalytica

本症ハ三叉神經麻痺シテ角膜其知覺ヲ失ヘル時ニ來ル者ニメ、角膜中央ノ臉裂ニ當、レル部ニ於テ初メ溷濁ヲ起シ、已ニメ上皮剥離シテ横ニ橢圓形ノ潰瘍ヲ爲シ周圍ニ向テ進行シ、且ツ潰瘍ノ中央益々灰白色ニ溷濁シテ化膿シ、續テ前房蓄膿ヲ生ジ角膜ハ遂ニ潰破シテ失明ス。経過 緩慢ニシテ刺戟症少ク、豫後ハ不良ニメ已ニ治ニ赴ムクモ亦增悪ス。

原因 在昔佛國ノ名士マゲンジ氏カ動物ノ三叉神經ヲ切斷シテ試験的ニ此症ヲ作爲スルヲ得テヨリ、今尙ホ營養神經ノ障害ヲ以テ立論セル者多シ。爾來諸々ノ試験アリト雖凡未ダ明カナラズ。ス子ルレン氏ハ角膜知覺ノ脱失ヨリシテ外傷ヲ被ムリ易ク從テ本症ヲ發起スト云ヒ。ハイエル氏ハ角膜ノ知覺ヲ失ヒ眼瞼ノ瞬目運動ノ減ゼルヨリシテ角膜ノ下部勢ヒ乾燥シ易ク以テ本症ヲ起ストナセリ。右三説今日尙ホ對立シテ未タ一定セズ、或ハ三因相助ケテ本症ヲ起セルヤモ知レズ。

療法 「アトロビン」ヲ點眼シ、濕性綿帶ヲ施シ、且ツ一日中四五回ノ温

巻法ヲ處スペシ

[七] 兔眼性潰瘍 Ulcus ex lagophthalmica

本症ハ眼瞼輪匝筋ノ麻痺、眼瞼ノ外翻、眼球ノ突出等ノ爲メ閉目シ難ク角膜ノ下部曝露シテ乾燥セルキ角膜ノ下部ニ當リ先ツ其上皮灰白色ノ溷濁ヲ生シ、破レテ淺キ潰瘍ヲ爲セルヲ云フ、其ノ増悪セルキハ多ク上皮ノ缺損ヨリ微生物染入ヲ來タシ、角膜化膿シ前房蓄膿ヲモ發シ次テ角膜穿孔ヲモ來スニ至ル。

豫後

角膜破レズノ一部ノ白斑ヲ以テ終ルヲアリト雖凡、適當ノ法ヲ得ザレバ破レテ虹彩脫出シ甚シキハ全眼球炎ヲ起ス。

療法 [一] 脣裂不閉症アラバ豫防的ニ之ヲ閉塞スル要アリ即チ臉裂縫合術、カ若クハ單ニ一時綿帶ヲ施行スペシ。[二] 已ニ潰瘍ヲ生セバ防腐法ヲ施シテ固封綿帶ヲ行ヒ時々之ヲ去リ温巻法ヲ以テ潰瘍ノ治療ヲ促スペシ。

〔ハ今ヤ手下ニバ
セトウ病ノ爲メ左眼
球甚シク突き出シ
潰瘍ノ爲メシメシメシ
セヨリ縮小セシ有メシ
セヨリ潰瘍頓ニ治療テ
眼瞼兎眼症ノ章ナ
參照スペシ〕

角膜軟化症

西洋ノ断食ト云フ
ハ主トシテ獸肉ヲ
食セザルニアリ

此ノ小兒病ハ漢家
ニテ脾疳ト云フ
明治三十年
後本症チ多ク實流

此ノ小兒病ハ漢家
ニテ脾疳ト云フ

レ疎眼瞼結膜ハ常ニ多少暗色ノ充血症ヲ呈ス
此レ小兒ノ症狀ハ慢性脇加答兒、腹部膨脹、氣管枝加答兒等ニメ多クハ
甚シク削瘦シテ皮膚弛緩シ、熱モ多少存在ス、然レ疎此等ノ症更ニナク
只營養衰ヘタルノミニ過ギザル者少カラズ

豫後 早ク適當ノ療法ヲ行フニ非レバ極メテ不良ナリ、殊トニ年齒
愈々弱ケレバ愈々不良トス、但シ眼病ノミナラズ生命亦危シ

原因 營養不良ヲ最大原因トス、大人ト雖疎其營養甚シク損害セラ
ル、キニハ間々本症ヲ發ス例ヘバ室扶斯、黃疸等ニ於テ然リ、麻疹後ニ
ハ最モ多シ、予ハ脚氣患者ニモ之ヲ實驗セリ、婦人ハ產後本症ニ罹リ易
シ、又日本ニ於テハ女工モ虐待ノ爲メ罪ナクシテ本症ニ罹リ失明スル
者多シ、都テ小兒ガ營養害セラル、コト甚シケレバ本病ヲ疾ミ易シ、殊
ニ里子、私生兒等ニ於テ然リ、先天梅毒ノ小兒ニモ多シ、本邦ニテハ六七
月ノ候ニ最モ多トス〔「ラジル」國(南亞米利加)ニテハ黑奴ノ小兒ニ多シ
魯國ニテハ斷食ノ時季(二月中旬)ニ多シト云フ、旅順ニ於テモ露兵本症

結膜乾燥症ト同時
参考病スペシ其章ヲ
角膜ノ潤滑セルヤ
シリ實質炎ト誤ルコア
シク注意スペ

者ニ陥リ眼瞼ヲ開放シテ臥シ、且ツ營養大ニ衰弱セルヲ以テナリ、此等
ノ豫防法トシテ或ル事情ノ爲メ縦令ヒ繩帶或ハ手術ノ如キハ爲スヲ
得ザルモ硼酸(アセリン)ヲ點入シ且ツ瞼緣ニ塗布スルヲ可トス

(八) 角膜軟化症 Keratomalacie

本症ハ又ニ角膜乾燥症(Xerotica)ト云ヒ、脇加答兒、氣管枝加答兒等ニ
罹レル營養不良ノ小兒ニ於テ最モ多ク、同時ニ**結膜乾燥症**及ビ
夜盲症アルヲ常トス、眼球結膜ノ乾燥ハ著明ナリ、殊ニ角膜ノ兩側
ニノ臉裂ニ相當セル部ニ於テ泡沫様ノ白斑ヲ以テ起リ其ノ他部ニ蔓
延スルト、同時ニ角膜モ亦乾燥シテ少シク光澤ヲ失シ、已ニメ其ノ中部
ニ潤滑ヲ生ジ、其ノ黃色ニ變ズルト共ニ角膜破潰シ其經過ハ甚タ速ニ
メ小時ヲ出デザルニ早クモ已ニ角膜ノ全部崩潰スルコト多シ、然レ疎
亦病勢弱ク唯小部ノ破潰ニ止マル者モアリ。本症ニ又特有ナルハ流涙、
疼痛等ノ如キ刺戟性比較的ニ少ナク且ツ結膜モ其反應輕少ニメ唯タ
角膜周擁部ニ當リテ不快ナル暗赤色ノ鬱血アルヲ見ル位ニ過ギズ、然

ニ罹リ失明セル者多カリシト聞ク。結膜ノ上皮細胞ヲ取り之ヲ検スレバ乾燥菌多ク存ス、然レバ此菌ガ本乾燥症ノ原因タルヤ未ダ確定セザルハ既ニ結膜乾燥症ノ部ニ述べタリ。

小兒ニ重湯ヲ與ヘ日母乳ニ代フホタルハ今ベラクハカラズ
母乳者ハ無論治スベカラズ故ニ其未ダ排撃セザルベ宜行カ
大ニ犯サレザルニ及ベアルニ
角膜ノ已ニ破潰セラケ當リ適方ザルチ見タ色
予ハ已ニ全ク白色明ニシ角膜サヘルチ復セル
ナリシ角膜白透色

西洋ニハ概メ少ナク、日本ニハ田舎ノ小兒ニ極メテ多ク又爲メニ失明スル者毎年何萬何千ト云フ數知レザル程ナラン而メ其主因ハ十ガ八食傷ノ爲メ慢性腸加答兒ニ罹レルニ在リ、然レバ原因不明ノ者亦多シ。[一]豫防且ツ療法トシ、營養不良ヲ治スルニアリ、小兒ナレバ乳汁ヲ精選ス、母乳ノ代用トシ、殊ニ牛乳ノ普及ヲ謀リ、且ツ法律上其ノ精良ヲ監督スルコト必要ナリ、又我監獄ヤ工場ハ大ニ其食料ノ改良ヲ要ス。[二]已ニ本症ヲ發スレバ局部ニ温罨法ヲ施シ内服ニ汗油ヲ數滴程牛乳若シクハ「コンデンスマルク」ニ混ジテ與ヘバ奇効、目前ニアリ、但シ肝油ニメ與フベカラザレバ雞ノ肝臟ヲ細切シ、其ソツブヲ與フルモ亦効アリ、是レ漢法ニ出ルト雖、其効アル余ノ信ジテ疑ハザル所ナリ、
〔三〕下痢アレバ腹部ヲ暖タメ一旦甘汞ヲ與ヘ然後チ硝蒼或ハ醋酸鉛

ヲ内服セシメ下痢ヲ止ムベシ、若シ下痢甚シクメ止マザレバ鉛糖水或ハ硝酸銀水ヲ以テ灌腸スペシ。[四]此他予ノ経験ニ角膜ノ危険甚シケレハ肝油ヲ與フルト同時ニ眼球結膜下ニ温カキ5%ノ食鹽水ヲ注射スルモ宜キカト思フ、兎ニ角尙ホ夜盲症ノ際之ヲ注射シ他ニ何ヲモ與ヘザリシニ夜盲ノ頓ニ治セルヲ見タルコ數々ナリ、又點眼ニハ「エゼリン」ヲ可トス。

角膜軟化症ハ又廣義ノ意味ニ於テ角膜ノ急劇ナル崩潰ヲ通稱ス、故ニ急性膿漏性結膜炎或ハ白内障手術等ノ際角膜化膿ノ急劇ニ進行セル者モ軟性症ト記スル書アレ凡、本文ノ者トハ性質全ク異ナリ

第二章

老人環

Arcus senilis (第百十二圖)

本症ハ比較的ニ壯年ノ者ニモ來ルコナキニ非ザレモ多クハ老人ニ發スルガ故ニ此名アリ、角膜緣ノ内方一二密迷距テ灰白色ノ環輪ヲ生ジ角膜緣ヲ周匝ス輪ノ外縁ハ判然タレバ内縫ハ模糊トシテ漸次健康部ニ移行ス、其ノ發育ハ角膜ノ上方ニ著ルシク、他部ニ猶ホ未ダ現ハレザ

圖二十百第



ルニ早クモ此ノ部ニハ發育シテ弓形ヲナシ、解剖上本症ハ角膜中層ニ於ケル脂肪變性或ハ「ヒヤリ」ン變性ナリ

角膜翳 Hornhautflecke

性又澱粉變性ノ來
性ニハ硝子様變
ルアリ

〔一〕本症ハ普通角膜炎後ニ殘留スル所ノ溷濁ニシテ浸潤若クハ潰瘍ヨリ發スル者トス、其ノ所在ハ表層ナルアリ、實質ナルアリ、又中部或ハ周圍ナルアリテ一定セズ、本症ヲ其厚薄ニ從ツテ左ノ別ヲ爲ス

一、薄翳乃チ「スペクラ」ハ極メテ菲薄ニシテ殆ド透明ナル者ヲ云ヒ

二、斑翳乃チ「マクラ」ハ半透明ノ者ヲ云ヒ

三、白斑乃チ「ロイコム」ハ不透明ニメ白色ノ厚キ者ナリ

角膜翳ノ面ハ健全部ト平等ナルカ或ハ之ヨリ高ク或ハ低シ、其低フメ溷濁薄ク殆ド透明ナル者ハ即チ磨滅症ト云フ

〔二〕角膜翳ノ久ク存セルキハ往々石灰變性並ニ脂肪變性ニ罹リテ或ハ純白色或ハ帶黃白色ニ變ズ、又點眼用ノ鉛糖モ之ニ沈着セル者アリ

〔三〕白斑ニ虹彩ノ癒着セルハ先キニ潰瘍ノ破ル、ニ當リ虹彩脫出セシガ爲ナリ之ヲ愈着性白斑 Leucoma adhaerens ト云フ

〔四〕角膜翳ノ瞳孔領ニ在ルヤ其ノ翳菲薄ナレバ光線ヲ通過セシムルモ亦之ヲ散亂スルヲ以テ視力ヲ害スルコ意外ニ甚シ、若シ濃厚ナルモ正然瞳孔ノ一部ヲ覆ヘバ唯光線ノ一部ヲ奪取スルニ過ギズシテ眼底ノ像ハ顯然明瞭ナルヲ以テ其ノ害比較的ニ少シトス

〔五〕角膜翳ハ多クハ又角膜ノ彎曲ヲ不正ナラシメテ不正亂視ヲ起シ視力ヲ害シ數々一眼ノ複視ヲ來ス(然レニ圓柱鏡若クハ裂孔鏡ヲ以テ檢

スレバ時トシテ大ニ視力ヲ出スヲ得ベシ)

角膜翳ハ概メ視力ヲ害スルヲ以テ少年中ニ之ヲ受クルキハ近視、斜視、弱視、眼球震盪症等ヲ誘起スルノ恐アリ

〔六〕角膜翳厚キキハ一日瞭然タレキ其薄キキハ往々之ヲ看過スルコアリ、然レニ斜照法ヲ用キルカ又檢眼鏡ヲ用キテ徹照スルキハ其ノ誤チ無カルベシ、殊ニ平面鏡ヲ以テ瞳孔ヲ徹照スレバ其ノ照面ニ薄翳ハ暗

翳トシテ現出シ、角膜ノ彎曲不正アル片ハ照面平等ニ明瞭ナラズメ検眼鏡ノ運動ニ應ジ明暗交々變位スルヲ見ル、又眼底ヲ檢スレハ、乳頭ノ形狀不正ニメ種々變化シ、血管モ亦曲直不正ナリ、角膜計ヲ以テ角膜面ヲ檢スレバ輪割正シカラズ。

[七] 舊翳ハ新翳ニ比スレバ其色皓白ニメ青味少ナク、表面ノ反輝強也、又血管ニ乏シク羞明流涙等ナシ、新翳ハ灰白色ニメ表面光澤ナク、面上ノ反輝朦朧トシテ鮮明ナラザルヲ以テ判診スルニ足ル。

[八] 角膜ノ潰瘍幸ニ治癒シ薄翳或ハ厚翳留マレバ久シキ間、厭カズ、倦マズ以テ黃降汞軟膏ノ塗入ヲ試ミバ意外ノ奏効ヲ見ルト多シ、既ニ失明ト迄デ宣告シタル患者ガ往來自由ニ活歩スルヲ見テ一驚スルトアリ

療法 [一] 新翳ハ黃降汞ワゼリンヲ點入メ其吸收ヲ催スベシ、舊翳ト雖往々意外ニ透明トナルアリ [二] 石灰又鉛糖ノ沈着アリテ表上ニ存スレバ銳匙ヲ以テ之ヲ除去スベシ [三] 瞳孔前ニ在リテ視力ヲ害スル者ニハ假瞳孔術ヲ施スベシ、蓋シ薄翳ニハ反テ害アリ、若シ夫レ厚

シ亢刺墨
注進墨
意セ
シム
ベム
シル内數斑ノ
「壓タニ頂
多チ其入上

翳ナレバ豫メ「アトロビン」ヲ點眼ノ視力ノ増減ヲ試ミ果ノ增進セバ溷濁最モ少キ方向ヲ撰ンデ狹小ノ假瞳孔ヲ作ルベシ [三] 治スベカラザル白翳ニハ¹ 剗刺法 即チ入墨法ヲ施ス要アラン [四] 角膜翳ヲ除去シ其缺損部ニ健康ノ角膜一片ヲ移植スルノ法トシ 角膜移植術 アレ此通常又タ溷濁ヲ起シ奏効確實ナラズ [五] 眼鏡ハ或ル角膜翳ニハ大ニ益アリ、殊ニ適當ノ圓柱鏡若クハ強度ノ四鏡ハ間々大ニ視力ヲ増シ患者昔日ノ如ク其業ヲ執ルコラ得ルニ至ルトアラン

剗刺法

Tactowiring ウエケル氏創メテ之ヲ行ヒ其ノ法五千倍ノ昇

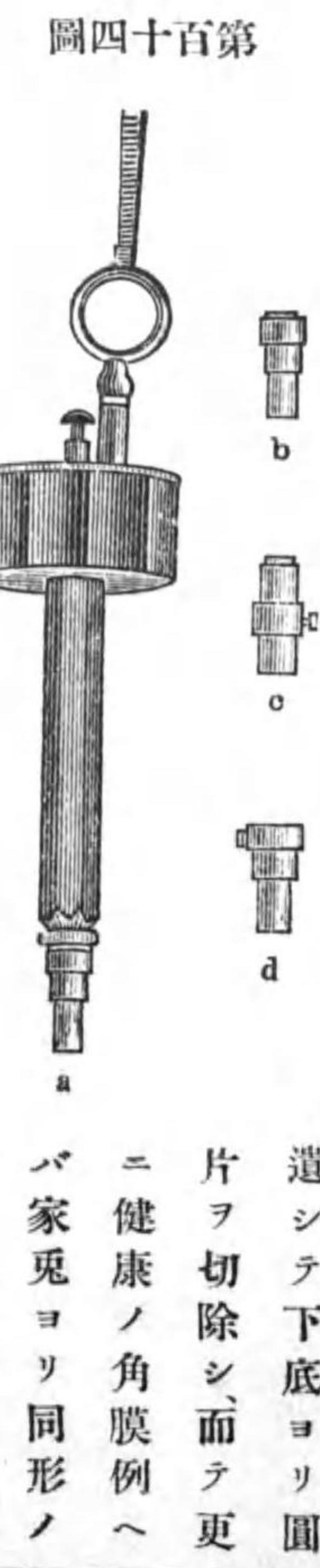


圖三十百第

汞水ヲ以テ良墨ヲ磨リ豫メ角膜ノ濕氣ヲ拭去シ、之ヲ翳上ニ點布シテ剗刺針(第百十三圖)若クハ截開針或ハ普通ノ針ヲ以テ墨ヲ刺入スルニ

在リ、本法ハ翳ノ陳舊ニメ刺戟症全ク缺如セル者ニ宜シ、其ノ効ハ専ラ外貌ヲ好クスルニアリ、薄翳ニ入墨セバ光線ノ散亂ヲ防グヲ以テ視力ヲ増進セシムル者トス、然レモ其効疑ハシキヲ以テ徒ニ之ヲ行フ勿レ。

角膜移植術 本法ハ古來諸家ノ試行セシ者ナレモ皆効ナク、近來ヒツペル氏ハ稍々見ルベキ奏効ヲ得テ高名ヲ博セリ、其法ハ一種ノ圓鋸即チ「トレパン」(第百十四圖)ニテ白斑ヲ輪切シデスセメット氏膜ヲ

本圖ノa b c dハ
圓鋸ノ大小ヲ示ス

予ノ経験シタル所ニテハ眞實炎症アラズ故ニ帶狀角膜アト云フヲ當然トス。予日本ニテハ初メテリテ世ニ切片報告セリ作

圖四十百第
甲圖五十百第

テ其缺損部ニ移植スルニ在リ、デスセメット氏膜ハ洞ニ房水ノ角膜ニ侵入スルヲ防グ者ナレバ之ヲ破損セザルハ手術ノ要點タリ、若シ誤テ之ヲ破損スレバ移植ハ無効ニ歸スト云フ。

遺シテ下底ヨリ圓片ヲ切除シ、而テ更ニ健康ノ角膜例ヘバ家兔ヨリ同形ノ一片ヲ切除シ來リ

帶狀角膜炎 Bandförmiges Keratitis (第百十五圖甲)

本症ハ罕レニ老人ノ健康ナル角膜ニ來ルト雖モ多クハ虹彩脈絡膜炎若クハ完全綠内障等ニ由リテ既ニ失明セル者ニ發スル症ニシテ瞼裂ニ當レル角膜部ニ灰白色ノ帶狀溷濁存スル者ヲ云ヒ、其發起スルヤ通常毫モ刺戟ナク角膜ノ兩側ヨリ稍々距テ起リ中央ニ至テ相會スルガ故ニ其溷濁ハ兩端ニ於テ尤モ著明ナリ或ハ兩端ノミニ存スルアリ、然レモボーマン氏膜ニ石灰ノ沈着セルニアリ、其他實質ニモ石灰、「ヒヤリング」脂肪等ノ退行變性物アルアリ、療法ハ無論絶無也矣。

外傷性線状角膜炎 Traumatische Streifen-keratitis

本症ハ角膜ノ外傷殊ニ最モ多ク白内障手術後ニ來リ、創縫ヨリ灰白色ノ線條多ク發生シ殆ント並行ノ對側ニ向フ、豫後ハ佳良ニノ通常一週日程ニメ消散ス、原因ハ角膜裏面ニ皺襞アルニ由ル(ヘツス氏ノ説)予モ角膜翳、帶狀角膜炎、外傷性線状角膜炎

明治三十五年之ヲ
報告ス

乙圖五十百第



亦細見上之ヲ確認ス然レニ只單ニ皺襞ノミカ或
ハ時ニ角膜ノ纖維間ニ浮腫アルカ未定ナリ、兎ニ
角炎症トハ云ヘザルナリ」

「附錄」眼ノ打撲又ハ眼ノ手術等ニ依リ角膜裏面ノ内
皮破損ヲ來セハ房水乃チ角膜中ニ浸潤シ潤濁ヲ來ス
綠内障ニ於ケル角膜ノ漠然タル潤濁ハ角膜纖維ノ壓迫ヨリ來ルニアリテ
房水ヲ漏セハ即チ潤濁忽チ消散ス、

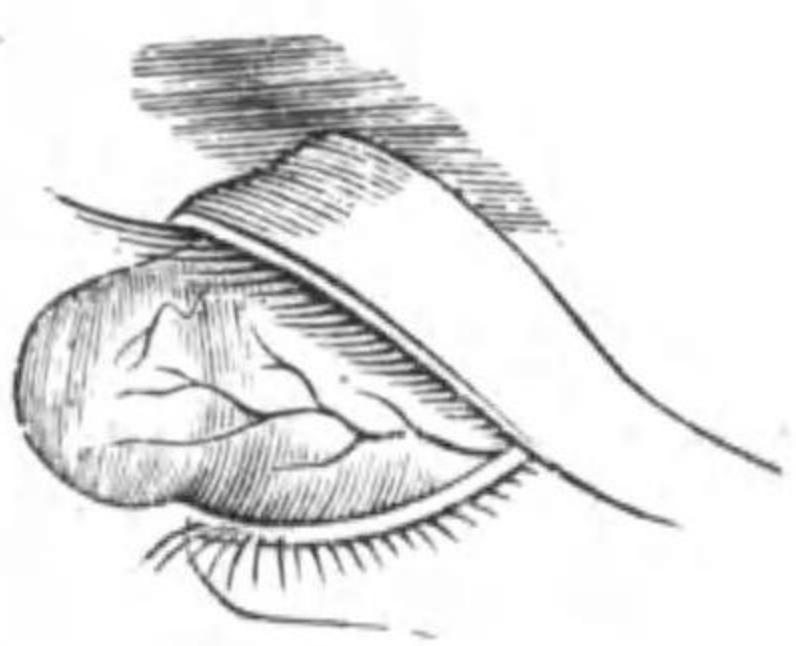
葡萄腫ヘ都テ眼球
可球ノ突出セルヲ眼球
ナリ
葡萄腫ト山云テ地云球

第三章

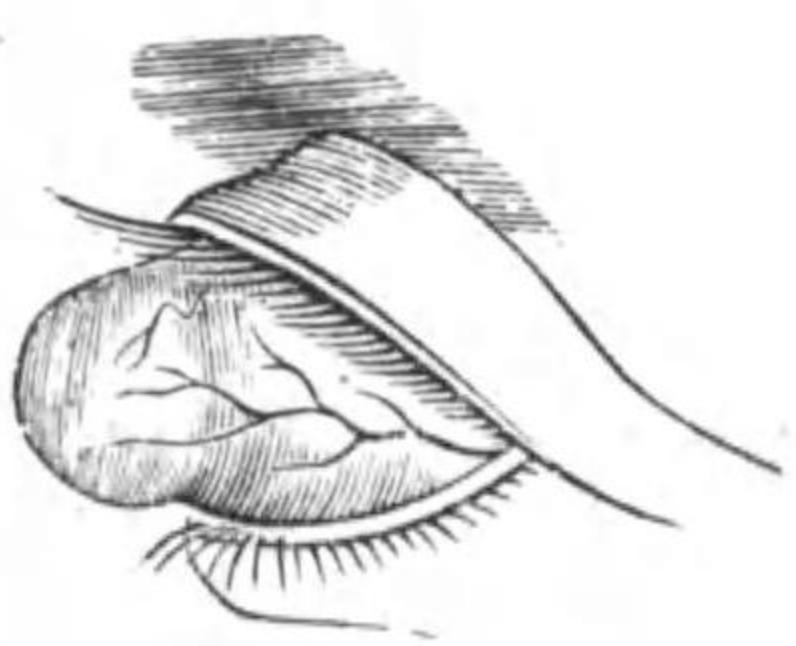
角膜葡萄腫 Staphiloma cornae

本症ハ角膜ノ一部或ハ全部ニ亘ル瘢痕ノ膨突セル者ヲ云フ、通常潰瘍
突孔シテ虹彩脱出セル者ニ續發スルヲ以テ瘢痕ハ其ノ裏面ニ於テ虹
彩ト癒着シ居レバ瘢痕若シ菲薄ナルキハ其ノ黒色ナルヲ透見シ得ベ

(一) 局部葡萄腫 Staphiloma partiale ハ角膜ノ一部ヲ侵ス者ヲ云フ、通



圖一百七十七



當角膜ノ中央ヨリ稍々下方ニ來リテ多ク
ハ圓錐形ニ膨突ヲ爲シ、球狀膨突ヲ爲スハ
罕レナリ、而ノ角膜ノ健全部ハ葡萄腫ノ局
所ニ向テ漸々隆起ス、蓋シ瞳孔ハ葡萄腫ノ
地位ニ從テ方向ヲ殊ニス、若シ葡萄腫ニメ
下方ニ在リ虹彩癒着スルモ上方ニ於テ其
癒着ヲ免カル、片ハ瞳孔ハ斜ニ前上方ニ
向フヲ多トス、又若シ角膜ノ中央ニ於テ潰
瘍アリ、穿孔セバ瞳孔ハ全ク癒着ヲ免カルベシ」

(二) 全部葡萄腫 Staphiloma totale (第百
十六圖)ハ通常角膜ノ大部破潰セル片ニ來
ル者ニメ角膜ハ全ク缺如セルカ或ハ唯ダ
僅カニ其周圍ノミ存留シ他部ハ盡ク葡萄

葡萄腫ニハ壁非
常ニ肥厚セル者アリ

腫ニ變シテ膨突シ、圓錐形或ハ球形ヲ爲ス、而テ虹彩ハ常ニ盡ク葡萄腫ト瘻着シテ前房モ亦消盡ス、蓋シ葡萄腫ノ新鮮ナル者ハ其ノ壁薄フメ稍々青色ニ透見スレバ陳舊ナル者ハ其壁厚フメ色ハ眞白ナリ、而テ新舊ノ中間ニ在ル者ハ其壁ノ厚薄未ダ一樣ナラザルガ故ニ凹凸均シカラズメ其角膜葡萄腫ノ面ハ恰モ覆盆子ノ如シ、名ケテ覆盆子狀葡萄腫 *Staphiloma racemosus* ト云フ、

病理解剖 (第百十七圖) 葡萄腫ノ壁ハ數々甚シク肥厚セル瘻痕組織ニメボーマン氏膜デスマツト氏膜共ニ缺如シ其ノ内ニ少許ノ血管配布シ且ツ屢々虹彩色素ノ粉屑散在ス、上皮ハ常ニ增息肥厚シ且ツ不正ナリ、裏面ニ附着セル虹彩ハ殆ント消盡シ只萎縮セル殘片ト色素ヲ留ム

原因 角膜潰瘍ノ穿孔スルヤ虹彩脱出シテ之ト瘻着シ漸々瘻着性白斑ヲ形成スベキモ其ノ未ダ强硬ナラザルニ當リ、患者屢々號泣、咳嗽、努力等ヲ爲シ以テ眼球ノ内壓ヲ高ムルカ、若クハ虹彩ノ脱出稍々過大ノ障害ナケレバ時日ヲ経ルニ從ヒ、瘢痕肥厚シテ脱出セル虹彩モ全ク平夷シ以テ葡萄腫ヲ免カル、コトヲ得ン

亦メ出比較的葡萄腫ハ其突
シ虹彩ノニ強クモ爲

障害 [一] 視力ハ局部葡萄腫ニ在リテハ多少之ヲ有スルモ全葡萄腫ニ在リテハ通常唯ダ僅カニ光覺ヲ存スルニ過キズ [二] 葡萄腫ハ獨リ其ノ醜容ヲ現ハスノミナラス結膜及臉緣ヲ刺戟ス [三] 眼臉閉鎖ヲ妨害シ葡萄腫ノ頂上乾燥シテ此ニ又潰瘍ヲ生ジ易シ [四] 内壓亢進シ一方ニ葡萄腫増悪シ一方ニハ乳頭ヲ陥凹セシメ遂ニ全然視力ヲ奪フニ至ル恐アリ、是レ最モ多キ不幸也、蓋シ其ノ原因ハ瘻着セル虹彩常ニ牽張セラレ其刺戟ニ由リ毛様體ノ分泌増進セラル、ニアリ從テ内壓亢進ハ局部葡萄腫ニ反テ多シ、然レバ一派ノ説ニ葡萄腫ニ於テハ虹彩ト

ホンタナ氏腔
房周圍ノ隅角ニシテ
房水吸收ノ門戸

角膜ト相接着スルヨリホンタナ氏腔閉塞セラレ即チ内壓亢進ヲ來ス
ト云ヒ、二説尙ホ未ダ決定セズ、之ヲ要スルニ内壓亢進シ退カザルヤ一
ニハ葡萄腫益々増進シテ或ル一定度ニ止ルカ、或ハ遂ニハ或ル些々タ
ル事柄ニ遭フモ容易ニ葡萄腫面ノ最モ薄弱ナル所破レテ内容漏泄シ、
已ニシテ其破孔復タ治癒シ、時アリテ復タ破裂シ、其反覆持續シテ止マ
ズンバ遂ニ眼球内ニ出血ヲ來シ或ハ其破孔ヨリ病毒傳染シ虹彩毛様
炎ヤ或ハ全眼球炎ヲ續發シ、末ヘニハ眼球萎縮症ヲ惹起スルニ至ルア
リ、若シスル歸轉ヲ取ラズシテ内壓亢進久シク持長セバ鞏膜一般ニ青
々ト膨脹シ以テ膨大ナル眼球ヲ爲スカ或ハ所々ニ「デク」
葡萄腫ヲ來タシ隨分醜形ヲ呈スル者多シ

療法

[一] 豊防法 初メ虹彩脫出アラバ壓迫繃帶ニ因リ固タ之ヲ壓迫シ
或ハ其脱出部ヲ切除シテ其平瘻ヲ助ケ又瘢痕成ルモ尙ホ新鮮ニ
シテ膨突シ易ケレバ壓迫繃帶ヲ持續シ且ツ努力ノ作用ヲ禁ズ

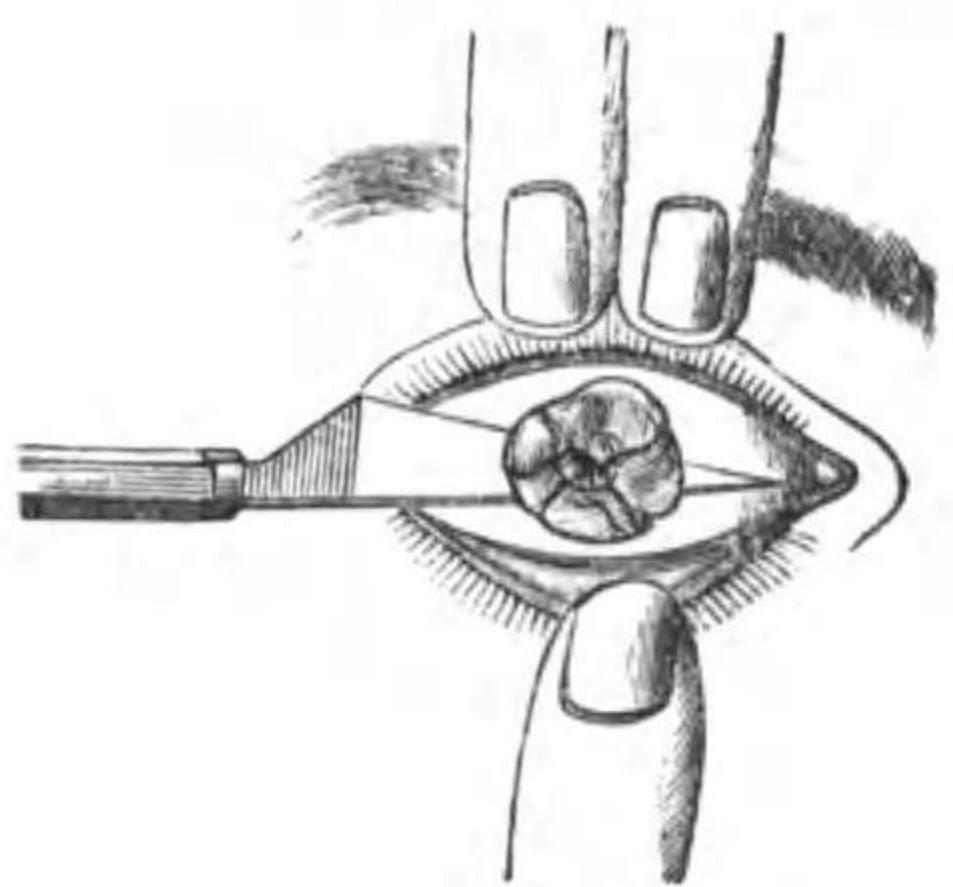


圖八十百第

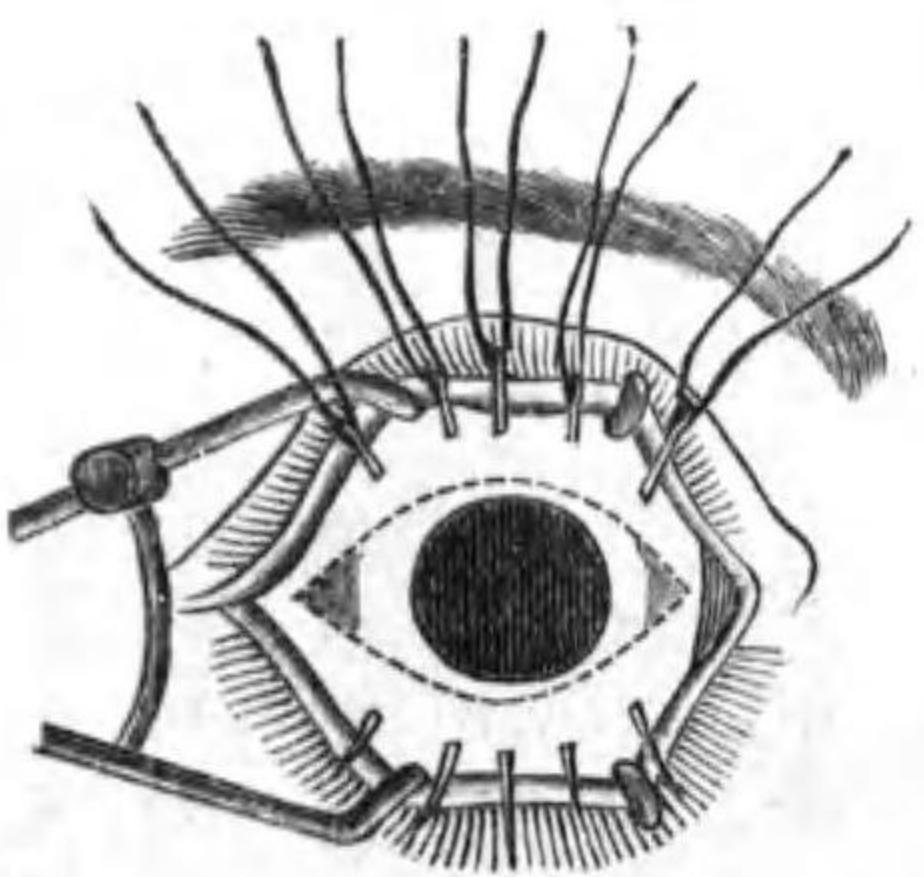
- [二] 局部葡萄腫ニハ、最モ多ク虹彩ノ健存セル部ニ於テ成ルベク早ク
潤大ナル虹彩切除ヲ行ヘバ内壓ヲ減ジ又視力ヲ回復セシムルニ
足ル、然レバ葡萄腫稍々已ニ舊故ニシテ其効ナキヲ見バ葡萄腫ノ
一部ヲ切除シ壓迫繃帶ヲ施シ新瘢痕ヲ作ル
ヲ可トス、然レバ切除丈ケヨリハ寧ロ創口ヲ
互ニ一二針縫合スルヲ確實トス、但シ切除ノ
方法ハグレーフエ氏ノ線状刀ヲ以テ先ツ腫部ヲ瓣状ニ切開シ更
ラニ剪刀ヲ以テ其瓣ヲ切除シ縫合スレバ足レリ(百十八圖)**
- [三] 全部葡萄腫ニハ** **[一]** 尚ホ初期ニメ壁薄ケレバグレーフエ氏線状
刀若クハペール氏内障刀ヲ以テ單ニ横断シ、或ハ葡萄腫ノ根ヲ
上方或ハ下方ニ半バ切開シタル儘、壓定繃帶ヲ行ヘバ足ル、同時ニ
水晶體脱出セバ却テ妙ナリ **[二]** 葡萄腫舊故ナレバ葡萄腫ノ大部
或ハ全部ヲ切除スルヲ緊要ナリ而シテ此ニハ有名ナルペール
氏法 Beer'sches Verfahrenアリ。此法ハペール氏内障刀ヲ以テ葡萄

水晶體ハ成ルベク
除去スルヲ可トス

圖九百第



圖一百第



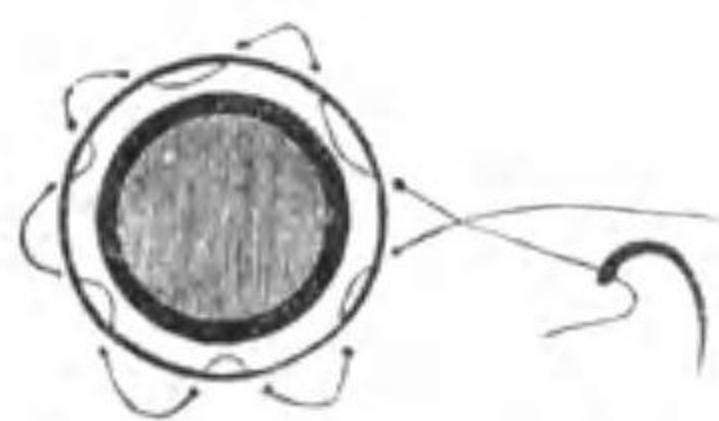
腫ヲ其ノ根底ニ於テ全ク切除スル者ニメ(第百十九圖)先ツ刀ヲ葡萄腫ノ根ニ通フシテ初メ上半ヲ切斷シ、其下半ハ剪刀ヲ以テ切斷スルニアリ。水晶體自ラ脱出シ、硝子體モ亦多少漏泄スベシ、然レバ此等ニ意ヲ留メズ、創面ニ沃土彷謨ヲ撒布シテ繃帶ヲ施セバ創口次第ニ縮少シテ治癒スルヲ常トス、但シ此法ハ創口大ナルヲ以テ硝子體ノ脱出過多ナルキハ眼内出血ヲ起シ全眼球炎ヲ來スノ恐レナキニアラザルモ是レ極メテ罕ナリ。

此ペール氏ノ法ハ葡萄腫ヲ根蒂ヨリ切斷シ、其創口ハソノマ、放任シ、自然ニ閉塞スルヲ待ツニアリ、故ニ時ヲ要スル甚シケレバ其創口ノ縫合ハ色々ニ工夫セラレタリ。

クリツチエ氏 Critchet ノ法ハ硝子體ノ暴出ヲ防クガ爲メ前ヘ以テ鞏膜ニ彎針三四本ヲ半バ穿貫シ置キテ葡萄腫ヲ全ク切除シ(第百二十圖)後チニ針ヲ全貫シ創口ヲ縫合スルニアリ、然レバ此法ハ針路ノ毛様體部ヲ通ズルヲ以テ、毛様炎及ビ交感性眼炎ヲ起スノ恐アレバトテ今日之ヲ用ユル者ナカルベシ。

現今最モ多ク用キラル、ハ先ツ角膜ノ周圍ニ於テ眼球結膜ヲ切開シ且ツ少シク剥離シテ、其創縫ニ豫メ糸ヲ通ジ置キ葡萄腫ヲ切除スルヤ即時ニ結膜ノ創縫ニ沿フテ出入シ置キ葡萄腫ヲ切除スルヤ糸ノ兩端ヲ締メ恰モ囊口ヲ締メルガ如ク結

圖一十二百



角膜葡萄腫

紫セリ(第百二十一圖)若シ大ナル葡萄腫ニシテ鞏膜ノ膨脹ヲ兼子甚シク突出セル者ハ最初ヨリ眼球摘出術ヲ行フカ、或ハ眼球内容除去術ヲ行フベシ

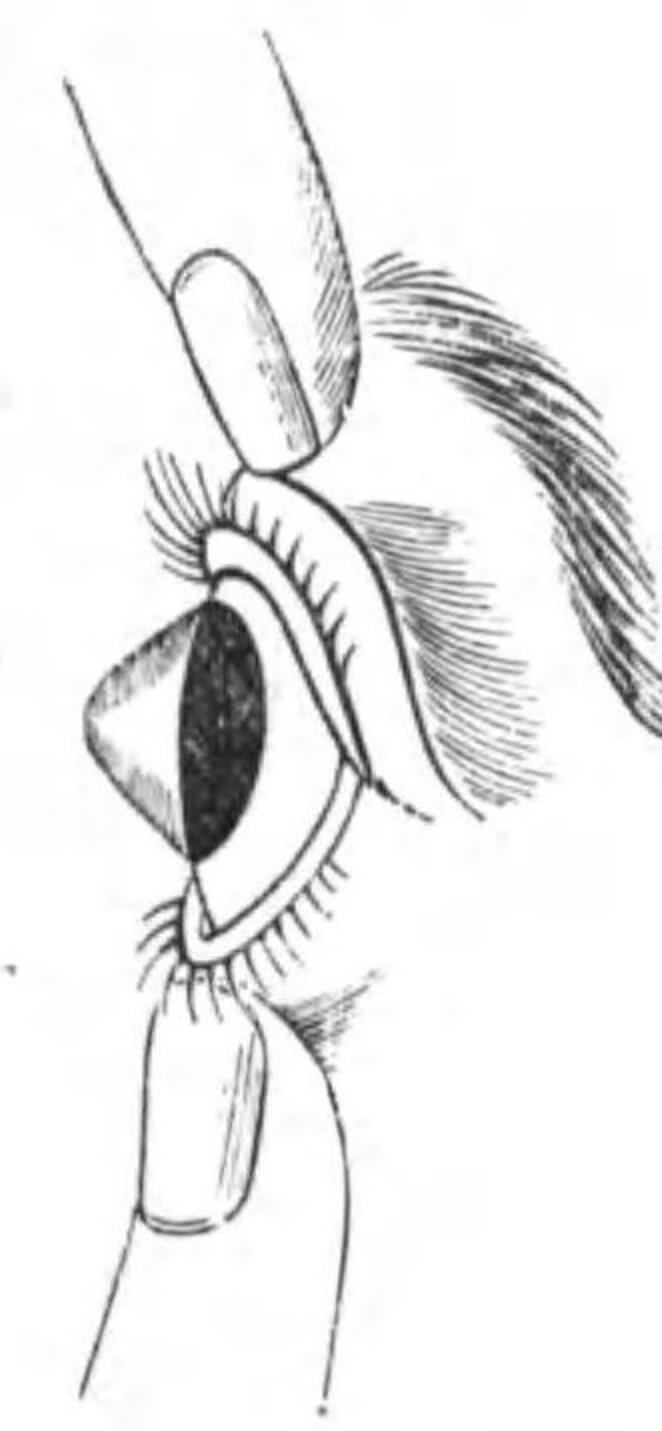
第四章

圓錐角膜(透明葡萄腫)

Keratconus(第百二十二圖)

本症ハ稀有ノ者ニノ先天或ハ後天ニ由來シ十二歳ヨリ二十歳ニ至ル女子ニ多ク、其ノ發スルヤ角膜ノ中央漸々膨突シ之ヲ側傍ヨリ見ル片ハ圓錐狀ヲ爲ス、通常一定ノ度ニ達スレバ停止シ、自ラ破裂スルガ如キハ罕レナレ凡て自ラ決シテ消退セズ故ニ豫後ハ不良ナリ

[一]角膜反射像ハ角膜ノ中央

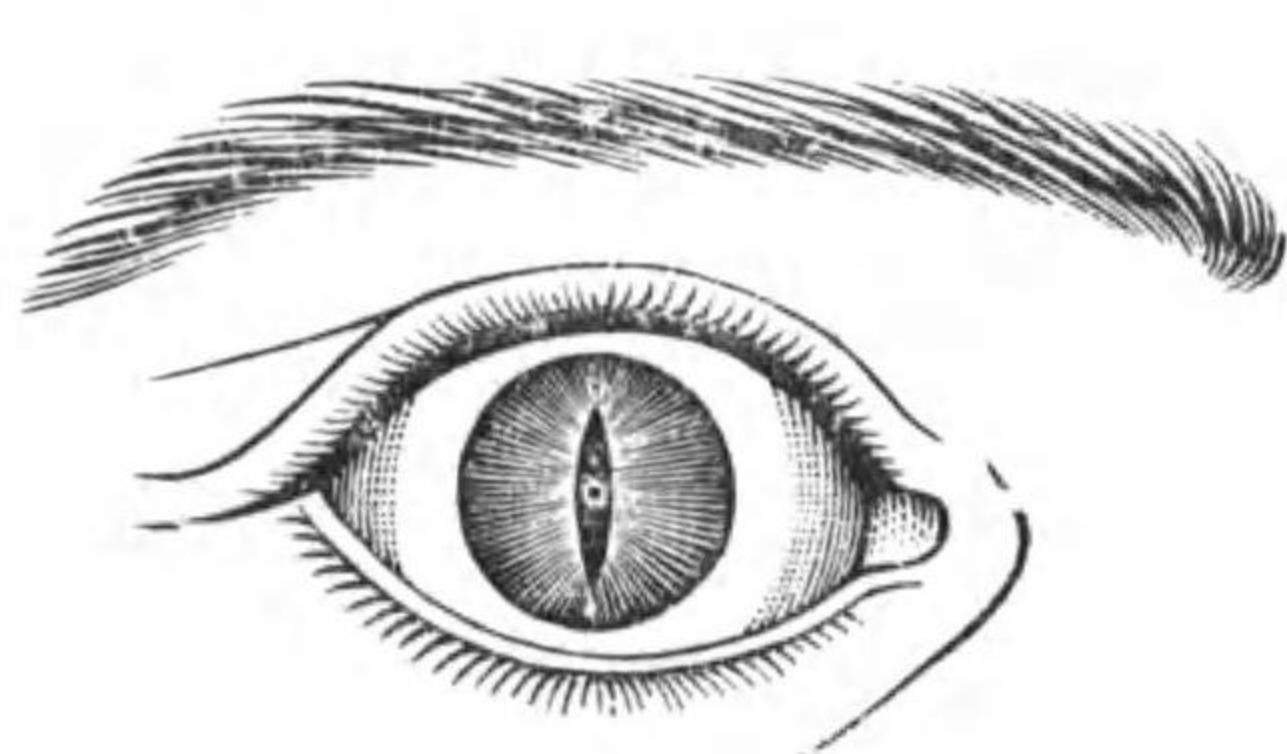


都テ弯曲強
小ナルノ理ニ由ル
レバ反射像愈々強
ケ

ニ向テ益々小ナリ、是レ中央ノ隆突部ハ周圍ヨリモ弯曲強キニ由ル、
〔二〕檢眼鏡ヲ以テ眼底ヲ照セバ其ノ照面ニ暗翳アルヲ見ン、是レ中央ハ光線ノ屈折異ニシテ眼底ヨリ反射シ來ル光線ノ他方ニ屈折スレバナリ
〔三〕視力ハ亂視ノ爲メ甚シク害セラル
〔四〕本病ノ未ダ輕度ナル際ハ其透明ナルヲ以テ特ニ注意ヲ注ガズバ、看過シ易シ

病理解剖 角膜ノ中央隆突スルハ是レ其ノ部ノ菲薄ナルヲ以テナリ、其ノ初メハ常ニ透明ナレバ、後ニハ多少溷濁ス

療法 〔一〕内壓減退ノ目的ヲ以テ持久的ニ「エゼリン」ヲ點眼ス(多クハ無効)
〔二〕虹彩切除ハ奏効ナシ
〔三〕古ヘボーマン氏ハ角膜ノ上下ニ切開ヲ施シ、此ニ虹彩ヲ鋸入セシメテ細長ノ瞳孔ヲ作リシコアリ(第百二十三圖)又圓鋸ヲ以テ角膜ノ中部ヨリ薄ク一部ヲ切除メ瘢痕ヲ作爲セリ然ニ障害一層増大ナラン
〔四〕グレーフエ氏ハ角膜ノ中部ニ於テ少シク表層ヲ切除シ、而メ後チ硝酸銀桿ヲ以テ時々中部ヲ腐蝕シ、強固ナル瘢痕ヲ作ラシメ、然ル後チ側ヘニ虹彩切除ヲ行ヘリ
〔五〕近來又小形



三百三十二圖

予ハヒルシユベル
ケ氏ニ從ヒ手術セ
キシモ餘リ効ナカリ

ノ焰白金ヲ以テ角膜ノ中部ヲ數回燒灼
シテ瘢痕ヲ作爲シ後ニ其部ニ入墨シ且
ツ側ヘニ假瞳孔ヲ作り良効ヲ收メタル
者アリ(ヒルシユベルグ)、氏凡テ是等ノ法
ハ其効皆ナ不定ニノ今日迄未ダ確然タ
ル名法ナシ。レールマン氏ハ(凹圓錐鏡)ヲ
用ヒテ多少効ヲ得タリト云フ、或ル場合
ニハ單ニ凹鏡或ハ凹圓柱鏡或ハ其複合
セル者ヲ以テモ多少視力ヲ復スルコア
リ、裂孔鏡モ視力ヲ増進スペシ併シ應用
上不便ナリ

球狀角膜

Keratoglobus

大角膜トハ生來只
角膜ノ大形ナル場
合ヲ云フ

本症ハ角膜全面ノ圓滿ニ膨脹セル者ヲ云フ、此病變ハ往々眼球全
體ニ及ボシ鞏膜モ膨脹シテ青色ヲ帶ビ内壓亢進セルヲ常トス其際

ハ名テ牛眼 Buphtalmus 又水腫眼 Hydrophthalmus

ト云ヒ角膜ハ膨
大ニメ透明ナルカ、或ハ中央ニ於テ溷濁ヲ現ハシ、前房ハ深ク、虹彩ハ間
々水晶體ト癒着シ、或ハ然ラズシテ振盪スルコアリ、是レ硝子體ノ常ニ
融解スルニ由ル、水晶體ハ屢々其ノ後皮質部ニ於テ溷濁ス、又乳頭ハ内
壓亢進ノ爲メニ多クハ陥沒ス

豫後 病勢一定ノ度ニ達シテ中止シ或ハ漸々增長シ遂ニ失明スル
ニ至ル

厚因 先天若クハ後天ニメ小兒ニ發シ間々一眼ニ止マルコアルモ
多クハ兩眼ヲ侵ス

療法 輕症ナレバ宜ク虹彩切除ヲ行ヘ、重症ナレバ其奏効不定ニシ
テ且ツ危險ナリ宜シク先ツ前鞏膜切開術ヲ試ムベシ(術式ハ綠内障ノ篇

(二述ア)

小角膜

Microcornea

角膜ハ通常其橫徑十一、七密迷ナレモ小角膜ニ在テハ先天性ニ諸徑皆

小ニメ他ノ先天異常ト屢々合併シ、殊ニ虹彩缺損或ハ脈絡缺損ト同時ニ來ル者多シ、視力ハ通常不全ニシテ震盪症ヲ有スル者多シ

第五章

角膜損傷

Verletzungen der Cornea

角膜破裂ハ罕
多クハ劇
原由ス
ナレナルナ

[一] 上皮剥離 ハ爪端小枝、異物等ノタメニ來ル者ニシテ其部ノ上皮ハ不正ニ缺損ス、然レバ全ク透明ナルカ或ハ溷濁アルモ僅微ニメ一見之ヲ知ルヲ能ハズンバ斜照法ヲ用ヒ、又角膜反射像ヲ映出シ、其正否ヲ檢セバ詳カナルヲ得ベシ、其他「フロレスチン」液ハ之ヲ以テ染色シ、證明スルニ最モ適ス、刺戟症ハ極メテ盛ンニメ結膜ノ充血羞明、流涙等ハ常ニ缺クルヲナシ

療法 防腐法ヲ施シテ綑帶スレバ上皮忽チ復舊シ、溷濁ヲ留メズシテ治スルヲ常トス

[二] 切創、刺創 ノ如キハ吾人ガ常ニ遭遇スルモノナリ、其ノ突貫幸ニ内部ノ諸膜ヲ傷ケズ、又病毒ヲ傳染セザル時ハ直チニ癒合シテ治ス

ルヲ常トス、蓋シ病毐傳染ニ兩途アリ、乃チ負傷ノ其病ノ器物ニ病毐附着セルカ、或ハ又病毐ノ結膜若クハ涙囊ニ存シ創傷ニ乘メ之ニ傳染スルニ由リ以テ膿瘍或ハ潰瘍ヲ生ズルモノトス、殊ニ涙囊炎アルキハ最モ危険ナリ

貫入セル深創ハ虹彩脫出ヲ來タシテ時ニ葡萄腫ヲ作リ或ハ水晶體ヲ傷ケテ白内障ヲ起シ創ノ大ナルニ至テハ水晶體並ニ硝子體ヲ脱出セシムルアリ、其ノ角膜ト鞏膜ニ亘レル創傷ハ毛様體ニ達シテ毛様炎ヲ起シ更ニ他眼ニ交感性眼炎ノ基トナルヲ多ケレバ極メテ危険トス、角膜ノ單純ナル傷創ニ於テハ上皮新生シテ速ニ先ツ其創間ニ入り、之ヲ充實シテ後チ創間ノ瘢痕初メテ成就スル者ト知ルベシ

療法 十分防腐法ヲ施シテ綑帶スベシ、虹彩脫出アリテ新鮮ナレバ其復位ヲ試ミ若シ復位セズンバ之ヲ切除スルカ或ハ「エゼリン」若クハ「アトロビン」ヲ點眼シテ固定綑帶ヲ施スベシ、但シ「エゼリン」ハ損傷ノ角膜周邊ニ在ル時ニ宜トス

本邦ニ比セ
ニハ石灰ノ
メテ多シ
貢傷極

(附錄) 角膜ニ些少ノ貢傷アリテ已ニ全ク治シタル後チ又其部ニ小泡起リ破
レテ意外ノ刺戟症ヲ誘發シ極メテ再發ノ傾向アリ名ケテ再發性癥痕
角膜炎 Recidivende Narbenkeratitis ト云フ、是レ恐ラクハ上皮ノ補修完全ナ
ラスノ或ル小故ニ因リ刺離セルニ基クナラン

[三] 腐蝕并ニ燒傷 是レ硫酸、硝酸、鹽酸、安謨尼亞、石炭酸、苛性加里、石灰等ノ腐蝕又爆發、蒸氣、熱湯、飛花等ノ燒灼ニ由ル者ニメ、其輕キハ僅力ニ角膜上層ノ潤濁ニ止リテ治スルモ、其深キハ壞死シテ白色ナル上層組織、其下層ヨリ剥離シテ後チ瘢痕ヲ結ブ、又甚シキハ腐蝕カ角膜ノ全層ニ渡リ之ヲ壞死ニ陷レ、其脫離スルニ及ビ角膜全ク破潰セラル、ニ至ル、然レモ豫メ其淺深ヲ確定シ難シ、歸スル所、損傷大部ナレバ多クハ失明スルヲ常トス、同時ニ結膜モ多少害ヲ被リテ腐蝕サレ壞死シテ後チ角膜ト結膜ト癒着シ成形術ヲ要スルコアリ

療法

腐蝕並ニ燒傷ニ於ケル治方ハ結膜損傷篇ニ於テ看ルベシ

[四] 異物 是レ鐵ノ破片最モ多シ、其他硝子片、石片、炭粉、或ハ間々、豆皮、蟲翼等ニ因ルコアリ、鐵片ハ多クハ飛火トシ眼中ニ入り角膜ニ穿入シ、

鐵ノ飛火ハ化學上
者得ア化鐵ニシテ
者ト知ルベシ

常ニ酸化鐵トナリ殘留ス、而テ鐵片ノ周圍ハ酸化鐵ニ由リ角錆色ニ染
レル量輪ヲ以テ繞園ス

刺戟症ハ常ニ甚シク眼球ハ鮮紅色ヲ呈シ頻リニ流涙ス殊ニ日本ニ於
テ鷄冠石ノ許多竄入シ久シク刺戟ヲ止ムル者多シ

炭粉、焰硝末ノ如キハ毫モ刺戟症ヲ起サズシテ殘留スル者アリト雖

又其周圍ニ溷濁ヲ起シ、異物自ラ脱去スルヲ少カラズ

[一] 先ツ充分「コカイン」ヲ點眼シ、異物針ヲ以テ之ヲ搔去スペシ

[二] 異物若シ固着シテ容易ニ除去シ難キ時ハ二三日間異物ノ周圍ニ白
暈ノ起ルヲ待チ之ヲ除去セバ容易ナリ
[三] 異物若シ深入シテ其尖端前房ニ達スレバ豫メ角膜縁ヨリ前房ニ鎗狀刀ヲ送入シ其ノ前面ニテ、
異物ヲ後方ヨリ前方ニ押シ乍ラ少シク異物ノ近傍ニ於テ角膜ヲ前面
ヨリ切開シテ之ヲ抜去シ、異物鐵片ナレバ電氣磁石ヲ以テ其抜去ヲ試
ムベシ (磁石ノ圖ハ硝子體篇ニ出ツ)

第六章

考スヘシノ部ヲ參

角膜腫瘍 Geschwülste der Cornea

[一] 角膜腫瘍ハ角膜縁ヨリ或ハ結膜ヨリ發生シテ角膜ニ蔓延スル者ニシテ通常ハ癌腫或ハ肉腫ニ色素性ノモノアリ

療法 初メニハ之ヲ切除或ハ焼盡シ得レ凡再發ナシトセズ、確實ナル根治法ハ眼球摘出ヲ行フニアリ

[二] 角膜ニ又皮様腫 Dermoidヲ生ズ、通常外下半部ニ坐シ、間々眼瞼缺損ト合併ス(由來ハ結膜腫瘍篇ニ於テ述ベリ)

療法 角膜ヨリ切除シ後チ其部ニ白翳遺残セバ入墨ヲ行フベシ

第六編 眼膜諸病

解剖要領

眼膜ハ主トメ結織纖維ノ縱横錯綜ニ由テ構成セル
一種ノ硬膜ニメ、又彈力纖維ヲ含ミ以テ強大ナル外衝ニ抗シ、又内壓ノ亢進ニ對シ一定度マデ緊張ヲ許シ、後部ハ視神經ノ周圍ニ於テ最モ厚

ク大凡ソ一密迷ヲ算シ、眼筋ノ着部ハ最モ薄ク、角膜近傍ニ至リテ復タ硝厚ヲ加フ。眼膜ハ其内面ヲ除キ一般ニ色素乏シクノ白色ナリ、故ニ又白膜ノ稱アリ、唯夕時トシテ色素ノ含蓄ニ由テ或ハ青色或ハ褐色ノ一大色素斑ヲ呈ス、殊ニ血管ノ出入部ニ多シ、本邦人ニハ數々角膜縁ニ沿ヒ色膜ノ蓄積シ褐色ノ輪アルヲ見ル。眼膜ハ概シテ血管ニ乏シト雖モ後部ニ在テハ乳頭附近ニ之ヲ周擁セル一簇ノ血管アリ、名ケテチン氏眼膜血管輪ト云フ、前部ニハ又角膜ノ周擁ニ於テ血管簇集ス、而テ該部眼膜ノ深部ニ當リ虹彩ノ根ヲ沿フテ一周セル一大管アリ、靜脈ヲ通ス、之ヲシユレンム氏管ト云フ、蓋シ其用ハ前房水排泄ノ爲メニアリ

老人ノ眼膜ニ石灰
於及沈着セルヲアリ
テモ然リ眼球ニ

漢家
ト云云ハ
眼膜
或ト云云
ヒヒ虹角膜
孔孔彩膜ナ
ト云云
又角膜
孔孔黃鳥白
毛毛仁暗仁
白雲仁暗仁

第一章 睫膜炎症

睫膜炎ハ睫膜ノ前部ヲ犯シ、睫膜ノ表層ヲ侵セバ、之ヲ上睫膜炎ト云ヒ。睫膜ノ深層ヲ犯セバ、即チ單ニ睫膜炎ト云ヒ。或ハ其能ク脈絡膜炎ト合併スルヲ以テ特ニ又前睫膜脈絡膜炎 Sclerchorioiditis anterior

[一] 上睫膜炎 Episcleritis

本症ハ睫膜表層ノ血管ニ富メル粗鬆ナル組織ノ炎症ニメ角膜ニ接近シ、限局性帶青赤色ノ炎症ヲ呈シ、其盛ニ發セル時ハ多少隆起メ、壓迫スレバ疼痛アリ、又壓迫セサレバ時トノ患者自ラ劇甚ナル疼痛ヲ訴フルアリ。本症ハ其炎症、眼球結膜ノ下ニアレバ、ヨシヤ患部ノ眼球結膜共ニ充血シ、血管集注セルモ、其血管ハ病竈ノ上ヲ越ヘ居レバ、結膜ト共ニ移動セシメ得ベシ。

経過

本症ハ四週乃至八週程ニメ消失スルヲ常トス、破壊シ又ハ化膿スルガ如キコトナシ、其消失スルヤ全ク痕跡ナキアリ、又睫膜稍々萎

縮シ青色(陶器色)ノ斑點ヲ留メ、結膜多少シコニ固着スルニ至ル。本症ハ別ニ有害ノ餘症ヲ残サ、ルモ好テ能ク再發シ、一斑失スレバ、又他所ニ一斑起リ終ニハ角膜ノ周邊ヲ一週スルニ至ル名ケテ遊走性上睫膜炎 Episcleritis migrans ト云フ。

本症ハ輕重色々ニメ極ク輕キ者ハ數日間僅ニ充血潮紅シテ消失シ、殆ト診斷ニ困却スルアリ。

定期暫發性上睫膜炎 Episcleritis periodica fugax ハ殆ント定期的ニ何回モ發作シテ、睫膜ノ一部充血シ、時トシ浮腫ヲ來スニ至ルモ發作數日ニメ止ムヲ以テ特種トス。

原因

不明ナル者アリ、又時ニ確ニ健麻質斯痛風等證明セラル。〔二〕概シテ二十歳前後ノ婦人ニ多シ、然レバ其原因ハ多クハ不明也。〔三〕老齡ノ婦人ニ來レル者ハ關節健麻質斯ヲ訴フル者多シ。

療法

健麻質斯的症候アラバ、撒里矢兒酸或ハ「アンチヘプリン」等ヲ内用セシムベシ。〔二〕原因不明ナルモ兩方ヲ試用シ或ハ灰白軟膏沃剥

予ハ化膿セル者ナ
タニアラズ甚ダ
見タリ故ニ全クナ
ナリ

等ヲ試ムベシ。〔三〕局所療法トシ炎症強ヨク、疼痛等アラバ「アトロビン」温罨法、又顎頸ニ水蛭ヲ貼スベシ、輕症ナレバ黃降汞軟膏ヲ塗入シテ摩擦シ吸收ヲ試ムベシ、速治法ハ病竈ヲ焼灼スルニアリ、昇汞ノ結膜下注射モ効アリアダミユツク氏ハ患部ノ亂切ヲ可トセリ、單ニ患部ノ眼球結膜ヲ切除シテモ効アルヲ多シ。

〔二〕鞏膜炎 Scleritis

本症ハ鞏膜實質ノ炎症ニシテ、コ、ニ細胞浸潤ヲ來タシ能ク脈絡膜炎ト合併シ前鞏膜脈絡膜炎トモ名稱サル而テ其症狀ハ角膜ノ近隣ニ於テ帶青紅色ノ充血部アリ、限局性或ハ汎發的ニ前鞏膜部ヲ侵スニアリ、炎症盛ナル際ハ鞏膜肥厚シテ多少隆起スレバ化膿スルガ如キハ甚ダ罕ナリ、疼痛ハ不定ニメ全ク之レナキモアリ又疼痛劇甚、安眠成ラザル者サヘアリ。

経過 急性ノ者アレモ、概シテ慢性ノ者多ク、概シテ全身ノ惡液質ニ基キ、再發ノ傾向アリ、兩眼共侵サル者多シ、炎症ノ退去スルヤ鞏膜菲薄

トナリテ青色ヲ帶ビ、内壓ニ抗シ得ズメ限局性カ或ハ角膜周擁一面膨脹スルニ至リ即チ前葡萄腫 Staphiloma anterior ヲ形成ス、時トシテハ大鼓ノ鈍ノ如ク角膜ノ周圍ニ點々青ク突隆スルアリ。

合併症

本症ハ虹彩炎又脈絡膜炎ヲ起シ視力ヲ害スル外角膜ニ能ク溷濁ヲ起スニ至ル、是レ硬化性角膜炎ニメ其甚シキヤ角膜全部瘢痕狀ニ溷濁シ、失明セシムル恐アリ(角膜硬化症ヲ再見スベシ)其他前葡萄腫ノ起レル際ニハ内壓亢進シ、乳頭陥凹シ、失明スルニ至ル。

原因 〔一〕本病ハ腺病質、結核質等虛弱ノ婦人ニ多クシテ、其他月經異常、先天梅毒等モ或ハ關係スルコアラン。確證ナシ、年齢ハ十五六歳ヨリ二十五歳頃ノ間ニ最モ多ク、殊ニ病長ガタ又的確ナル療法モナク、ミスカ遂ニ妙齡ノ婦人ヲ失明セシムルノ不幸アリ 〔二〕角膜實質炎ニ合併シテ鞏膜炎起リ葡萄腫ノ發セル例アリ。

療法

〔一〕體質不良ノ結果ニ由レバ、確効ノ法ナク、只内服トシ沃鐵舍利別肝油等ヲ試用スルニ止ル 〔二〕炎症盛ナル際ハ「アトロビン」温罨法

必要ナリ、又病竈ニ對シテハ焼灼法、ハ最モ良効アリ、無論再發ハ防グニ足ラズ

第二章 眼膜膨脹症

眼膜葡萄腫 Scleral-staphiloma

此症ハ眼膜菲薄トナリ内壓ニ對シテ抵抗力ヲ減スルカ或ハ内壓亢進シテ眼膜ノ生理的抵抗力ノ最モ弱キ局部即チ血管ノ出入部ヲ壓出膨脹セシムル者ヲ云フ

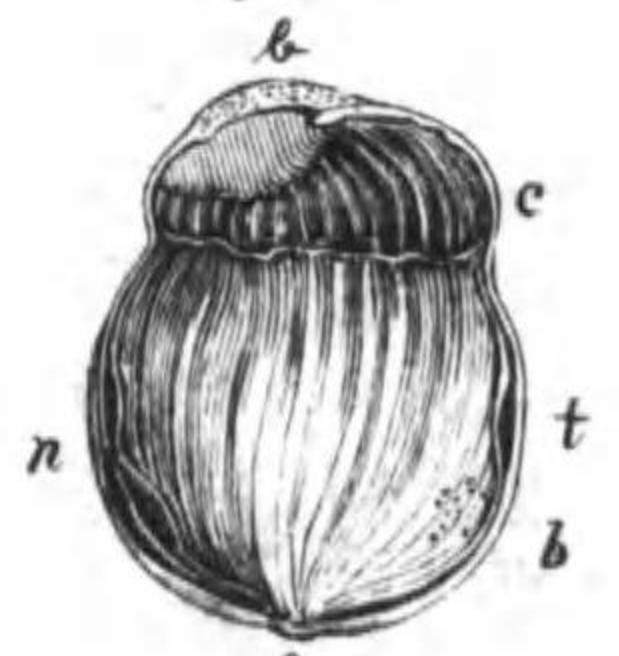
〔一〕全眼膜膨脹症 Totale Scleral-ekktasie

純然タル全膨脹症ハ水腫眼ニ見ル所ナリ抑_モ水腫眼 Hydrophthalmus 即チ牛眼ハ其性質上少年期ノ綠内障ト看做スペキ者ニシテ先ツ内壓亢進シ從テ眼膜ノ總體膨脹シ眼珠ハ稍々突出シテ青色ヲ帶ブ、是レ幼者ニ在テハ眼膜猶薄弱ニシテ大人ニ於ルガ如キ抗抵抗力ナキヲ以テナリ。此ノ如キ際ニハ角膜モ亦增大シ所謂球狀角膜ヲ爲スヲ常トス

〔二〕局發眼膜膨脹症 Partielle Scleral-ekktasie

此症ハ眼膜ノ前中後ノ三所ニ發ス [一] 其後部ニ發スル者ハ通常近視ニ見ル所ニメ所謂後葡萄腫 Staphiloma posterior 是ナリ [二] 其中部ニ來レル者ハ赤道葡萄腫 Staphiloma aequatorialis ト爲ス、是レ多ク

綠内障ノ末期ニシテ已ニ失明セル眼ニ見ル所ニメ内壓亢進ヲ以テ本トナス [三] 其前部ニ生ズル者ハ前葡萄腫 Staphiloma anti-cumトナス、其正ニ毛様部ヲ侵ス者ヲ毛



圖五十二百第

毛様葡萄腫ハ
於生葡萄テ
アリハ知
テ上管管
ノ頂來ル
模毛様
腫ハシ

中填葡萄腫 Intercal staphilom ト云フ、後者ニ在リテハ眼膜ニ現レ
來ル毛様血管カ葡萄腫ノ中央ヨリ起ラズノ、其後方ヨリ出ヅルヲ以テ
前者ヨリ鑑別ス、若シ前眼膜部一樣ニ葡萄腫状ニ變ゼル際ハ勢ヒ眼軸
前後ニ伸長シ、眼ハ近視状態ヲ呈ス

原因 葡萄腫ハ單ニ内壓亢進ノ結果ニ由ルカ、或ハ先ツ前部ニ鞏膜炎脈絡膜炎等ノ炎症アリテ鞏膜菲薄トナリ内壓亢進之ニ加ルニアリ、

而メ葡萄腫ノ起ルヤ經過緩慢ニシテ著明ノ炎性症狀ナク内壓漸々亢進シ、末ニハ遂ニ失明ニ至ルヲ常トス、然レバ其經過中間々甚シキ内壓ノ亢進發作シ以テ一時結膜ノ充血、前額ノ疼痛等併發スル者アリ、
療法 内壓亢進ヲ防グニ於テ確實ナルハ唯ダ虹彩切除アルノミ、然レバ已ニ發育セル鞏膜葡萄腫ニハ無効ナルヲ常トス、依テ葡萄腫ヲ切開シテ其一部ヲ切除シ兩創縫合シ綑帶ヲ施セバ可ナラン、若シ其眼球ニシテ所々凹凸ヲ呈シテ外觀醜形ナレバ宜ク眼球摘出ヲ行フベシ、然レバ患者之ヲ拒絶セバ角膜葡萄腫ニ述べタル如ク眼球ノ前部ヲ切除スベシ

第三章

鞏膜損傷

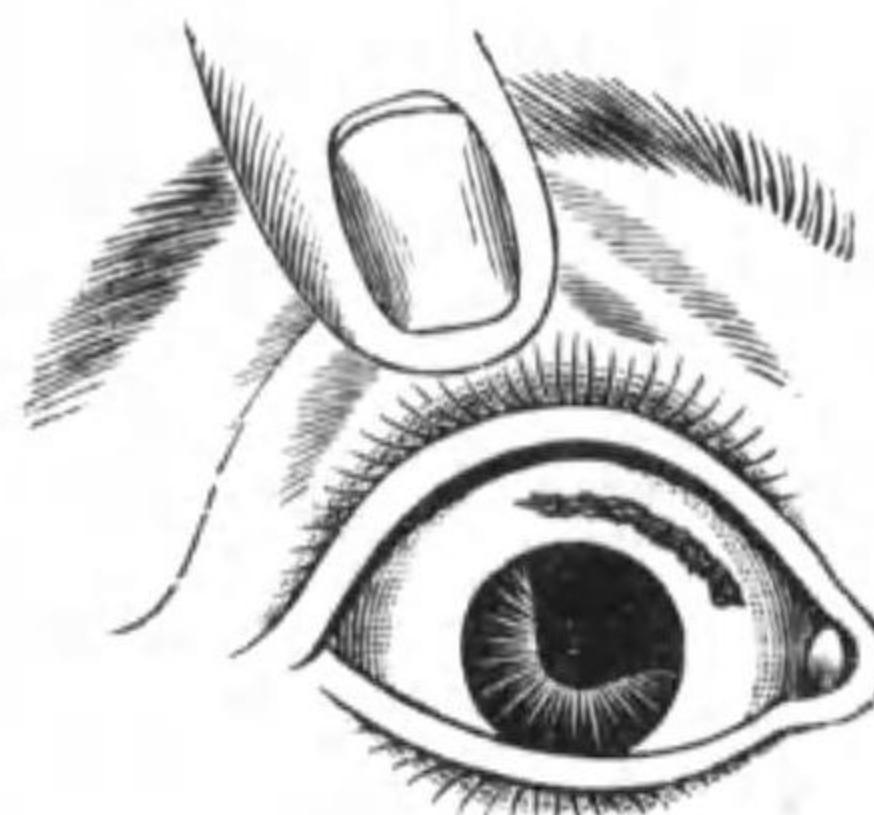
Verletzungen der Sclera

鞏膜ノ外傷ハ眼球ノ前部ニ多シ、其新鮮ナル者ニ發見スル所ノ症狀ハ

- [一]ニハ内壓ノ減降ニシテ漿液ノ漏出ニ因ル、若シ其外傷ニメ前房ニ迄デ及ベルキハ房水漏出シテ前房淺ク或ハ全ク消亡ス [二]ニハ傷創ノ小ナル者ニ在リテハ創中毫モ異常ヲ呈セズト雖ニ、其稍大ナル者ニ在リテハ虹彩、毛様體若クハ脈絡膜、網膜等脱出シテ創間ニ簪入シ或ハ又ソコニ硝子體ノ脱出シテ玲瓏タルヲ見ン [三]ニハ前房ニ出血アル者多シ、若シ硝子體ニ出血アラバ之ヲ水晶體ノ後方ニ認ムルナラン、
- 経過** 創口ノ大小ト部位ニ依リ多大ノ相違アルベキハ勿論ナリ
- [一]創口小ナレバ創縫全ク癒着シテ何ノ故障ナク治癒スペシ [二]又、虹彩、毛様體、脈絡膜若クハ硝子體ナド創口ニ脱出シテ瘢痕ト癒着スルヲアラン
- [三]虹彩又ハ水晶囊ガ鞏膜ノ創口ニ簪入シテ創縫相癒着スルヲ得ザルトキハ瘢痕ヲ結フト雖ニ強固ナラズシテ多少結膜下ニ漿液漏逸シ往々僅許ノ浮腫ヲ呈ス、之ヲ囊腫様瘢痕 Cystoide Vernarbung ト云フ
- [四]創口ヨリ黴菌輸入シテ内部ニ急性或ハ慢性ノ化膿ヲ來ス
- [五]最モ不快ナルハ成形性虹彩毛様炎ヲ發スルニアリ、殊ニ

毛様部ノ損傷ハ此危険最モ甚シキノミナラズ他眼ニ交感性眼炎ヲ誘發シ易キ憂アリ。

原因 [一]異物ハ鞏膜ノ損傷丈ケデナク、多クハ眼球中ニ竄入スルヲ以テ其負傷危險ナリ(宜シク硝子體篇ヲ參觀ス可シ) [二]鞏膜ノ外傷中最モ緊要ナルハ鞏膜破裂症 Scleralruptur (第百二十六圖)ニシテ近ク角膜緣ニ沿フテ弓狀ニ走行シ、角膜ニ入ルハ罕ナリ。原因ハ拳曲、牛角、棍棒等ノ鈍體衝突ニ由ルモノニメ創口ハ常ニ受傷方向ニ直角セル方面ニアリ、鞏膜破裂ノ角膜上緣ニ接シテ多キハ受傷方向ノ前下方ヨリ後上方ニ走ル者多ク從テ此線ニ直角セル前上方ニ破裂ノ多キナリ。アルト氏ノ説ニ眼球受傷スレバ其受傷方向ニ壓迫セラレ鞏膜ハ之ト直角ノ方向ニ伸張シテ其抵抗力最モ弱キ前鞏膜部破裂スルニアリ



圖六十二百第

トセラル。鞏膜破裂ハ受傷威力ノ大小ニ準シ、種々輕重ノ合併症アリ、虹彩ノ其創間ニ插入スルハ最モ多シ、時トシ水晶體ハ全ク脱出シ或ハ半バ創間ニ插入シ或ハ又結膜ノ破レザリシ爲メ其下ニ水晶體ノ轉位スルアリ、眼球中ニハ多クハ同時ニ出血アリ、當初眼中ノ詳細ヲ詳ニスルヲ得ズ、此鞏膜破裂症ハ其部位ニ依リ受傷ノ方向ヲ示スヲ以テ裁判醫學上極メテ緊要ナル負傷トス

療法

[一]新創ニシテ其間ニ插入スル所ノ者ナクバ宜シク防腐法ヲ施シテ鞏膜創縫ヲ縫合シ、或ハ單ニ結膜ヲ縫合シ防腐綑帶ヲ施スベシ
[二]虹彩脱出シアレバ宜シク之ヲ切除シ、水晶體ガ結膜下ニ脱臼シアレバ結膜部ヲ截割シテ之ヲ除去ス
[三]負傷大ニメ到底治癒ノ望ミ無キ片ハ眼球摘出法ヲ施シ、患者若シ之ニ應ゼズンバ防腐法ヲ十分ニ施シテ綑帶シ以テ其經過ヲ観察シ、徒ニ姑息療法ヲ守リテ交感性眼炎ノ來ルヲ座視シ嗜臍ノ悔ヲ招ク勿レ

第四章

鞏膜腫瘍 Geschwülste der Sclera

テ膜ナ因腫上
膜腫リハノ鞏膜
チニ予特ル組織
漏接ハ發ルトア中
セ切頃ハアニシ小傷原膜
リセ膜ハ
予蓋ノ又
シチ以上最
極クテ鞏膜小
罕切除ニナセ坐
ナリセ膜ハ
予蓋ノ又
シチ以上最
極クテ鞏膜小
罕切除ニナセ坐
ナリ

(一) 鞏膜ノ原發性腫瘍ハ甚ダ稀レニメ唯ダ角膜縁ニ接シ先天性ノ皮様
腫其他肉腫、上皮癌ノ來ルコアルノミ、他部ニハ纖維腫、肉腫、骨腫等ノ發
スルアリ (二) 炎性腫瘍中護謨腫、結核、結節癩等ハ罕レモ結
膜ノ近隣ニ發ス、殊ニ上部ノ鞏膜ニ起リテ結節ヲ作り或ハ破レテ潰瘍
ヲ爲ス (三) 鞏膜ノ續發性腫瘍ハ眼球中ヨリ破レ來ル肉腫或ハ膠腫ノ

屬ナリ

訂新眼科學上卷終

全全全全全全明治
三三三三二二二二
十十十十十十十
四二一九年八七六年
年年年年年年年
二八三二三三四九九
月月月月月月月
廿八四八廿廿十一
五五日日日日日日
八七六五四三再發印
版版版版版版版
發發發發發發行
行行行行行行行

全全全全全全
四四三三三三三
十十十十十十
十九八七六年
年年年年年年
八八十二月
月月月月月月
廿廿三一月月
八五日印廿廿一
四版發行刷行行行

正價金壹圓六拾錢

著者兼發行者

河本重次

東京市麹町區富士見
町四丁目四番地

※※※※※
所 版 權
※※※※※

印 刷 者

中 村 政 雄

印 刷 所 報 文 同
右 文 同
所 社

東京市麹町區富士見
町四丁目一一番地

林書捌賣

東京市日本橋區通三丁目

丸善書

同本鄉區湯島切通坂町

南江堂支

同本鄉區春木町

南江堂

同本鄉區湯島切通坂町二丁目

半田屋書

同本鄉區湯島切通坂町

金原寅

同神田區鍛冶町

文詳

大阪市東區心齋橋筋一丁目

朝香屋書

作

松村九兵衛

堂店



終

